熊本県文化財調査報告　第37集

下城遺跡Ⅰ

――国道212号改良工事に伴う文化財調査――

1979

熊本県教育委員会

熊本県文化財調査報告　第37集

下城（しもんじょう）遺跡 I

——熊本県阿蘇郡小国町大字下城字下城——

1 9 7 9

熊 本 県 教 育 委 員 会

序　　文

交通網の整備は、生活文化の向上・地域の産業開発のため重要なことであります。しかし、これらの計画路線内には郷土の歴史のあかしとなる貴重な遺跡が埋蔵されている場合が数多くありますので、でき得る限り保存に努めておりますが、やむを得ず破壊される遺跡については、記録保存のための調査を実施しております。

このたび、県土木部において国道212号の改良工事が計画され、昭和52・53年にわたり現地の発掘調査を実施いたしました。計画路線内には、中世城跡「下城」があり、地元では広く知られた地域のシンボル的存在であります。調査の結果、中世城跡のほか先土器・縄文時代の各遺構が発見され、ことに先土器時代の調査は広く専門学者等の注目するところでありました。

調査にあたり、文化財に対する理解と協力をいただきました県土木部、そして地元の小国町下城地区の方々、町教育委員会、さらに調査について指導助言を賜わった諸先生方に対して感謝いたします。

本書が埋蔵文化財に対する認識と理解、さらに学術研究上の一助になれば幸いです。

昭和54年3月31日

熊本県教育長　　井　本　則　隆

例　　言

1．本報告書は、昭和52年より昭和53年にわたって発掘調査を実施した、国道 212号の改良工事に併う小国町下城遺跡の調査報告である。

2．現地の埋蔵文化財の発掘調査は、熊本県教育委員会が実施し、文化課参事緒方勉、調査員の田中寿夫が主としてこれを担当した。

3．現地での調査、実測、写真撮影については緒方と田中があたつた。

4．出土遺物の整理は県文化財収蔵庫で行った。

5．遺構遺物のトレースは主として田中が行った。

6．各章節の執筆分担は「先土器時代」と「縄文時代」は田中と緒方が、「下城と周辺城跡」を大田幸博が執筆し、その他は緒方が執筆分担した。

7．本報告書の編集は緒方があたり、田中がこれを補助した。

調査の組織

調査責任者	文化課長	岩崎辰喜	(昭和53年度)
	前文化課長	合志太助	(昭和52年度)
	文化課長補佐	真弓袈裟勝	
	前文化課長補佐	田中　繁	
	文化財調査係長	隈　昭志	
調査事務担当者	文化課管理係長	望野正雄	
	文化課主事	石原昭宏	
	土木部道路建設課長	中山昭三郎	
	土木部道路建設課技師	増見豊彦	
調査現場担当	文化課参事	緒方　勉	(発掘調査)
	文化課調査員	田中寿夫	(発掘調査)
	文化課技師	桑原憲彰	(踏　査)
	文化課技師	大田幸博	(踏　査)
地質調査	九州農政局地質官	籾倉克幹	
調査の指導・助言	熊本大学名誉教授	松本雅明	
	熊本大学教授	白木原和美	
地元協力者	小国町教育委員会　南小国町教育委員会		
	小国町大字下城本村・坂下地区の皆さん		
	北里達之助、松崎　指、北里誠一郎、河津泰雄、有住典三の各氏		

目　　次

一　序　　説 …… 1頁

1　調査にいたるまで …… 1

2　下城遺跡の位置と環境 …… 3

3　下城遺跡の試掘調査 …… 4

二　調査の経過 …… 8

三　下城遺跡の調査 …… 17

1　先土器時代 …… 18

(1)　遺　　構 …… 19

(2)　遺　　物 …… 26

(3)　先土器時代のまとめと若干の考察 …… 38

2　縄文時代 …… 39

(1)　遺　　跡 …… 39

(2)　遺　　物 …… 42

(3)　縄文時代のまとめと若干の考察 …… 55

3　中世城跡 …… 56

(1)　第Ⅰ・第Ⅱ調査区の発掘 …… 57

(2)　堀切と土塁 …… 62

(3)　下城と周辺の城跡 …… 65

四　ま　と　め …… 71

追　　補

下城遺跡のC－14による年代測定結果について …… 73

付　篇

付一　下城遺跡の火山灰と地質環境　　籾倉克幹

1　はじめに……77頁

2　下城遺跡および周辺の地形・地質の概要……77

3　下城遺跡の火山灰層序……81

(1)　表　　土……81

(2)　洪積火山灰……81

(3)　新期ローム……82

(4)　旧期ローム……82

4　熊本周辺遺跡の火山灰層序との対比……82

5　ま　と　め……86

付二　下城周辺の関連遺跡（資料）　　緒方　勉

花山の五輪塔群他……87

下城不動尊……91

坂下の五輪塔……91

笠　塔　婆……91

高屋敷と古井戸……94

佛山の奉讀誦経塔……95

十三塚と六地蔵……96

法成寺の梵鐘……96

付三　加藤清正と下城氏　　松本雅明

1　阿蘇氏と清正……103

2　加藤氏と下城氏……107

3　加藤氏と中世領主……112

挿 図 目 次

第１図　下城遺跡位置図……巻頭
第２図　下城遺跡位置と環境……２頁
第３図　城跡と発掘区設定図……13
第４図　土層断面図……15
第５図　先土器時代調査区発掘深度図……20
第６図　先土器時代調査区遺物出土状況図……21
第７図　先土器時代調査区器種別分布図及び遺構図……23
第８図　集石および柱穴状ピット平面図・断面図……25
第９図　ナイフ形石器……29
第10図　尖 頭 器……30
第11図　尖頭器・彫器・削器……31
第12図　削器、使用痕の観察される剝片……32
第13図　石　　核……33
第14図　石核・剝片……34
第15図　第Ⅰ調査区Ⅲ層遺物出土状況……40
第16図　第Ⅱ調査区Ⅲ層遺物出土状況……41
第17図　第３・４号集石遺構……42
第18図　第Ⅲ層出土押型文土器(1)……47
第19図　第Ⅲ層出土押型文土器(2)……48
第20図　第Ⅲ層出土押型文土器(3)……49
第21図　第Ⅲ層出土撚糸文・条痕文土器……50
第22図　第Ⅲ層出土撚糸文・山形文・無文土器……51
第23図　調査区表面採集縄文土器……52
第24図　第Ⅲ層出土の石器……53

第25図　中世土坑と溝様遺構平面図……57頁
第26図　中世土坑……58
第27図　土墨と堀切……60
第28図　土墨土層断面図……61
第29図　歴史時代の遺物……63
第30図　鳶ノ尾城周辺地形図……67
第31図　鳶ノ尾城見取図……67
第32図　木戸城周辺地形図……68
第33図　木戸城見取図……68
第34図　小鶴城周辺地形図……69
第35図　小鶴城見取図……69
第36図　小国町下城遺跡付近地質図……76
第37図　下城遺跡東崖に懸かる下城滝……78
第38図　アカホヤ火山灰と姶良火山灰の分布……83
第39図　下城遺跡と熊本周辺火山灰の対比……84
第40図　下城大公孫樹周辺石塔群……87
第41図　小国町下城遺跡周辺所在五輪塔図……88
第42図　六地蔵幢……90
第43図　下城笠塔婆……93
第44図　高屋敷と古井戸見取り図……95
第45図　佛山の奉読誦経塔(拓本)……95
第46図　法成寺の梵鐘……97
第47図　北条三代墓の周辺……99
第48図　北条三代墓……100
第49図　満願寺経杲和尚の墓と六地蔵幢……101
第50図　千辺の経塔(拓本)……102

表 目 次

表 1　柱穴状ピット計測値……35頁

表 2　層位別遺物出土数……36

表 3　層位別石器出土数……36

表 4　層位別石器器種別出土数……36

表 5　石器類所見……37

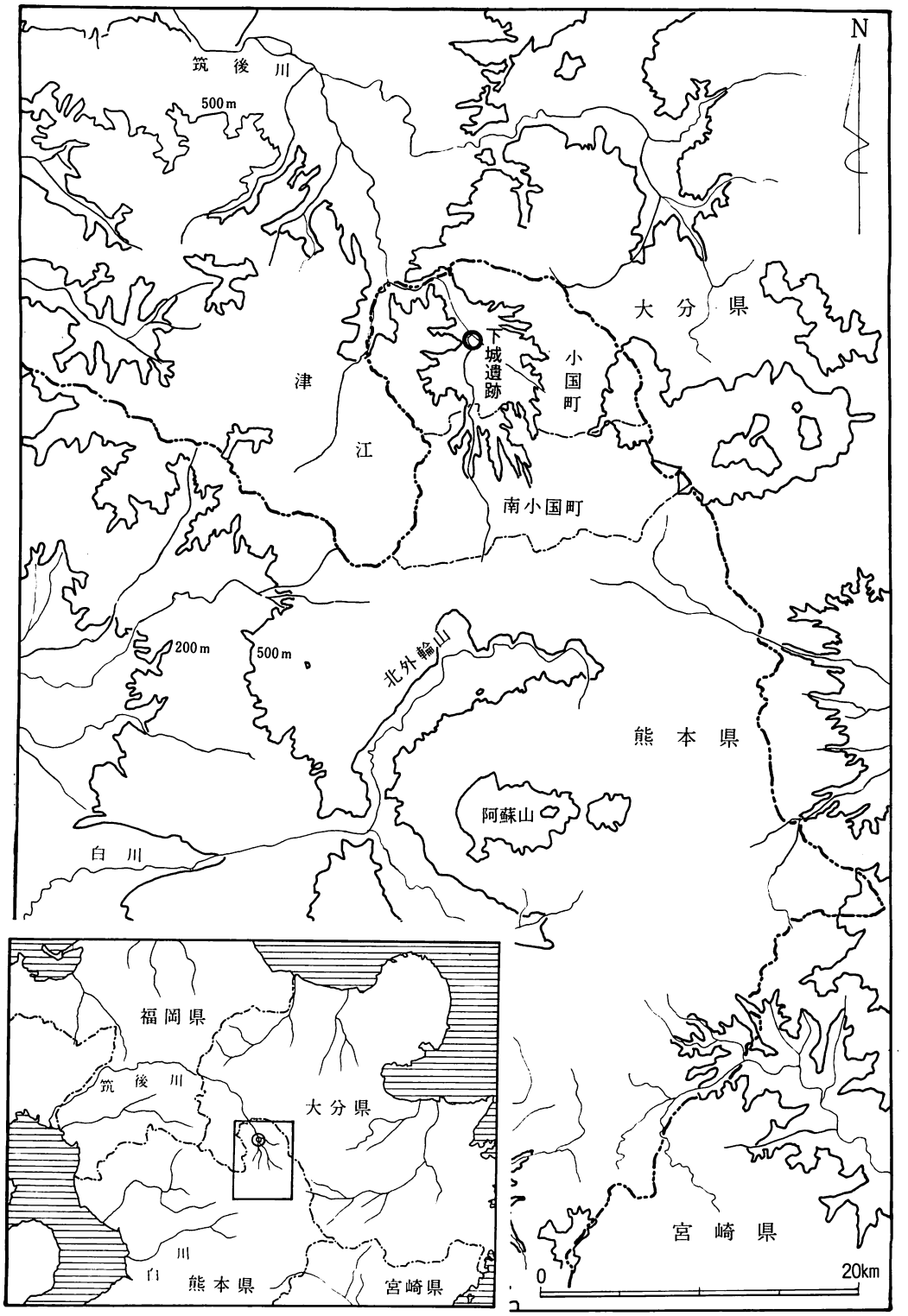
表 6　縄文土器種類別出土数……54

表 7　歴史時代遺物種類別出土数……64

表 8　下城遺跡の火山灰層序と特性一覧……79

図 版 目 次

図版１　下城遺跡の景観と集落景観……114頁
図版２　下城の集落景観と下城神社……115
図版３　先土器時代の遺構と遺物出土状態……116
図版４　先土器時代の石器……117
図版５　下城遺跡出土石器……118
図版６　礫群発見状況(縄文)……119
図版７　遺物出土状態と調査風景……120
図版８　集石遺構(縄文)……121
図版９　出土遺物縄文土器１……122
図版10　出土遺物縄文土器２……123
図版11　下城の中世遺構……124
図版12　下城遺跡出土中世遺物他……125
図版13　下城不動尊１(本尊)……126
図版14　下城不動尊２(脇侍と銘文)……127
図版15　下城神社奉納銅戈と面……128
図版16　下城周辺の塔碑１……129
図版17　下城周辺の塔碑２……130
図版18　梵鐘と塔碑……131
図版19　下城周辺の塔碑他……132
図版20　小国の塔碑……133
図版21　下城周辺の中世城跡他……134
図版22　満願寺の石塔群……135
図版23　下城遺跡の見学会と下城周辺出土遺跡……136


N
筑後川
500m
大分県
下城遺跡
小国町
津江
南小国町
200m
500m
北外輪山
熊本県
阿蘇山
白川
福岡県
筑後川
大分県
白川
熊本県
宮崎県
宮崎県
0
20km

第1図　下城遺跡位置図

一　序　　説

1　調査に至るまで

昭和51年３月11日付をもって県土木部（主管課道路建設課）より、阿蘇郡小国町下城地区に国道212号の改良工事を計画している、そこでこの地区について文化財はないかとの照会があった。これを受けて県文化課は、道路建設課へ次の回答をした。

「当該地には埋蔵文化財下の城（裏の城）が存在する。下の城は南北朝のころ下城経隆によって築城されたと伝えられる城跡で、歴代下城氏が居城した。……典型的な中世期の丘城で、本丸部分には井戸跡と伝えられる個所であり、城との関連ある遺物が散在している。

以上のように中世城の遺構を知る上に大変貴重な遺跡であるので、現況のまま保存できるよう路線の変更をされることが望ましい。やむなく工事を実施される場合は、事前に県教育委員会および地元教育委員会と協議を行い、文化財保護法第57条の３に基づき発掘調査を実施する必要がある。」

昭和51年５月29日付をもって、現地については計画にしたがって工事を実施したい旨の通知があった。そこで昭和51年６月７日付をもって土木部に対し、『国道212号阿蘇郡小国町下城地区には埋蔵文化財「下城（裏の城）」が存在します。そこで、文化財保護法第57条の３にもとづき事前計画を提出する必要がある』旨を重ねて回答した。なお副申を地元小国町にも通知した。

また県文化課として現地踏査（文化課技師桑原憲彰、同大田幸博）の結果を、昭和51年７月８日付をもってその旨を土木部に通知した。さらに、昭和51年８月11日付をもって土木部より試掘調査の依頼があった。これを受けて文化課としては、昭和51年８月23日付をもって調査費を見積り、予算の令達方を要請した。

試掘調査（概要別記）は昭和52年９月にいたり約20日間、数地点を選んで発掘した。昭和52年10月31日付をもって試掘結果を報告した。

53年度の調査は文化課よりの要請に基づき、７月６日土木部より予算の令達を受け、行政的諸手続きを済ましたうえで、７月12日より現地入りすることになった。以下調査の状況については、調査経過に記すとおりである。

（緒方）

(1) 下城遺跡
(2) 花山六地蔵
(3) 花山五輪塔群
(4) 天正八年銘五輪塔
(5) 坂下笠塔婆（地蔵尊）
(6) 坂下笠塔婆（阿弥陀）
(7) 佛山経塔
(8) 土田六地蔵
(9) 市井野五輪塔
(10) 高屋敷
(11) 十三塚六地蔵
(12) 鳶尾城跡
(13) 木戸城跡
(14) 小鶴城跡
(15) 城村大杉と石塔
(16) 柿木の五輪塔

第2図　下城遺跡の位置と環境

2　下城遺跡の位置と環境

下城遺跡は熊本県阿蘇郡小国町大字下城字下城にある。地番のうえから下城城跡は1番～17番のなかにほぼおさまる。これを国土地理院発行の地形図五万分の一の図幅「宮原」に求めれば、北より4.5㎝、西より9.6㎝の交点あたりに相当する。

小国に行くには国道57号線を東行する。車上約1時間にして阿蘇町に達するが、そこから向きを北へ替え、さらに国道212号線にて大観峯を超える。緩傾する草原の道を下れば、30～40分にして小国町の中心宮原に到達する。

下城はさらにこの道を北行する。10分余で下城のシンボルとも言える天然記念物大公孫(いちょう)樹の前に達する。ここと中世城、下城城跡とは指呼の間である。

小国は九州の中央山地の一つを形成する阿蘇山、その外輪山の北斜面にある。水流は外輪山を境に北流し、やがて筑後川となり、日田を超えそして筑後平野を潤すことになる。外輪山は標高700～800mの山々で、地形は漸傾し、北へ行くにしたがい低くなる。宮原付近で430m、下城付近では400m前後となる。この間大小の支川は谷間を潤し、処々に中小の村落が形成される。小国はまた四面山を巡らし、あたかも小盆地をなし、東に湧蓋(わいた)山（一名小国富士、標高1499.5m）[注1]を盟峯とする山々が、南は外輪の山なみ、そして西には津江の峯々がある。北はわづかに開いており、山あいを縫うようにして筑後川は大分県へ流れ、やがて松原ダムへ流入する。小国が、冬期しばしば雲海のただようのも、一つに盆地状の地形によるものとみられる。

下城遺跡の微地形は、南より北へ丘陵が大きくはり出し、下城本村あたりで平坦面をつくり集落はこの平坦面にのっている。下城がまた四面山にかこまれた袋状の地形で、あたかもミクロコスモスを形成する。ここが中世城主下城氏の基盤をなす舞台である。

遺跡は丘陵地の最北端にあり、西は遺跡を区切るようにして筑後川（杖立川）が、東は東南より北流する樅木川によって画され、遺跡（城跡）の北端でこれらの川は合流する。このように遺跡の東、西、北の三方ともに川に囲まれ、それにもまして急峻な崖はそのままにして天然の要害となっている。

下城遺跡の周辺遺跡についてはあまり明らかでない。しかし、これまで松原下筌ダム建設に先立って、松原ダム上流の水没地の遺跡群の調査[注2]がされた。その際、縄文土器（後期・晩期）や石器（石鏃・石匙等）が発掘された。下城の田原地区は高原の開拓地で、近年とくに「小国大根」の産地として名が知られている。土地の農家の人からの伝聞によると、耕作の際土器や石器が出土するという。現地を確認していないので定かでないが、この地域には他にも古代遺跡の存在することは確かである。また下城弓田にて農業を営む中島いとさんのところに考古資料がある。これまで下城字田ノ尻（通称原(ぼる)）から耕作のまにまに採集したもので、多数石器や土器がある。石器には石鏃・石匙・磨製石斧などがあり、土器には押型文・手向山式、そして鐘

ケ崎式などの縄文土器がある。

下城地区には下城神社奉納のクリス形銅剣（弥生時代）４本があるが、これについてはすでに紹介されていることで、改めて論及しない。恐らく域内出土のものが奉納されたものであろう。また五輪塔などの石造物等の遺物について、付篇に「下城周辺の関連遺跡」として述べた。

小国地域の各遺跡についてはすでに『小国郷土史』（禿迷盧）に集成的に述べられており、また『高千穂・阿蘇』の中に一項を設け、「小国の遺跡と遺物」（乙益重隆）がある。さらに随筆風のものとして坂本経堯氏の「小国田ノ原」があり、小国地区[注3]の各遺跡について述べられており、ここであらためて再録することもなかろう。小国町上田に在住しておられる北里誠一郎氏（小国史談会長）のもとには、先代からの資料が多数所蔵されている。調査中一度拝見しただけでコメントをつけるまでにいかないが、小国地区各地の縄文から近世に至るまでの資料が所狭しと置かれている。北里氏の永年にわたる努力の賜であるが、この地区の古代を知る上に見逃してはならないものである。

（緒方）

注１　小国は古く風土記にその名が見える。即ち豊後風土記の石井郷のくだりに「郷中有河曰阿蘇川其源出肥後国阿蘇郡少国之峯流到此郡」で、和名抄の「波良」を邨岡良弼（『日本地理志料』）らは小国に比定している。

注２　「松原下筌ダム関係水没地区文化財調査概報」松原下筌ダム関係文化財調査団　昭和46年３月

注３　乙益重隆「小国の遺跡と遺物」『高千穂・阿蘇』　昭和35年12月

3　下城（しもんじょう）遺跡の試掘調査（報告）

はじめに　昭和51年３月、県土木部より国道212号の改良工事を計画している。ついては阿蘇郡小国町下城地区に既知の文化財はないかの照会を受けた。そこで、当該地区には下城（裏の城）が存在する。それについて現況のまま保存が望ましいがやむを得ず施工する場合は、文化財保護法57条３に基づき調査が必要である旨を回答した。その後７月に至り文化課では桑原憲章、大田幸博両技師が現地を踏査、その所見を付して土木部に通知した。さらに、現地試掘について調査費を見積り、予算の令達を受け調査を実施することになった。

昭和52年９月にいたり調査の計画準備をなし、12月には調査資材を運搬、逐次発掘を実施した。途中10月初旬には農家の稲刈りの都合もあって作業を中断、10月21日をもって調査も一段落した。この間延20日間発掘調査を実施した。

下城城跡は行政区分の上から熊本県阿蘇郡小国町大字下城字下城で、地番は１～17が城跡に相当する。また国土地理院発行５万分の１図に求めよれば、図幅「宮原」の北より4.5㎝、西

より9.6㎝に相当する。現地は杖立川と切通川（樅木川）に挟まれた丘陵の突出部で、北・東・西と三方は40～50mの断崖に囲まれた天然の要害である。南の丘陵くびれ部に堀切りをなし、おのづと要害を堅固にしている。

トレンチの設定（計画） 国道212号の改良計画は城跡のある丘陵を南北に縦断する形で設計された。そこで城跡の範囲は、道路計画基点杭の№65～№72に相当し、此の間の総延長240·mに達し、幅員は法面を含め12～25mになる。進入路の農道の有効幅員1.2 m前後で、機械などの搬入が困難であった。そこで、手掘りにより1.5～2 mトレンチを各段に設けることにした。各トレンチの精査により、周辺の遺構存否判断の資料とすることにした。そこでトレンチは主郭（大杉の周辺）の西幅杭にそって1・2号トレンチを、その下の段の傾斜面にそって3・4号トレンチを、さらに次の段に5号トレンチを設定した。

外郭3は現況では水田である。地元の話では10数年前地均しを行い、水田化したということで、たとえ遺構があっても保存がよくないことが予想された。また地均しに際して、馬の骨、碾（ひ）き臼の破片が出土したという。ともかく、西側幅杭にそって2 m×10mのトレンチを直線状に設け、各トレンチの間は5 mをあけた。ただし、1・2号トレンチの層序の関連を確実にするために長さ3 mのトレンチを設けた。

№69付近の階段状地形には幅1.5×10mのトレンチ2条設けた。外郭2とみられる部分は現況では水田である。ここは買収未了のため発掘しなかった。郭（くるわ）の部分は、城跡の北西、地形上最下段に位置する。また面積的にも広い。栗林の間を縫って傾斜にそって1～3トレンチを設定した。1トレンチは1.5×20m、2・3トレンチは1.5×10mとした。外郭Ⅲの最北端は杉林で、すでに林木は伐採されていた。この地点は対岸の弓田、池鶴地区とも対峙（たいじ）するところで、鹿砦などの防塞施設のあったことも考えられよう。そこで、№67付近に2×10mの東西方向のトレンチを設けた。

各トレンチの状況（調査） 各トレンチは層毎に発掘、遺構遺物等を確認しながら発掘を進めたが、当初は作業員の調査不慣れもあって、多少の失敗を繰り返した。

主郭　1トレンチ（1.5×20m）、2トレンチ（1.5×10m）を東幅杭にそって設け、深さ50㎝位を発掘した。この一帯は山林であるため、表土は腐蝕により汚染され、黒色を呈する火山灰土である。土層は入り組み、他の地点と異なり層序に乱れがみられる。この土層の乱れは、城跡にかかわるものと考えられ、遺構の存在を窺せるものであった。遺物は1トレンチより舶載の白磁・青磁の破片が、また瓦器片も出土した。一抱え大位の石も1・2トレンチから浮いた形ではあるが出土した。1・2トレンチの周辺は当初から予想されたとおり城の中核部とみられるが、遺構の存在の感触を得たところで止め、本調査の支障を来さないためにそれ以下の発掘をしなかった。

3・4トレンチは1・2トレンチの下の段を発掘した。傾斜面に対して直角方向の両トレン

チは、層序上変化はなく、土手の肩の部分になるほど表土が深くなり、土壌の切盛の状態が知れた。ここからは土器などの遺物は出土しなかった。また5トレンチは3・4トレンチの下の段に設けたが、状況として両トレンチと変りなかった。

この主郭周辺には石が処々にみられた。伐木、根払いにより地肌があらわになると、1トレンチ北側の東に2個、3トレンチの南土手裾に1個、また5トレンチ南の土手裾付近に1個の大石が埋っていた。これらの各石も誰かが或目的をもって運び、転石となってころがったことが考えられる。

外郭3　主郭の南、No.72あたりより南の地区で、現在水田として使用されているところである。ここに1～3トレンチを、西側杭の東(内側)3mのあたりに配置した。各トレンチの間は5mをあけ、さらに1・2トレンチの間に2×3mのトレンチを設けたことは前項に述べたとおりである。

ここでの土層々位は地表より約23cmが耕土で　現在水田耕作による耕作土である。耕土の下部には赤橙色をした鉄分の銹着がみられる。このことは、水田耕土に一般的に見られる現象である。1トレンチでは耕土の下に黄褐色粘土層があり、その土壌の有様から当初地山ではないか、とも考えた。しかるに2トレンチとの土層の対比等を勘案するにおよび、層序の上から不都合が生じ、調査により客土されたものであることが判明した。層厚約20cmのこの土壌は、他の地点の地山を水田の漏水防止のため運んだものであった。続いて客土の下には黒色土が自然的状態における土層があらわれる。この層は北側主郭部の地表に連なるもので、上面には旧耕土がのっており開田前の地表に近いものとみられる。旧耕土は2トレンチに近づくにしたがい消滅し、漸次黒土層も薄くなってくる。2トレンチでは黒土層もほとんど消え、直ちに地山の粘土質の黄褐色土があらわれた。部分的に黒色土の落込みがあったが、大要において遺構遺物は存在しない。石器くさいものとして黒曜石の破片が発見されたが、石器というより石屑である。3トレンチの中央部より南には耕土下に客土の粘質土がある。斜めに旧地表の線が延びる。そのことは、開田の際盛土拡張されたことが知れる。中央付近には耕土下に黒色土がみえる。そして北側の部分は2トレンチ同様カットを受け、その残った部分に上からの土層の落込みがみられる。これは何らかの構造物のあった可能性があろう。さらに追求し、確かめてみることがのぞまれる。

外郭2の一部は道路敷に予定されているが、未買収であるために手をつけなかった。その下の階段状地形については、No.69の中心杭をはさんで20mのトレンチを入れたが遺物などの発見はなかった。

郭(くるわ)の部分には1～4のトレンチをあけた。1～3は地形の傾きにしたがって同方向に、植栽の栗林を縫って東西に20mまたは10mのトレンチとした。これらの層序は大要において変りない。そこで1トレンチをもとに説明すれば、Ⅰ層は耕土で層厚約20cmである。地形が東に漸傾

するにいたり、現在の耕土とみられるものの下に、かっての耕土とみられるものがあらわれる。Ⅱ層は黄橙色の火山灰土である。この層は色調などから球磨地方にみられる「イモゴ」に似ており、専門家の知見が求められる。西側では消滅していて、東の地形が低くなるにしたがい厚くなる。そのことは西側で削り去られたおそれがある。注目すべきことは、層中に木炭片が検出されたことである。Ⅲ層は黒色火山灰土である。この層は地域全域が覆われているが、トレンチの西側で薄く、東になるほど厚くなる。この層には一抱え大もの石が点在し、中には河原石とみられる表面の磨耗したものが多かった。石の発見状態はあたかも一定の配列をもっているようであったが、土層にしたがって石の面に傾きがあり人為的なものと考えにくい点もある。多少の検討を要する問題である。Ⅳ層は黄褐色粘質土で地山である。ここでは遺物などの発見はなかった。4トレンチは丘陵地最北端に、縁にそって東西方向のトレンチをあけた。ここでも遺構とみられるものは発見されなかった。

調査の見通し（所見） 主郭　1．2トレンチの同じ段の約500㎡の平場は総めくりする必要がある。この地域は城の中核部で、今後発掘調査により遺構・遺物の発見される可能性も強かろう。3．4トレンチ、5トレンチの各段は土層断面の観察、実測することでよろしかろう。

外郭3　No.73～No.74の2トレンチのあたりは、たとえ遺構があったとしても削られていることが考えられる。主郭よりの部分とNo.74付近には遺構の検出される可能性があろう。第Ⅲ層から黒曜石のチップが発見されているので調査区を拡大して調査する必要があろう。

外郭2と階段状地形　外郭2については、わずかに端をかすめる形であるため遺構の発見される可能性は少なかろう。No.68付近の階段状地形については、それ以上の発掘は必要なかろう。

郭は大要として、新しい知見が出ない限り、これ以上発掘する必要はなかろう。しかし時間的余裕があれば、栗林の伐採をまってトレンチを横にひろげてみるのもよかろう。

その他　No.73付近はこの度は発掘をしなかった。しかし、ここは城跡の南域を画する「堀切」に相当する。今後出来る限りの調査をする必要があろう。また城は単にそれだけで機能したわけでない。相互連関の上に成り立つわけであるが、発掘区域は道路計画路線に止めるにしても、密接に結びつく周辺の同時代の資料、伝承をも含めてある程度の調査を必要とするものとみられる。

（緒方）

注　これは行政報告で、52年度末土木部に提出した資料である。調査報告の中で重複する嫌いがあるが接渉の経過を知るためそのまま取上げた。なお語彙を統一するため多少の文言を手直した。

二　調査の経過

昭和52年９月　下城遺跡の現地での試掘を実施した。踏査から試掘までの経緯と結果については、前章に述べたとおりである。ここでは、昭和53年度に実施した発掘調査の経過について述べる。以下調査日誌などよりの概要の抄録である。

53年７月12日　晴天を利して調査準備にとりかかる。前年度短期間ではあるが、地元の方々との接触が出来た。ある程度、気心も通じあえるようになった。今年は当初から若者の田中寿夫君を調査員として迎えることが出来、何かと調査について助言が得られ心強い限りである。

現地は試掘調査後、約１年を経過している。伐採した樹木から新たにひこばえが芽吹き、畑地では一面夏草におおわれていた。当面、草刈り、抜根が主な作業になりそうである。地元の農家をまわり調査の再開を告げ、作業についての協力をお願いした。また町教育委員会をはじめ、土木事務所などにも挨拶に出向いた。

７月19日　晴　草刈りをする。薮払い、薮焼きと当面発掘調査のための舞台づくりである。草刈りにより突如巣を落された蜂は、相手かまわず人に襲いかかる。次々と顔や手足をやられる人が出た。これでは当分、アンモニア水を手放せそうにない。

７月24日　晴　午後には夕立ちがあった。熊本からハンドドーザーを運ぶ。進入路の幅員が許せば、バックフオーなどの大形土木機械を搬入したいところであるが、谷と狭路に阻まれそれも出来ない。そこで苦心の結果、排土と抜根のためハンドドーザーを入れた。

一部は時間的余裕を見出し、下城地区の周辺遺跡の調査をする。天然記念物下城の大公孫樹がある。そのまわりには花山の五輪塔があり、その実測をなし、続いて近くの明応五年銘の六地蔵幢の実測にかかる。

７月25日　晴　大杉横（第Ⅰ調査区）の山林の根株の抜根作業が続く。根回30cmに達する株ともなれば、容易に抜き取ることが出来ない。ハンドドーザーで押したり、チエーンブロックで引いたりして徐々に根株を抜こうというのである。石造物の実測は、六地蔵の実測を終り、坂下にある下城経隆の墓と伝えられる五輪塔へと移る。重厚巨大な五輪で、後刻の精査により天正八年という銘が発見された。

７月26日　快晴　依然として表土はぎ、抜根作業が続く。また坂下の笠塔婆（地蔵尊）を実測。

７月27日　晴　坂下の笠塔婆（弥陀三尊）の実測。この笠塔婆は前年度にも写真におさめておいたが、彫りも深く姿もよい。表土はぎは道路計画線のNo.71より北の部分が終る。

７月28日　曇　堀切、土墨の周辺の薮払いをする。道路予定地の堀切の中は竹林で、その伐採で漸く地貌がはっきりしてきた。

8月1日　雨時々曇　抜根作業は続く。1日に1株抜くのがやっとの場合もあった。第Ⅰ調査区に櫟の根株が10数本もあり、1株づつ抜いてゆくよりほかない。

8月2日　雨のち曇　第Ⅱ調査区の試掘溝を東に拡大する。この地区は10数年前に水田化されたところで、もともとの表土は削平され、その上の粘土などが客土されていた。

8月4日　晴　台風一過、一転してさわやかな天気である。少し山に分け入ると地元で盆花と呼ばれているフシグロセンノウの朱鷺色の花が鮮やかで、岩たばこの薄紫も印象的である。第Ⅱ調査区では、黒土層の中から押型文土器があらわれはじめる。調査の楽しみもふえる。

第Ⅰ調査区では方眼のグリッドを組む。一桝4mの方眼とする。

8月9日　曇　前日の夕立ちで冠水し、第Ⅱ調査区は表面が乾かねば作業困難である。

第Ⅰ調査区の表土はぎをした。土は浮きブカブカとしており、土中には多量の木炭片が混入していた。地元の作業員からこれはカンノ(焼畑)によるのではないか、などと話がでる。この地区では昭和10年代頃まで焼畑がみられたという。

8月10日　晴時々曇　第Ⅱ調査区では、押型文土器、撚り糸土器と次々と出番を待っていたかのようにして出てくる。礫群が横にひろがっている。第Ⅰ調査区でも縄文土器を伴って出土した。縄文の遺跡のひろがりはかなり広域化しそうである。

8月11日　晴時々曇　土墨の盛土の状態を調べるため、その一部を発掘することにした。早速発掘に取りかかる。第Ⅰ調査区では多数の石があらわれ、層序の上から中世期のものと考えられる。石は不規則に散らばり、特別の遺構でないように思える。しかし実測をした上で取上げた。

来週は農家が盆休みのため、一週間休むことにした。

8月22日　晴　前日はお大師さんの縁日で、作業員の出席はなかった。本日は第Ⅱ調査区の第Ⅲ層を発掘、一方土墨、堀切周辺の測量を実施する。既にある測量図では、山林のために地形の表示が明確ではなかった。

大公孫樹の横の五輪塔の一つには銘文があることが知れる。打拓により銘文を読む。「帰寂月影妙鑑禅□□」とあり、さらに「天文廿三年甲寅七月廿三□」と知れる。大公孫樹の下には、時を告げるかのようにキツネノカミソリの黄樺色の花弁が咲き揃っている。

8月24日　晴　堀切の地形測量に50cmのコンターを入れる。土墨の発掘は進む。

8月25日　晴　土墨の発掘にはハンドドーザーを使用する。一挙に掘開作業は進む。続いて土墨の断面調査、写真撮影まで終る。

第Ⅱ調査区では出土遺物の実測、写真、遺物取上げをする。

8月30日　晴　第Ⅰ、第Ⅱ調査区では発掘、実測、遺物取上げを繰返す。

下城氏関係の文献を調査するため、県立美術館の花岡興輝氏に依頼する。小国地区、下城では北里氏の古墓など調べる。元禄時代の墓地が、下城若宮神社と城跡の間のところにあるが定か

でない。神社の西側の墓地に多数の墓があるが、最も古いのは貞亨４年の北里勘右衛門の墓である。緒方は花岡氏を同道して、小国の史談会長北里誠一郎老を訪ね、同氏の小国地区採集になる所蔵資料を拝見する。千光寺出土の完形越州窯経筒があり、中でも下城城跡出土の土器片には注目した。

９月１日　曇時々晴　月が替り涼しくなる。高冷地だけに気候の移り変りも早い。主郭の第Ⅰ調査区のⅢ層発掘が進み、礫群の間に点々と土器が発見される。土器は押型文、撚糸文と数種が共伴した。第Ⅱ調査区では遺構の拡がりを追って拡大し、水田客土の部分をハンドドーザーを使用して排除した。

９月５日　曇のち晴　第Ⅰ調査区の遺物撮影、中世土坑（１号）の発掘が進み、床面近くでは木炭と焼土の出土が多い。

９月12日　晴　第Ⅰ調査区の南よりの地域に溝状遺構があらわれる。この溝様の遺構は北東より緩傾斜しながら、南西へ延び、溝中より土器（土師質）片が出土した。この調査にあたり、表土層に三稜ポイントが発見され先土器時代石器の存在が予想される。

第Ⅱ調査区を北側に拡大した。礫群があらわれる。仔細に検すると木炭粒があり、この面がが当時（縄文）の生活面であったことを示唆していた。

９月14日　晴　第Ⅱ調査区の北側拡大区には後世の攪乱があり、数個の土坑から牛骨、馬骨が出土した。

下城若宮社と城跡の間にタカヤシキ（高屋敷）とか花庭と呼ばれるところがある。現在、水田として利用されているが、そこに古井戸があるという。何かいわくありげで、井戸は水田の中に埋めずに残っている。城跡に関連があるものとみて、井戸の状況を略測することにした。

９月18日　晴　第Ⅰ調査区の土層を調べるため断面清掃。そして実測をする。礫群のとくに密度の高いところが、第Ⅰ調査区に２個所、第Ⅱ調査区に２個所の合計４個所があった。南より１号～４号とし、集石遺構とした。本日、最も北の４号集石遺構の実測をした。

^{14}Cによる年代測定のための木炭を第Ⅱ調査区北側拡大区礫群の間から採集。

９月20日　雨　本日は彼岸祭。祭は村落共同体の中に生きており、作業員の皆さんは一同休み。そこで下城遺跡関連の資料として、下城城主の母公「妙栄」の寄進になる梵鐘が南小国町矢津田にある。銘文の打拓、実測をする。また、下城真氏から鐘の由来等について聞取りをする。

９月21日　晴　１号土坑実測。４号集石遺構の実測をする。一石一石実測しながら取上げる。床面の一石を残して掘上げると、中央は擂鉢状にいくぶんくぼんでおり、周りの多くの石は焼けていた。

９月26日　曇　下城地区では稲刈りがはじまる。小国でも南小国側（標高が高い）では、すでに稲刈の真最中である。熊本の平坦部と比べれば半月以上も早い。作業員の出席がとみに悪くなる。第Ⅱ調査区の礫群実測をし、２号石組み炉付近を掘下げる。石組み炉の横のピット中

ト中より押型文土器出土。炉の周辺には黒曜石チップ、木炭粒が出土した。

10月４日　晴　前日に第Ⅰ調査区の第Ⅲ層の発掘を終え、Ａ・Ｂ－５の第Ⅳ層を発掘することにした。採集した石器の中にすでに先土器時代石器とみられるものがある。若しかしたら石器本来の包含層が判るかも知れない。その様な思惑もあって第Ⅳ層のローム層を発掘することにした。10cmほどづつ注意して掘る。確実に手応があるところで発掘法を考えねばならないが、ともかく、今のところローム層の中に石器が存在するか否かを知ることが先決である。発掘を続ける。そのうち第Ⅲ層黒色土より約20cmあまり下ったところのＡ－５区より最初の一点、黒曜石があらわれた。それは見まごうことなく石器で、スクレーパーである。時に午后４時５分、続いて石核、フレークと出土し、都合３点の石器を発見した。

ともかく重大な発見である。調査をする者にとって、このようなドラマチックな機会に居合わすことが数多くあるだろうか。それは一つの感激でもある。はやる心を制えながら次のことを考えた。一人でも多くの目で確認する必要がある。少なくとも２人、３人と複数の目で。早速文化課に連絡。都合を見て然るべき人の派遣を依頼。

10月５日　折悪しく雨天　粘土質の地面は水を含み、ヌルヌルとして足もとをすくう。文化課より杉村彰一技師・江本直学芸員が来る。石器の出土状態を説明し、現状を確認する。今後の調査が、対応がむづかしくなる。当初、予期しなかった発見であり、相応の対策が求められることになる。

10月６日　晴　いよいよ第Ⅳ層の発掘である。道路計画線のNo.71の南４ｍの範囲、即ち５列を西よりＡ、Ｂ、Ｃ、Ｄと掘り進む。発掘・実測・遺物取上げを交互に繰返す。石器とチップ、本日まで16個発見。

10月12日　曇　朝から寒さをおぼえる。縄文期の遺構として残っていた３号集石遺構の実測をはじめる。４号集石遺構は先に実測したが、その経験をもとにして、田中調査員は慎重な発掘と実測を繰返す。個々の礫は４号遺構より小さく、構成する石の数は多い。底部を構成する石を残して中に詰っていた石を取上げる。遺構はかなりの深さに達する。一方、第Ⅳ層の発掘では出土する石器の数もふえ、チップをも合せ100個の大台に達する。石器の中には台形様石器、石刃と様々だが石材も褐色をした瑪瑙（めのう）の様なものも出た。この石質は後で判明したことであるが、玉髄とのことであった。

10月13日　晴　Ｄ－５区実測、写真撮影。そして遺物の分布の状態をみてＤ－４区へ拡大、取りあえず黒土層（Ⅲ層）の土からはじめた。

10月16日　曇　ここではＤ－４区の黒土層から土器など出土しなかった。そしてⅣ層の発掘へと進む。一部５列もＥ区の一部まで延ばす。

この日は地元、下城小学校５、６年生（50～60人）の一行が先生の引率のもと遺跡を見学する。

10月18日　晴　本日はあたかも小国地区の氏神である両神社祭礼日。下城では１ケ月も前からこの日のため楽の稽古をしており、夜食の話など作業中取沙汰されていた。下城楽が祭に出ることで、村は総出である。

下城遺跡の土層断面図作成、そして遺物写真などを撮影。

10月19日　遺物（石器）の発掘、実測、取上げの繰返しである。一部発掘区を６列に延ばす。６－ＤのⅣ層からも先土器時代石器が出はじめる。また５列ではＣ、Ｄ区にまたがり石器が密集して出土する。さらに精査により柱穴状のピット群のあることが知れる。

10月20日　曇時々晴　下城遺跡には先土器時代の遺構が存在する様子で、これは先土器時代石器を伴う住居跡ではないかと考えられる。遺構西端には拳大の礫があり、また木炭粒も層中に混っている。

10月23日　晴　前日は初霜が降りる。周辺の山々の黄葉、紅葉の彩りが日毎に増し、今や秋たけなわである。新聞記者等の賓客交々来る。発掘は５列のＡ－Ｄ、Ｅの一部、４列のＣ、Ｄ、そして６列のＤと発掘を繰返す。

10月24日　晴　白木原熊大教授はじめ、熊大考古学研究室の一行が見える。調査について助言を得る。鎗水小国町教育長も見え、遺物、遺構等について説明をする。

10月25日　Ⅳ層の石器の出土量が多く、手におえなくなる。発掘にも移植鏝が石にあたり役に立たないことが屢々で、発掘のスピードが急に落ちる。地表下約90cm、ローム層に入って約５cmごとの発掘を繰返し、ローム層を掘下げてすでに23cm近くになった。

10月30日　晴　少し肌寒い。４、５、６列の発掘、実測、遺物の取上げと忙しい。町教育長は小国中学校長、そして指導主事を連れて見学に見える。さらに南小国の教育長もみえる。

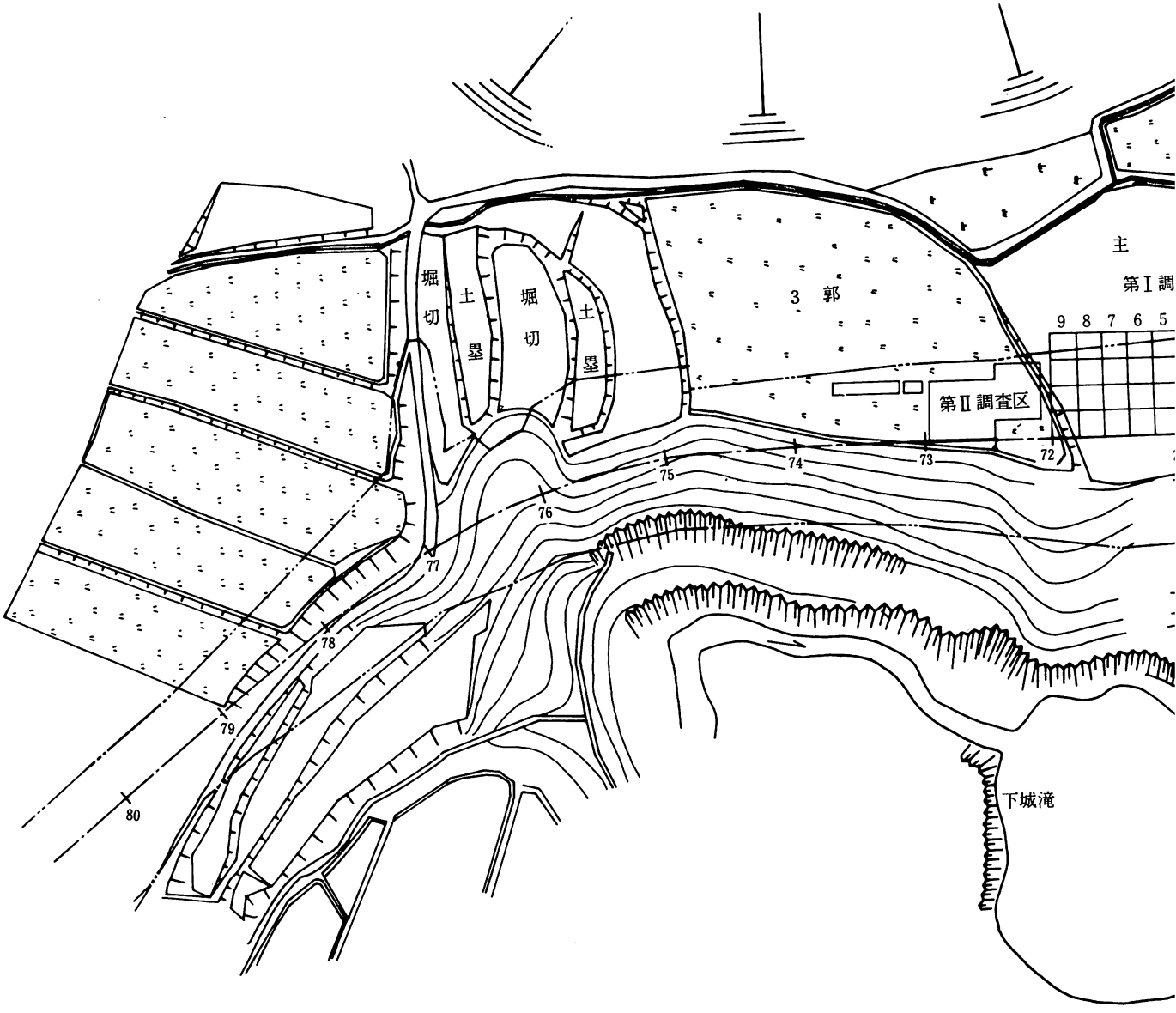
10月31日　快晴　降霜のシーズンとなると小国は雲海にとざされる。どことなくフアンタジックで、大和絵にも似た景観の日々が続く。仕事は至極単調で、根気のいる同一作業の反復である。先土器時代石器の出土する範囲を確認するため、第Ⅰ調査区や第Ⅱ調査区の一部の数地点を第Ⅳ層まで掘る。

11月７日　晴　４個所の先土器時代石器確認のための試掘は、いずれも先土器時代石器が出土することが知れる。先土器時代の遺跡の範囲は道路計画線内は勿論、かなりの広域におよぶことが知れる。

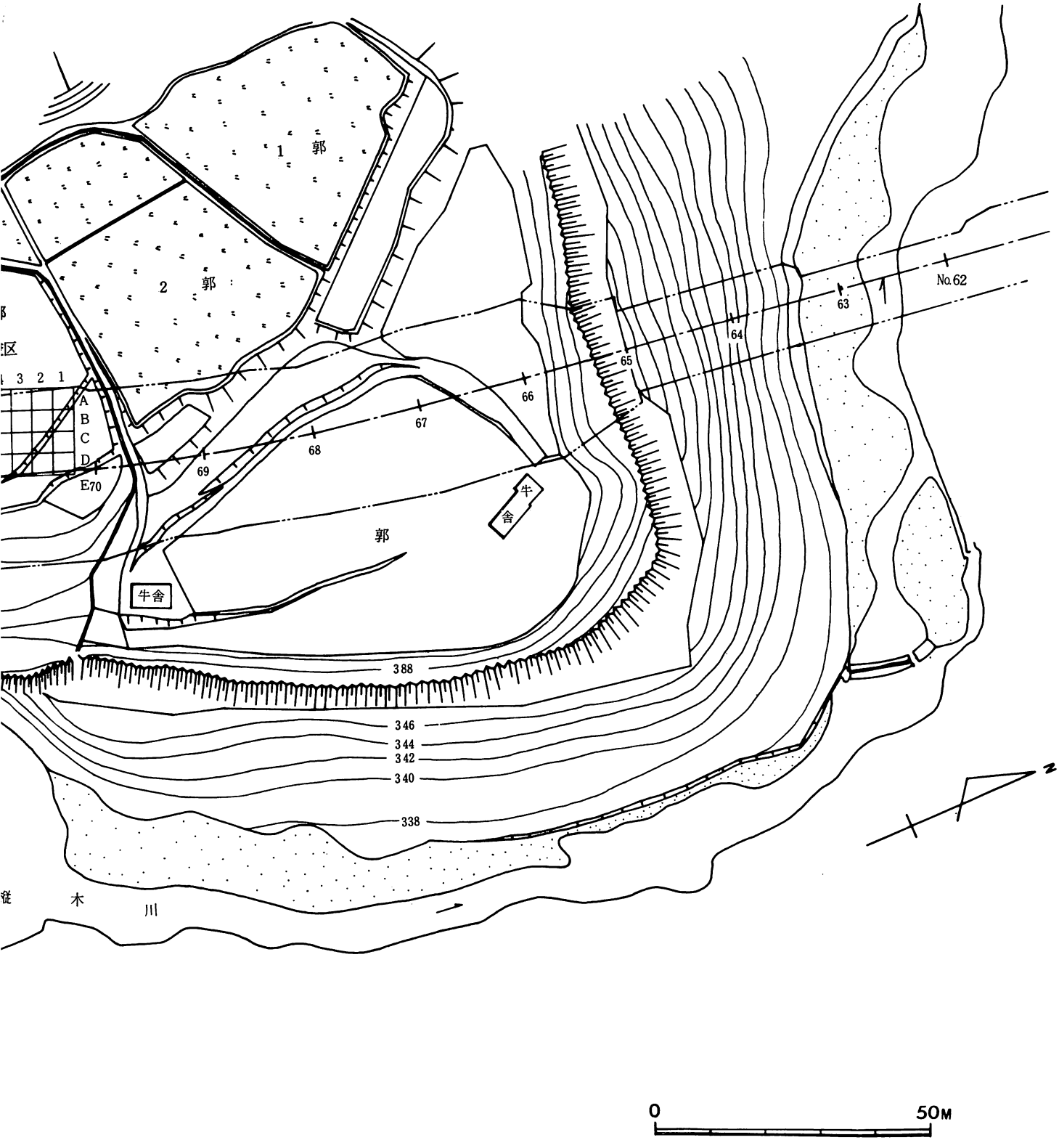
11月８日　晴　本年度事業の最終処理にかかる。地質学的立場から籾倉克幹氏に遺跡付近の層序の診断をしてもらう。周辺地域の地層もたんねんに探査する。

11月10日　晴　７月中旬にはじめた現地の発掘調査も今日で終了する。この間５カ月、延日数にして、73日におよぶ。現場から調査資材の撤収をはじめる。折しも下城の大公孫樹も落葉しきり、感慨一入。地元村方、町役場、そして土木事務所に謝辞を述べ現地を引上げる。

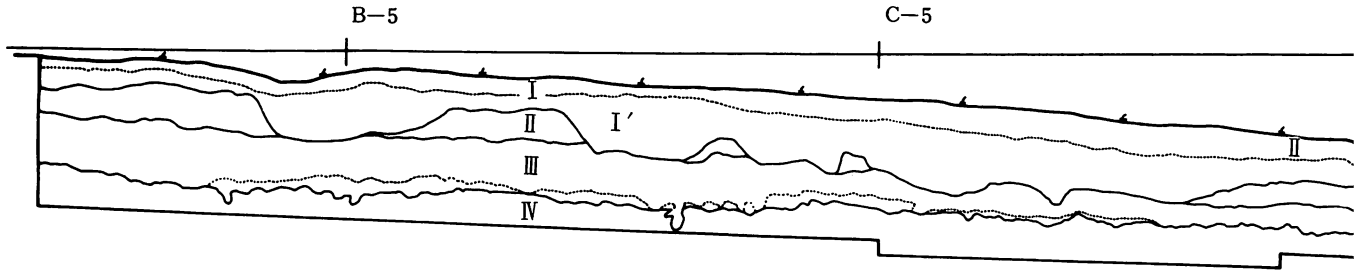
（緒方）

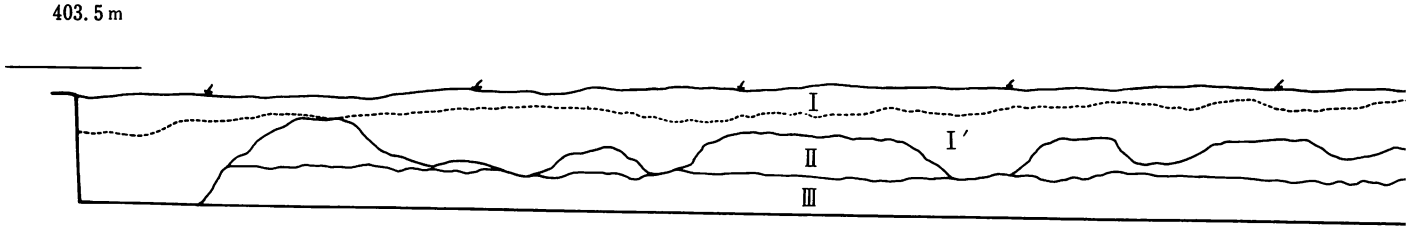


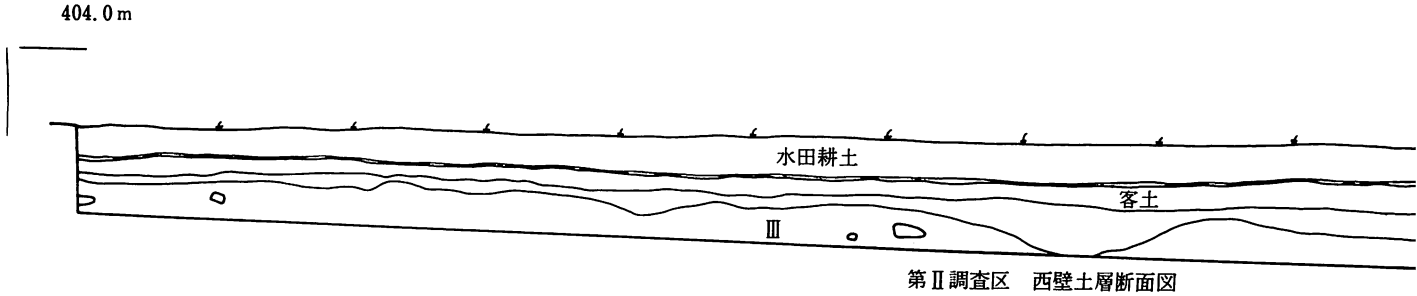
第3図　城跡


1 郭
2 郭
郭区
4 3 2 1
A
B
C
D
E70
69
68
67
66
65
64
63
No.62
牛舎
郭
牛舎
388
346
344
342
340
338
縦 木 川
0
50M

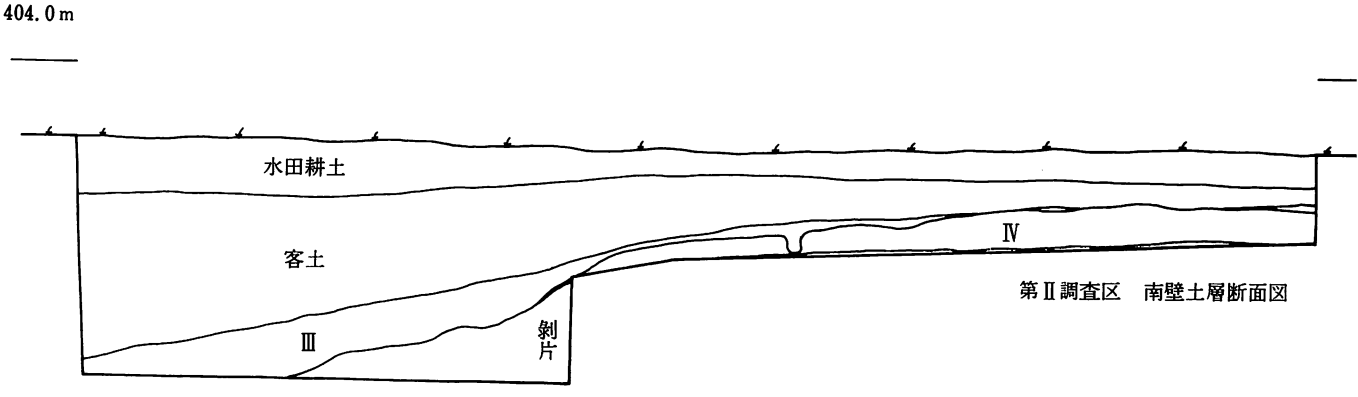
と発掘区設定図





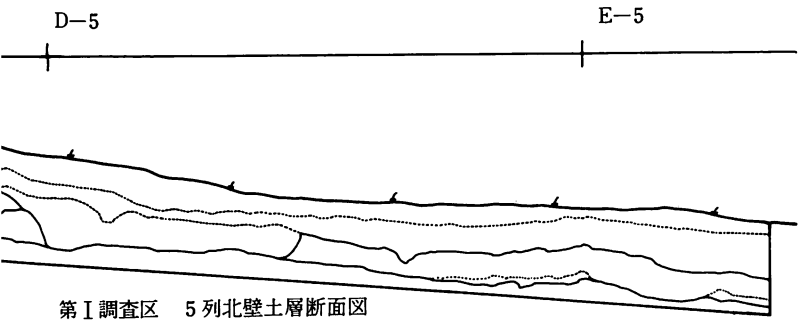


第Ⅱ調査区　西壁土層断面図

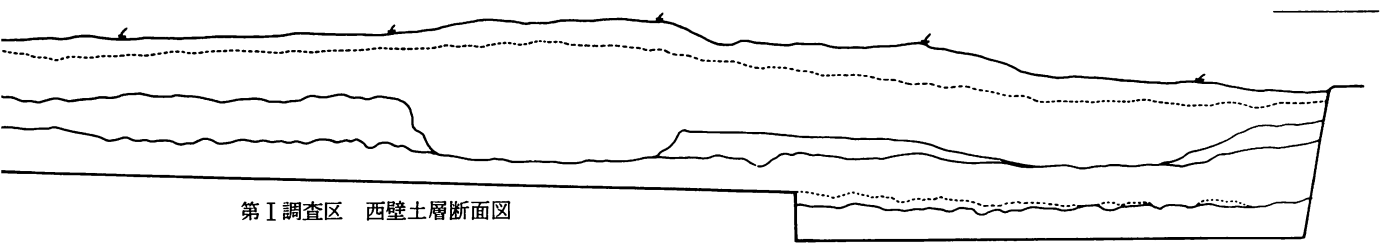


第Ⅱ調査区　南壁土層断面図

第4図　土　層　断

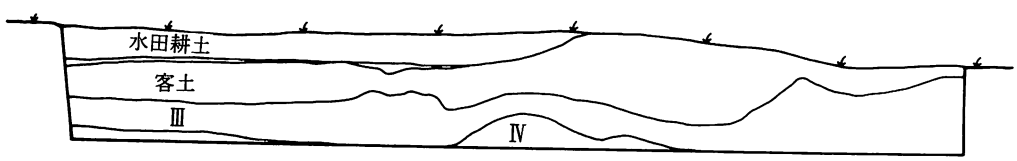


第Ⅰ調査区　5列北壁土層断面図

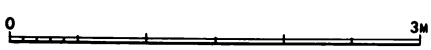


第Ⅰ調査区　西壁土層断面図

404.0m



第Ⅱ調査区　北側拡張区西壁断面図



面　図

三　下城遺跡の調査

下城遺跡の調査は、踏査・試掘、そして本格的な発掘へと段階を追って調査を進めた。当初の踏査で中世城「下城」が強く表に出てきたことは当然のことながら、発掘調査が進むにつれて縄文・先土器の遺構の存在が確実になり、中世城に劣らず重要な遺跡であることが判明した。そこで、上層より中世、縄文、先土器へと層序を追い発掘を進めたが、或段階には平行して調査を進めた。

これらの各期毎の調査は、以下項目を追って説明をするが、ここでは調査の全体にかかわるものとして調査の計画、土層々序について述べる。

調査の計画　試掘で得た情報をもとに、城郭の中核部とみられる主郭の横を第Ⅰ調査区（道路計画No.71付近）とし、その南域の開田により水田として利用されている地域（道路計画No.72～74付近・城跡の三郭の部分）を第Ⅱ調査区として発掘を進めた。

第Ⅰ調査区は山林で、櫟などの雑木におおわれており、とくに根回り20～30cmの櫟が10数株あり、抜根と表土はぎに困難を来した。そのため調査に多少の支障を来したが、一応表土はぎの終わった段階で調査地を４ｍの方眼を組むことにした。方眼は道路計画の中軸線（ほぼ南北に向く）をもとにして、中軸線の西４ｍの範囲をＤ列に、ついで順次西をＣ、Ｂ、Ａ列とし、最も西の端がＡ列となるようにした。したがって、中軸線より東側はＥ、Ｇ、Ｈ列と配列することになる。道路の幅員の関係で、Ａ列は４ｍに達せず２ｍ未満のところもあった。

以上のように東西の配列をＡ、Ｂ、Ｃ、……とし、南北には１、２、３、……と数字を用いることにした。調査区の広さの関係で道路計画のNo.71から南４ｍの範囲を５列とし、それより北を４、３、２列とした。したがって１列は調査区の最も北にくることになる。６列以下は５列の南へと配列された。

第Ⅰ調査区の南域に２株の梅檀があり、旧地主の要望もあり、調査の甚だしい障害にはならなかったのでそのまま放置した。この周辺はブカブカで表土の攪乱がはげしかった。

調査後段に入り、当初の予期に反して先土器時代石器が出土するようになった。石器の出土層位である第Ⅳ層は、地表から70～80cmもあり、発掘に手間どり、当初調査計画期間をはるかにオーバーするに至った。調査区の４×４ｍを一桝として、一回10cmを目安に移植鏝で発掘した。その都度実測を繰返し、記録後にナンバーを付し一点ごとに取上げることにした。そこで１つの包含層を発掘し終えるには４～５回の操作を必要とし発掘には時間がかかった。それも当遺跡の最初の調査として、遺物の包含状態を知る上に止むを得なかった。

土層層序　下城地区の土層について、これまで本格的調査を経てないこともあって明らかでなかった。熊本市とその周辺での火山灰山では、およそどの層からどの種の遺物が出土するな

ど、ほぼ火山灰の堆積の時期が明らかである。今次の調査は、この地区の土層を知るうえからも興味がもたれた。

下城遺跡の火山灰の層序は一先づ試掘により判明した。また地点により多少の違いがあるものの、第4図のとおりである。

第Ⅰ層は表土で、第Ⅰ調査区では暗褐色を呈す。樹根などを含み、しまりがなくパサパサしている。この中では青磁・白磁などの陶磁片・押型文（縄文）土器なども発見された。層厚約18cmである。

表土下に暗褐色の床土が観察され、層序の上から第Ⅰ′層とした。土壌の粒子は粗く、ブカブカした軟質の土壌である。この層には木炭片なども混入しており、植林、焼畑（カンノ）などにより二次的攪乱を受けた土層とみられる。この中には中世陶磁片、土師質の小皿、縄文の押型文土器などの破片が含まれていた。

第Ⅱ層は黄褐色（ところによっては橙黄色）火山灰土で、いわゆるアカホヤである。土壌粒子が極めて粗く、パサパサした黄粉状軟質の土層である。第Ⅰ調査区や土墨などの断面で観察されたが、第Ⅱ調査区ではすでに削平され残っていない。この層から遺物の発見はなかった。層厚20～30cmである。

第Ⅲ層は黒色火山灰土で、土壌粒子の細かい腐植土壌である。この層は押型文などの縄文土器、礫群および集石遺構が発見され、下城遺跡の主要な縄文土器の包含層である。層厚約30cmである。

以上第Ⅲ層までが沖積世の堆積土で、第Ⅳ層以下が洪積世の土層である。

第Ⅳ層は黄褐色火山灰土で、軟質で粘土化が進んでいる。ところにより上部は第Ⅲ層の黒色土が染み込み、いく分黒く汚染されていた。この層は先土器時代石器の包含層である。層厚40～50cmである。

第Ⅴ層は土墨の断面で観察されるが、褐色火山灰土で、第Ⅳ層よりいく分堅く締まり、柱状にクラックが生ずる。層中に遺物の発見はなく、層厚50～70cmである。

第Ⅵ層は明褐色粘土質の火山灰で、第Ⅳ層に近い。一部土墨の断面下端に見ることが出来るが、ここでは考古学的遺物は発見されなかった。

下城地区に地質、地層については、付篇に「付一下城遺跡の火山灰と地質環境」に地質学の立場から籾倉克幹氏の調査所見を得た。

（緒方）

1　先土器時代

中世遺構である土坑（第1土坑）を調査中、その中より先土器時代とみられる2点の石器が発見された。さらに第Ⅱ調査区の土坑から1点の石刃を発見した。そこで本遺跡に先土器時代

の遺物包含層のあることを予想し、第1調査区の5列をとりあえず発掘することにした。

第Ⅳ層が先土器時代遺物の包含層である。この層は層厚約50cm、地形の傾きにしたがって北東側へゆるく傾斜している。第Ⅲ層の縄文時代遺物の包含層との界面は、樹根等により入り組みはあるものの安定したもので、二次的攪乱のないプライマリーと考えられた。

発掘は人工層位により分層発掘を行い、約10cm毎同一作業を繰返した。この間遺物の出土状態等の観察につとめたところ、上位2枚目の中位から下面にかけて、礫とピット群が発見された。そこで以上の2枚を第Ⅳ－a層とし、それ以下の3枚を第Ⅳ－b層として区分した。

第5図には先土器時代の発掘深度を示しているが、第Ⅳ－a－1層から第Ⅳ－b－1層にかけて、とくに遺物が集中して出土する傾向のあることが知れる。第Ⅳ－b－2層以下については、主としてC－5区の観察結果から、漸次遺物の出土量が減少しつつ、第Ⅴ層の直上まで遺物の包含されることが判明した。

第Ⅳ層が上下2枚に分れる。そのことは籾倉氏の所見（付一）にもみられるところで、この境、換言すれば礫とピット発見の面を当時の生活面であろうことが推定される。

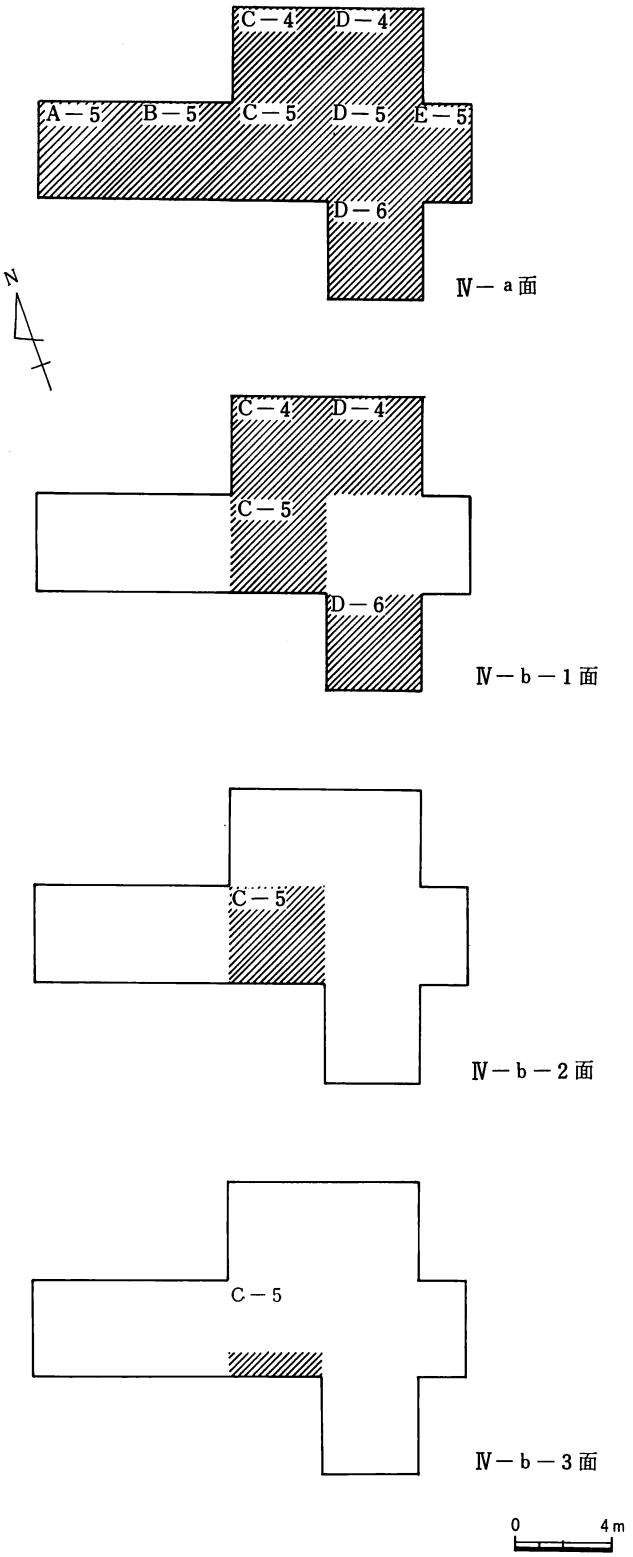
第7図は第Ⅳ層の石器類の器種別分布と遺構図である。また第6図は遺物出土状況図である。それによると遺物は調査区の全体にわたっており、中でも分布密度の高い地点があった。その拡がりは長軸を北東方向にとって10.5×4m位の範囲にまとまっていた。これはC－5、D－5区の北側、D－4区の南の地域にかけてひろがっていた。またとくに長軸を北東にとり、2.4×1.4mほどの範囲には総出土遺物の⅔以上がまとまって発見された。この地点はC－5区よりやや北東の地点であった。この地点発見の石器類は石核と砕片、剝片が数多く占めており、出土状況とあわせて考えれば石器製作の場としての可能性が強い。

定型的石器の分布は、とくに狭い範囲に集中することはなかったが、器種により多少のかたよりは窺える。すなわち石核は前記の特定地点に集中する。尖頭器は前記特定地点に一部重複するが、D－6区にまとまって出土した。なお前者が尖頭器未製品の欠損したものが多いのに対して、後者は完製品の完形および欠損品が多かった。ナイフ形石器は尖頭器と同様特定地点に集中しながらも発掘区の北側に一定の出土範囲があるようである。他の石器については、数も少なく明らかでない。

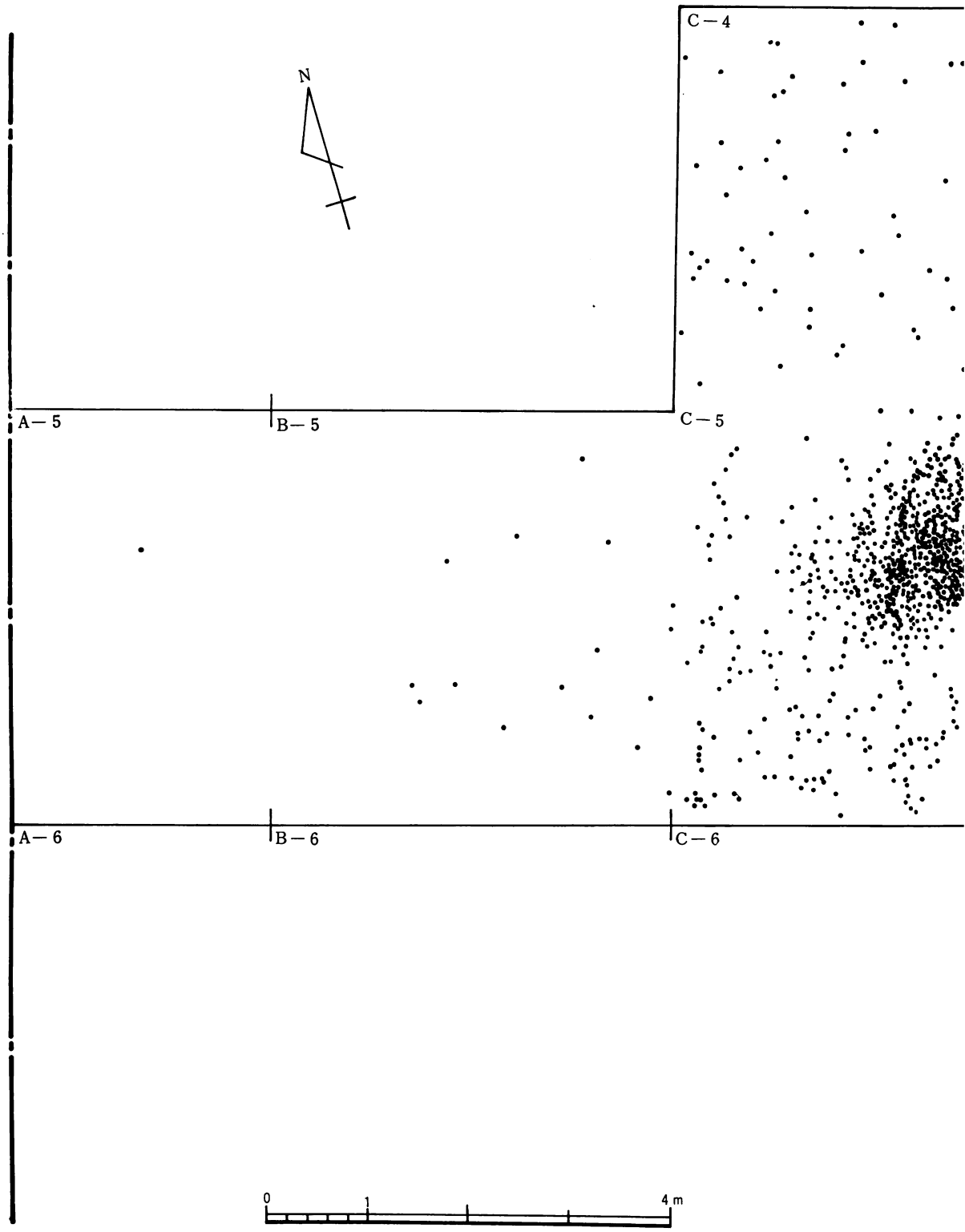
(1) 遺　構（第8図）

C－5区とD－5区にわたって、第Ⅳ層a－2面下に集石と16個の柱穴状ピットが検出された。以下それらの各遺構について説明する。

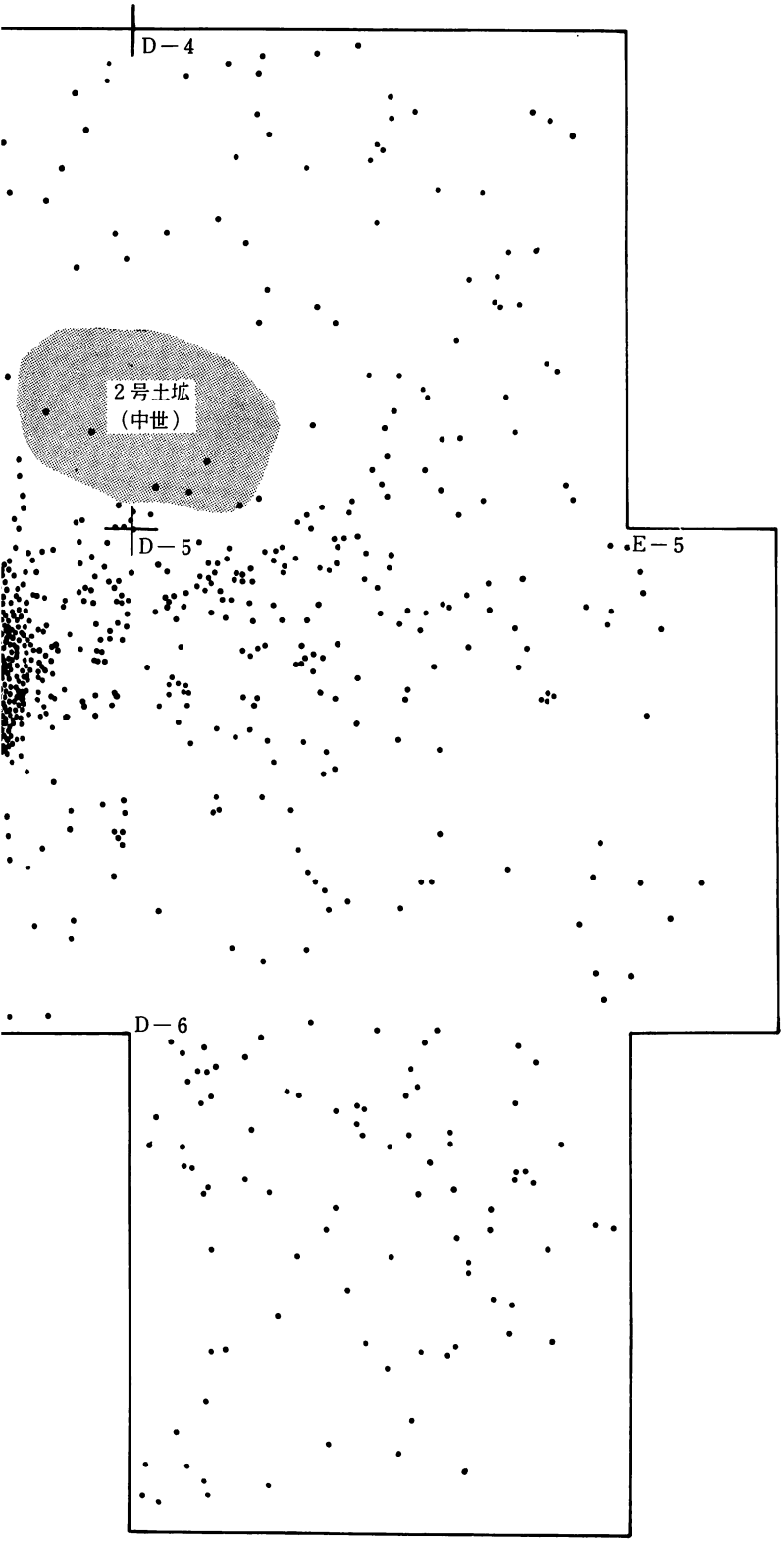
集　石　C－5区の東南隅に6個の拳大の円礫が30cm位の範囲に集っていた。さらにこの集石の西北約1mの地点には1個の円礫があった。これらの安山岩円礫は本来的に第Ⅳ層に包含されるものでなく、何らかの目的をもって持込まれたものとみられる。礫の表面はあかく灼けていて、火熱を受けている。また集石周辺には木炭粒が検出された。

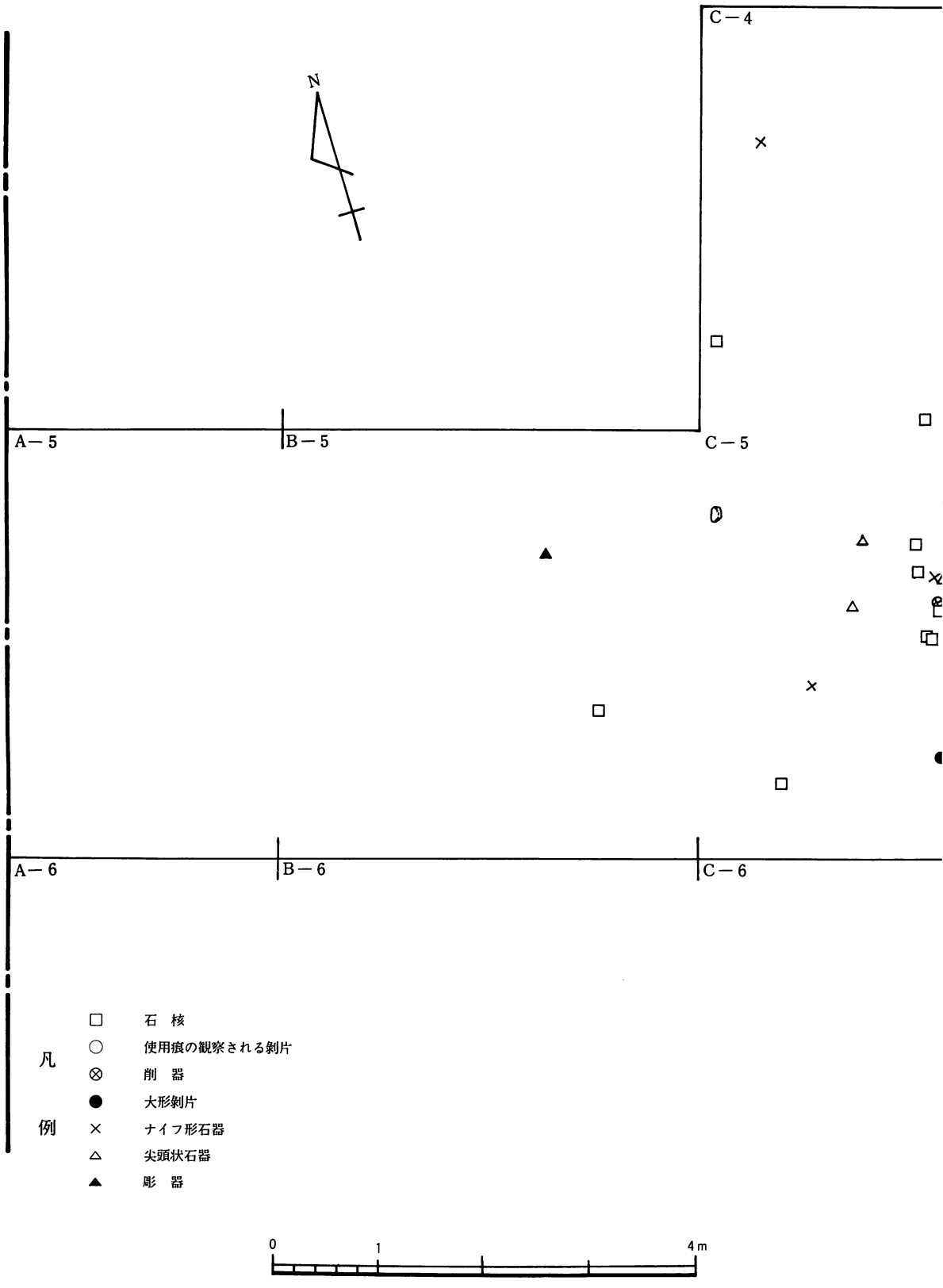


第5図　先土器時代調査区発掘深度図

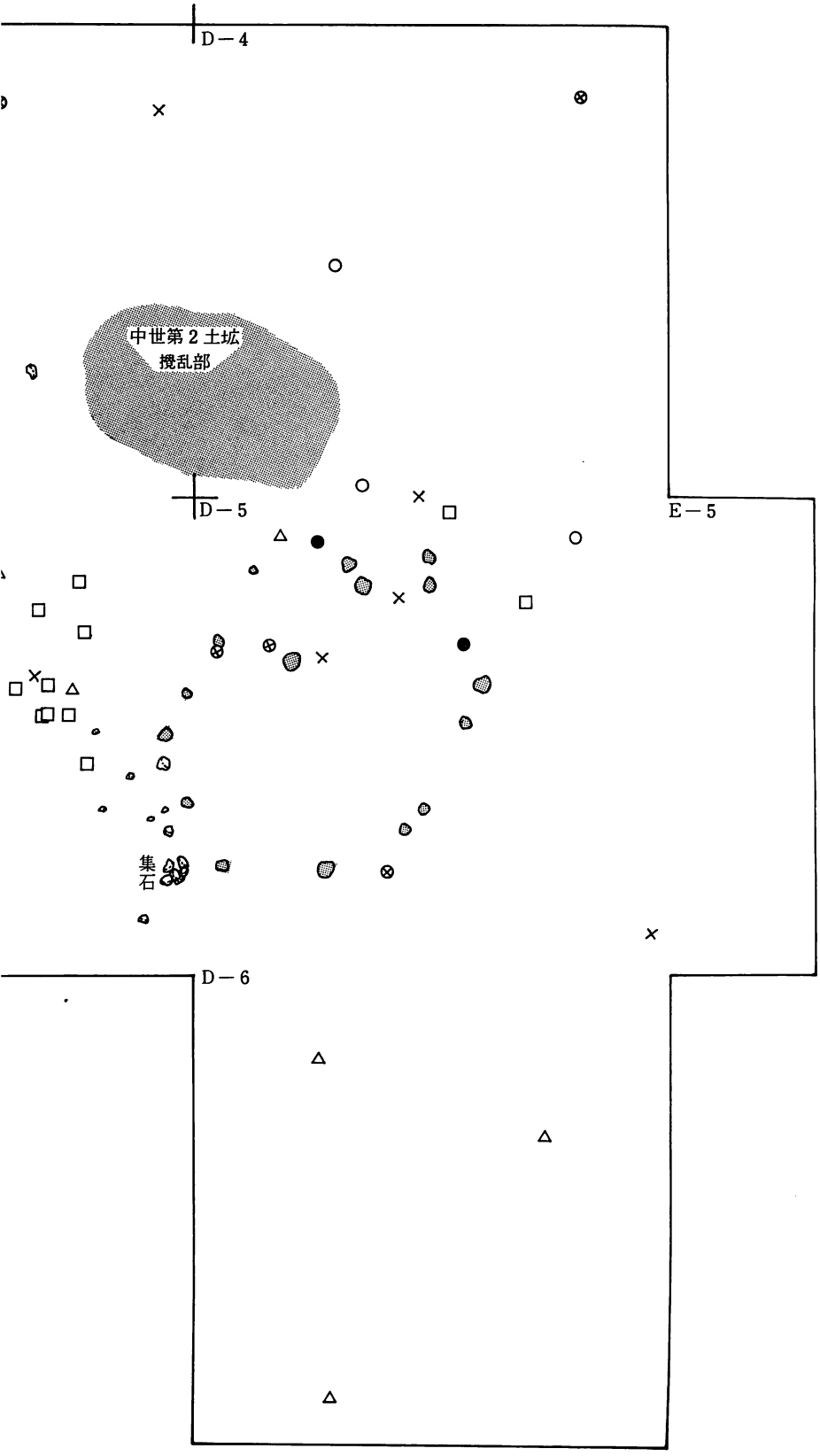


第６図　先土器時代調査区遺物出土状況

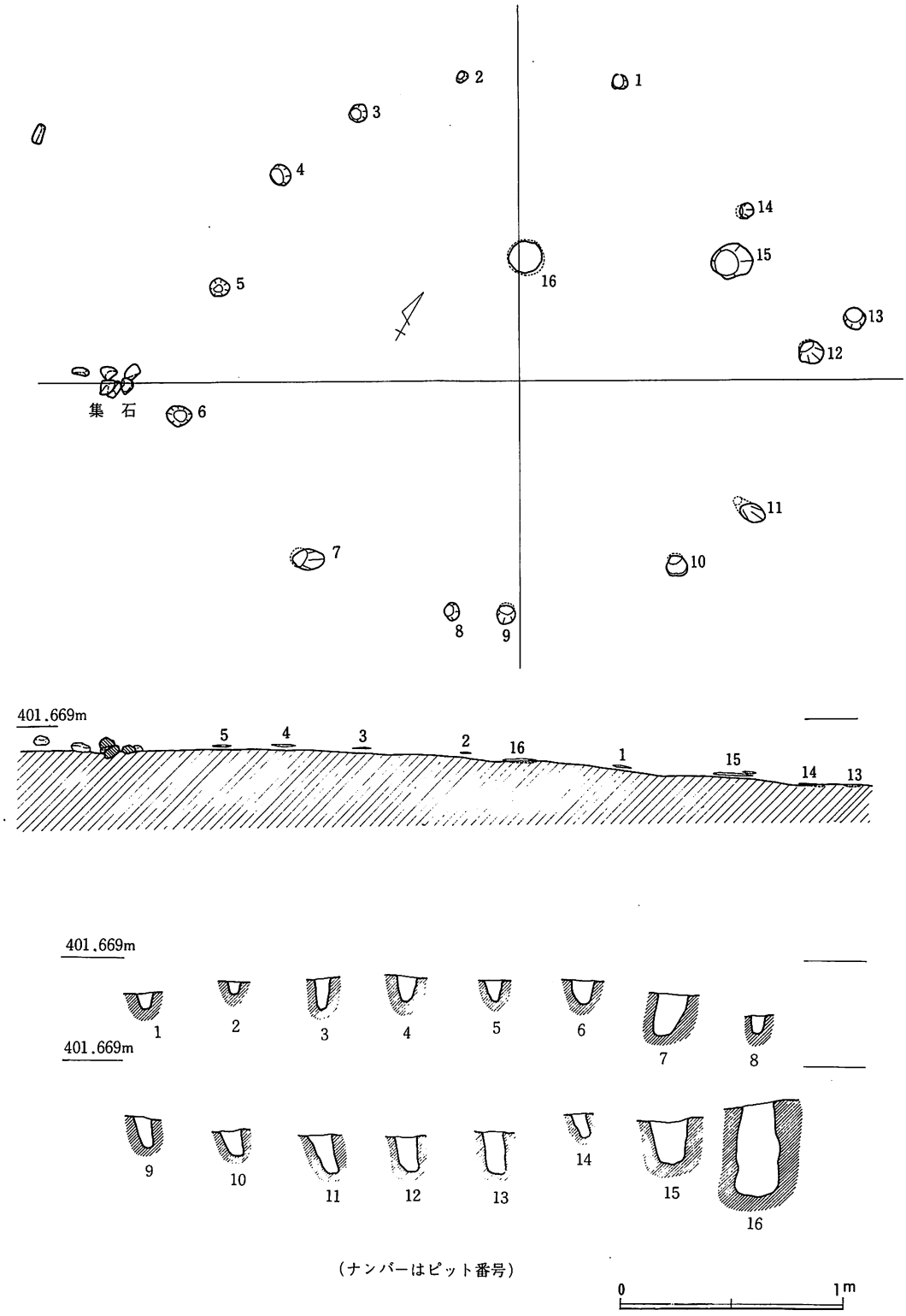

D－4
2号土坑
（中世）
D－5
E－5
D－6



第７図　　先土器時代調査区器種別分布図及



び遺構図



第8図　集石および柱穴状ピット平面図・断面図

集石のある地点に地下遺構の存否を確認するため、半カットして断面を観察した。その結果、集石に伴った地下遺構の検出はなかった。

柱穴状ピット群　第Ⅳ層a －2面下での遺物取上げの後、掘り下げ面の清掃を行ったところ、C－5区からD－5区にわたって16個のピットが発見された。ピットは径10cm前後の円形のもので、16個のピットは楕円形にめぐる。これら各ピットの計測値については表1のとおりである。

各ピット中の埋土はローム質の灰褐色であるが、土質は周囲の土とほとんど変りない。ピットの掘り肩、壁などの境は不鮮明であった。またさらに各ピットについて、半カットにより精査を試みた。

柱穴状ピットは、その平面が楕円形をなすものと円形のものとがある。断面は大部分のものが底になるにしたがい先細りになるが、先端部（底）が丸味を帯びたものと、平坦なものとがあった。ピット16は検出したピット中最大で、断面から先端がすえひろがりになっていた。ピットの向きは大部分が北東を向き、傾斜面も一部を除き30°内外の傾きをしていた。

これらの柱穴状のピット群の解釈をどうするかは、集石、木炭粒の検出などからして生活址の可能性を強くのこすものの、それが当時の住居址であるかとなると、もう一つ決定的状況証拠に欠ける憾みがあった。

(2) 遺　物（第9～14図）

今回発掘した先土器時代の遺物は、表採も含めて1673点であった。各機種別の数の割合は表4に示してあるとおりであるが、圧倒的に砕片が多く、また石器類のなかでも残核が数多く発見された。石器には、ナイフ形石器、尖頭器、削器、残核、使用痕の観察される剝片などがある。

これらの石器の石材には、黒曜石を主体として、凝灰岩、玉髄、頁岩、安山岩が用いられている。黒曜石以外の石材はきわめて少ない。下城遺跡出土の黒曜石の肉眼観察によると、およそ二種の原石に分けられる。一つは佐賀県腰岳産と思われる漆黒色の緻密で良質なもので、他の一つはいわゆる阿蘇溶結凝灰岩中の黒曜石である。これは一般的に斑晶を多く含み、流理が発達する質の悪いものである。さらにこの後者は黒色を呈し気泡を多く含むものと、飴色を呈しやや良質のものとに細分できる。数的には後者の阿蘇溶結凝灰岩中の黒曜石が圧倒的に多く、前者の腰岳産とみられるものは少ない。なお後者の黒色で、気泡を含む黒曜石は、当遺跡より西北へ約4kmほどいった大山地区から下筌（しもうけ）ダム周辺や、下城と杖立川をはさんだ対岸の薄越地区などに原石の所在が求められる。

以下本遺跡出土の石器について、各類別にしたがい総括的に述べてゆきたい。個々の石器の所見は表5を参照されたい。

本遺跡出土の石器は、Ⅰ～Ⅵ類に分類できる。分類にあたっては、素材、二次調整の方法と

その形状、形態、推定される機能等をもとにして分類基準とした。

Ⅰ　類　刃潰し加工を特徴的に有する石器群である。広義にナイフ形石器と呼称されているものに相当する。表採も含めて9点が得られた。素材に横長剥片を用いているもの（a 類、以下同じ。2～7）と縦長剥片を用いているもの（b 類、以下同じ。1・8・9）とがある。このⅠ類にはa類が意図的に選択されているようである。刃潰し加工は、Ⅰ－a 類は、打面に顕著に平坦剥離を施こしていることが特徴としてあげられる。1また7にみられるように丁寧なバルブカットがなされている例や、尾瘤部、ないし基部が折断されているもの（2・4・6）も見られる。とくに2は、基部の刃潰し調整が行われた後、表面からの加圧によって折断されたものであり、基部は鋭いエッヂとなっている。Ⅰ－b 類は、基部、側縁に最終剥離面からの丹念な刃潰しを施している。1は切出し状をなし、基部には打面が若干残る。9は打面が除去された後、刃潰しが施されている。

Ⅱ　類　厚手の横長剥片を素材として、最終剥離面から角度の鋭い縁辺調整が施され、最終剥離面を底辺とした断面三角形の尖頭器状の形態のものである。三稜尖頭器と呼ばれるものに相当する。形態的にⅡ－a 類(11～20)、Ⅱ－b 類（10）に分けられる。10・11を除いた他のものは未成品であり、調整過程で欠損し廃棄されたものと思われる。二次調整は、最終剥離面の表面の中央に一本の稜が走ることを意図し、粗い調整を行った後（12・15・16・18)、再び、最終剥離面の表面中央の稜から細かな調整を加えている（17・20)。いずれも最終剥離面には二次調整は施されていない。10は横長剥片の尾瘤部を素材とするもので、二次調整が基部に限定して行われている。17は接合資料で、稜線からの調整時に欠損した未成品である。

Ⅲ　類　厚手の剥離を素材とし、桶状剥離面が観察されるものである（21・22)。21には最終面に交錯する2条の桶状剥離面が、22には最終剥離面に4条、表面に1条、それぞれ観察される。また22は縦長の素材を半截し、その面に縁辺加工を施し、削器的な刃部もあり、機能的にいくつかの用途を兼ね合わせるものと思われる。

Ⅳ　類　厚手の不定形剥片を素材として、縁辺の一部に（角度の浅い）二次調整を施し、その部分に使用による細かな刃こぼれが観察されるものである。23は硬質の玉髄製で、湾曲した縁辺部に最終剥離面側からの二次調整を施し、その部分を刃部として用いている。使用痕はこの部分以外に、鋭く尖がる尾瘤部にも観察できる。24・25もこれと同様で、やや湾曲した縁辺を刃部としている。29は打面調整剥片を素材に用いたラウンドスクレイパーであり、縁辺の一端に角度の鋭い二次調整を施している。

Ⅴ　類　二次的な調整は施されていないが、鋭利な縁辺の一部を刃部として使用に供されたものと考えられる剥片である。形態的にVa類とVb類とに分けられる。26は縦長剥片の基部と尾瘤部とが錯交して折断されたもので、台形状をなしている。27は石核の器面調整剥片を素材として用い、26と同様に、基部と尾瘤部とを折断した後、鋭利な一側を使用に供したもので

ある。28は刃器状剥片で、尾瘤部は欠損している。表面の左側縁部に細かな使用痕が観察される。

Ⅵ　類　石核である。30・31・32・38を除いた他は残核と考えられる。

これらの資料は、剥片剥離作業が二通りに分けられる。一つは拳大から人頭大の黒曜石原礫の半截礫を素材とし、半截面を打面として剥片剥取を行うもので、二次的な打面調整は行われない。打面はポジのものと、ネガのものとがある。他の一つの素材は前者と同様と考えられるが、打面を90°反転しながら、剥片剥取を行うものである（31・32・35)。剥片の剥離面の観察から不定形の横長剥片がその大部分を占めている。それは石器素材剥片の傾向と大体一致するようである。

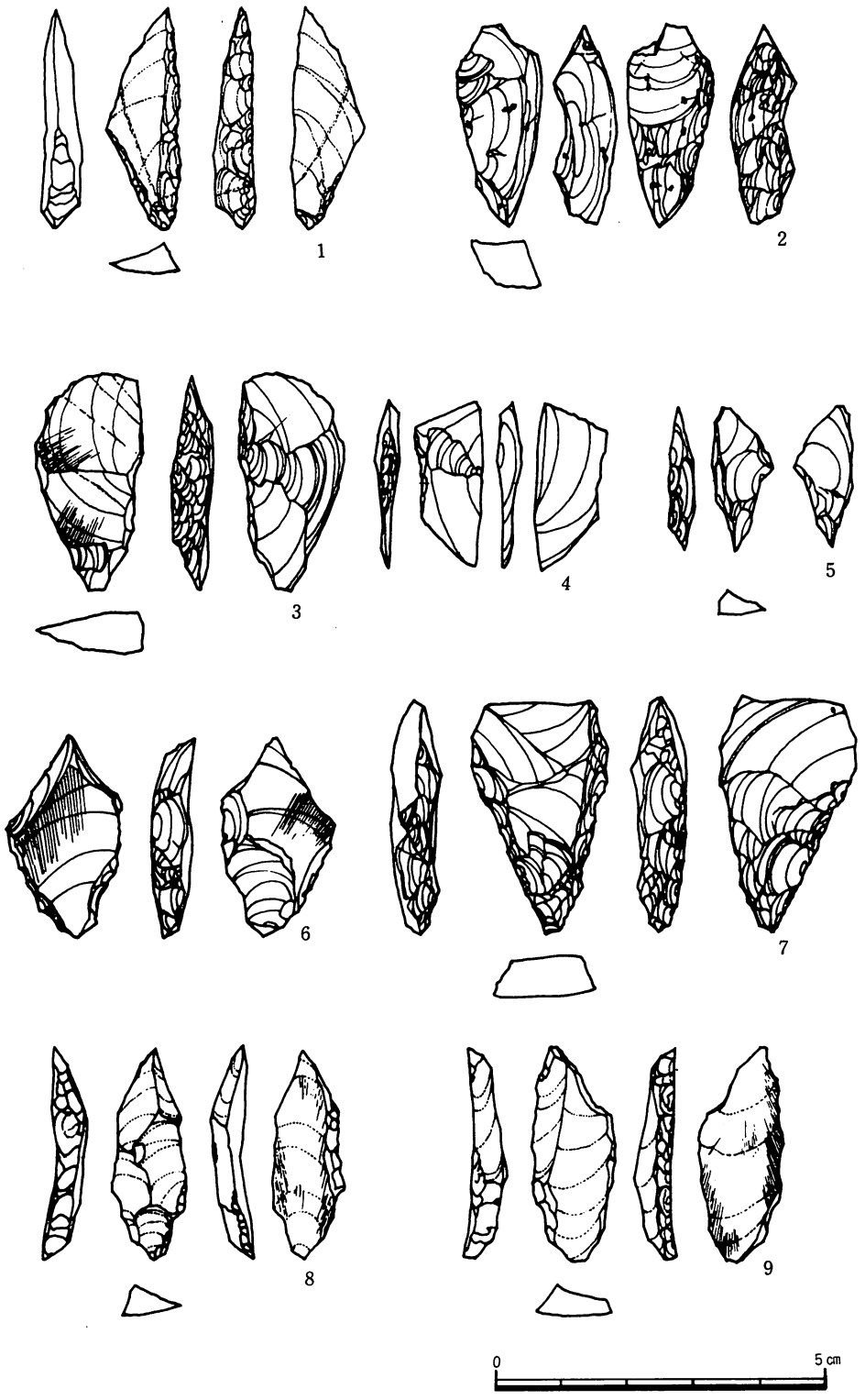
これらⅠ～Ⅵ類の他に、出土量の大多数を占める剥片（VII類）と砕片（VIII類）がある。剥片と砕片の分類にあたっては、石器素材となりうる形態と大きさのものと、そうでないものとに分けられる。ここでは前者を剥片、後者を砕片とした。剥片は定形のものは少なく（5.2%)、基部が折断されているもの（52.7%）や、尾瘤部が折断されているもの（31.6%)、基部・および尾瘤部が折断されているもの（10.5%)の各様がみられ、ほとんど先述したように横長の剥片である。

以上、石器について概略を述べたが、上記の遺物群は、石材からみて大きく3グループに分けられる。黒曜石の類を用いたⅠ－a類、Ⅴ－a類のグループ、安山岩・頁岩を用いたⅠ－b類、Ⅱ－a類のグループ、それと、大山地区産の原石とみられる黒曜石を主体とするⅡ－a類、Ⅵ類、Ⅷ類のグループである。この3グループは時期差によるものか、それとも器種による石材選択の相違によるものかは明らかでない。また平面分布の上からも、石材別の偏は特に見られない。しかし、黒曜石を石材に用いた2つのグループは、石器、石核、剥片類の観察によると、石器製作の面で共通した様相を呈しており、石材選択の結果による可能性が高い。

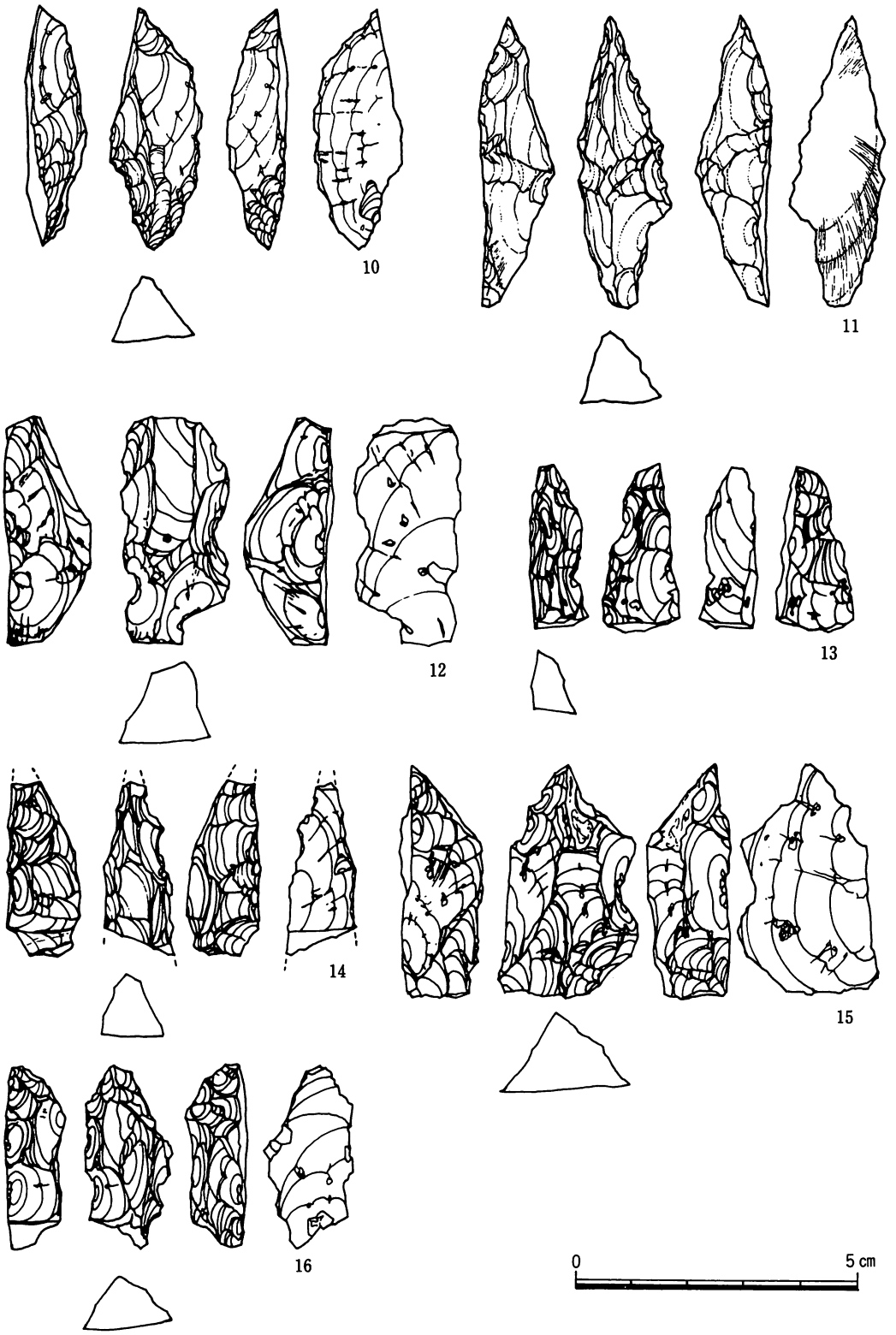
また、安山岩などを用いたⅠ－b類、Ⅱ－b類は資料の量的な制約があり断言できないものの、形態的、技術的面から黒曜石を用いたグループとは若干の時期差をも考えられるが、それは層位的に両者の上下関係は認められなかった。

ところで、前述した遺物のとくに集中的に発見された地点での石器類（石核、剥片、砕片と石器素材）は、先の分類によるⅡ類が多い。そこで、ここでは主として第二類の石器製作がされたものと考えられる。この製作技術は一貫しており、その集中状態を考えに入れると、ここでの石器の製作はある限定された期間内で行われたものとみられる。

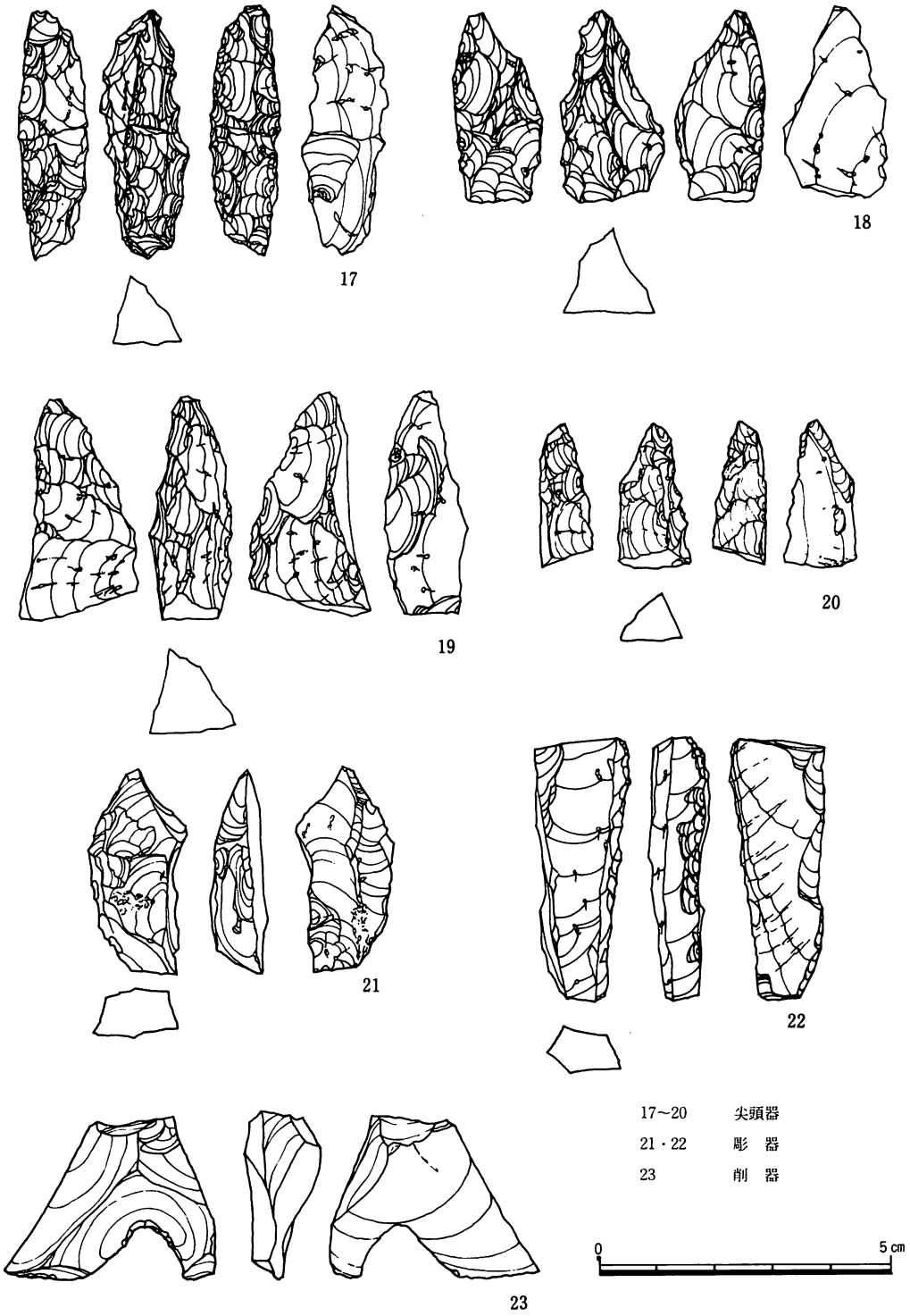
以上述べた石器群は、当遺跡における石器組成をなすと思われる。小型ナイフ形石器＋台形様石器（台形状石器）＋尖頭状石器＋石核＋剥片＋砕片といった石器組成で、先土器時代終末期の石器組合せの様相を示している。



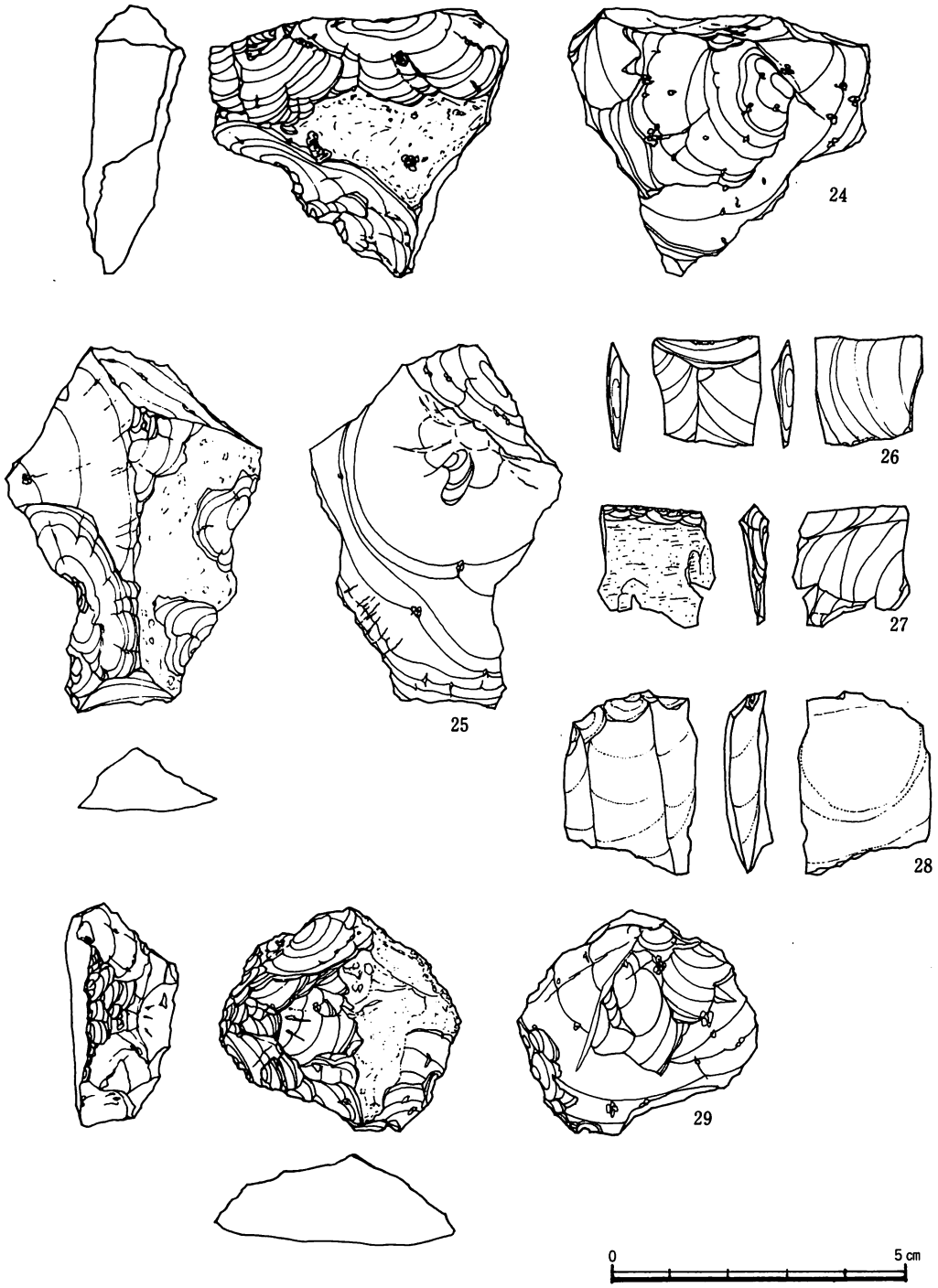
第9図　ナイフ形石器



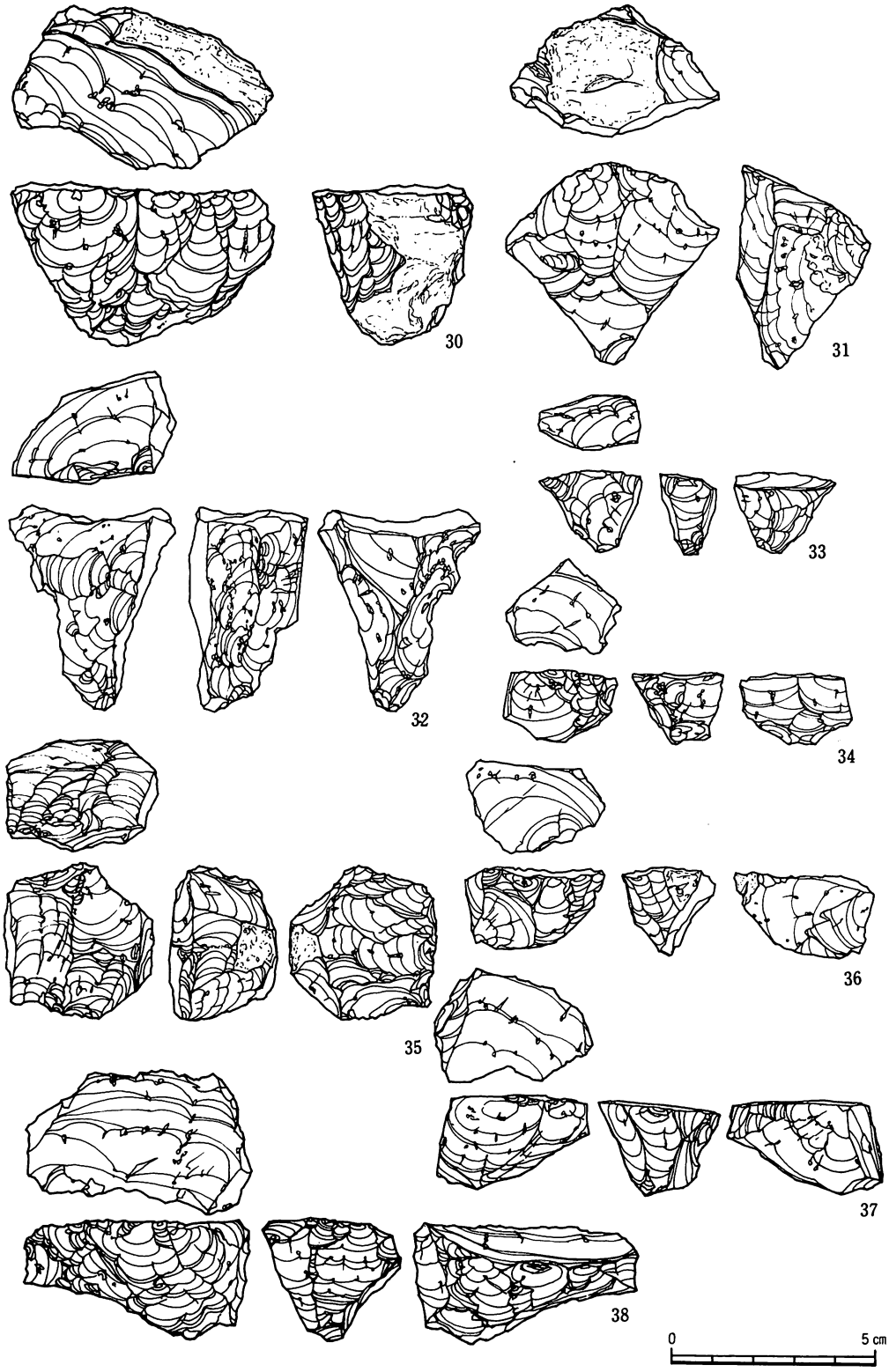
第10図　尖　頭　器



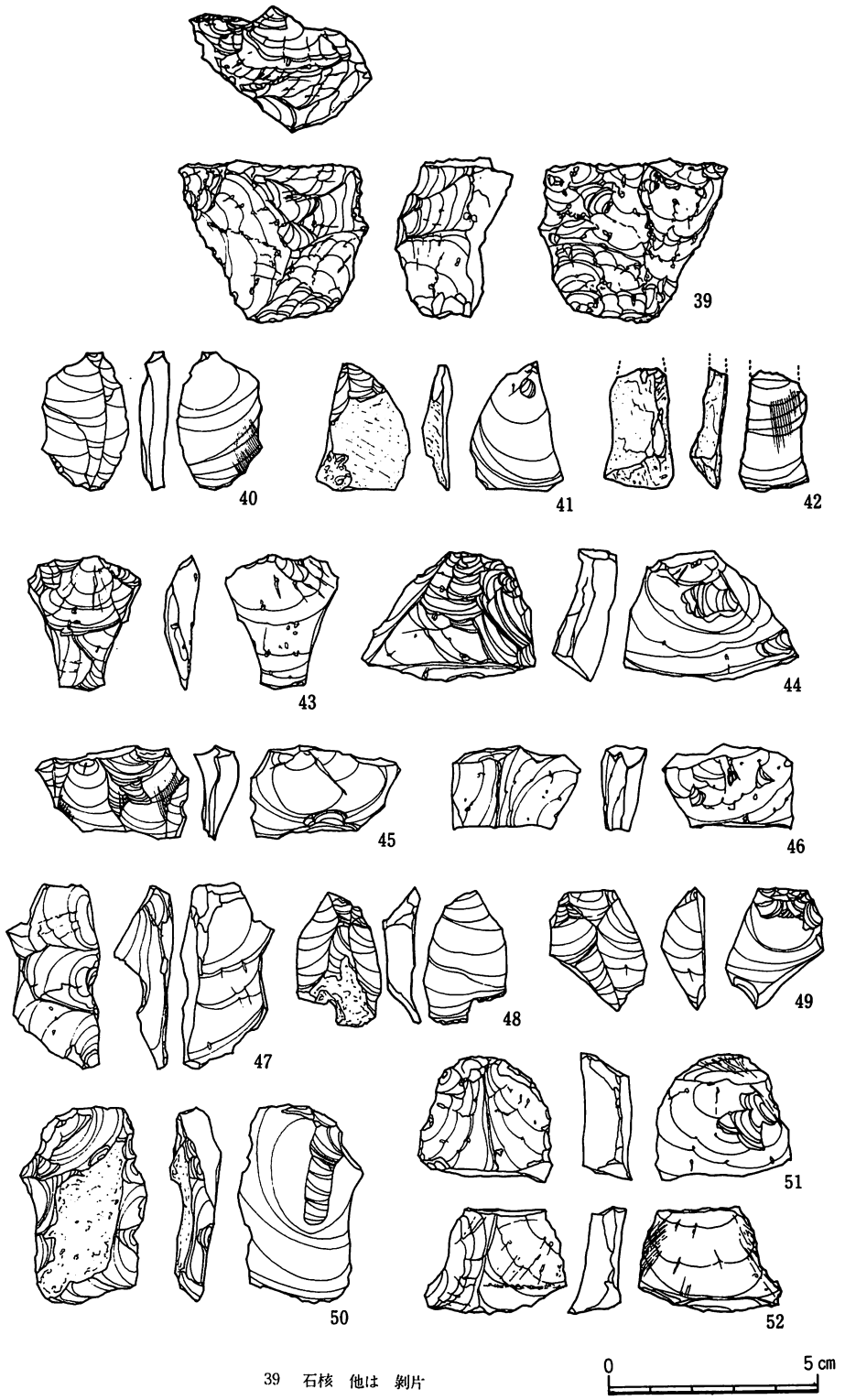
第11図　尖頭器・彫器・削器



第12図　　削器、使用痕の観察される剝片



第13図　石　核



39　石核　他は　剝片

第14図　石核・剝片

表1　柱穴状ピット計測値

	縦×横 東西×南北×深さ (cm)	ピット下底 Level (m)	ピット上面 Level (m)	ピット方向
1	7.0× 7.0× 6.3	401.439	北401.495 南401.509	N－ 75°30′－E
2	4.2× 5.2× 3.9	401.524	401.557 401.569	N－ 10°30′－E
3	7.5× 8.9×14.0	401.434	401.569 401.579	N－ 72°30′－E
4	9.1× 9.1×18.7	401.389	401.583 401.569	N－ 43°30′－E
5	8.3× 8.1× 8.6	401.487	401.569 401.577	N－ 45°30′－E
6	10.5× 9.8×11.1	401.461	401.569 401.575	N－ 58°　－E
7	11.8×11.2×18.65	401.324	401.507 401.514	N－ 70°30′－E
8	8.9× 9.1×12.7	401.284	401.405 401.417	N－ 154°　－E
9	7.6× 7.5×13.6	401.276	401.416 401.408	N－ 50°40′－E
10	9.6× 9.1×11.4	401.239	401.348 401.358	N－ 128°20′－E
11	11.2× 8.1×11.95	401.170	401.319 401.340	N－ 96°30′－E
12	10.6×11.2×15.85	401.177	401.332 401.339	N－ 114°30′－E
13	9.1× 9.1×15.7	401.191	401.345 401.351	N－ 149°30′－E
14	6.1× 6.9×10.55	401.337	401.438 401.447	N－ 52°30′－E
15	17.1×17.1×18.05	401.239	401.484 401.505	N－ 30°20′－E
16	14.2×14.5×40.05	401.094	401.416 401.408	N－ 9°20′－E

表2　層位別遺物出土数

層位＼区		A-5	B-5	C-4	C-5	D-4	D-5	D-6	E-5	計
Ⅳ－a	1	1	6	13	48	15	42	16	3	144
	2		11	45	42	18	121	51	6	294
Ⅳ－b	1			53	721	43		23		840
	2				323					323
	3				57					57
計		1	17	111	1191	76	163	90	9	1658

表3　層位別石器出土数

層位＼区		A-5	B-5	C-4	C-5	D-4	D-5	D-6	E-5	計
Ⅳ－a	1		1		1			1		3
	2		1	2	5		8	1		17
Ⅳ－b	1			2	10	1		1		14
	2				10					10
	3									
計			2	4	26	1	8	3		44

表4　層位別石器器種別出土数

層位＼器種		ナイフ形	尖頭器	彫器	削器	使用痕のあるフレーク	石核	剝片	砕片	計
Ⅳ－a	1		2	1				40	101	144
	2	6	2		2	2	8	84	190	294
Ⅳ－b	1	2	3		1	2	6	189	636	840
	2	1	3				6	62	251	323
	3							3	54	57
計		9	10	1	3	4	20	379	1232	1658

表5　石器類所見

番号	区	層	レベル (m)	素材	長さ×巾×厚さ (cm)	重さ (g)	石材	器種	備考
1	B－7	撹乱	－	縦長剝片	3.3×1.1×0.6	1.70	安山岩	ナイフ形石器	切り出し状
2	B－7	Ⅰ	－	横長剝片	3.0×1.3×1.0	2.85	黒曜石a	〃	彫器の可能性もある
3	D－4	Ⅳ－b_1	401.317	〃	3.3×1.6×0.7	2.95	〃 a	〃	
4	D－4	Ⅳ－b_1	401.254	〃	2.5×1.1×0.4	0.90	〃 a	〃	打面、尾瘤部欠
5	D－5	Ⅳ－b_1	401.216	〃	2.1×1.0×0.4	0.50	〃 a	〃	
6	D－5	Ⅳ－b_1	401.572	〃	3.0×1.7×0.5	3.00	〃 a	〃	
7	D－5	Ⅳ－a_2	401.484	〃	3.5×2.1×0.7	4.50	〃 a	〃	（台形様石器）
8	D－5	Ⅳ－b_1	401.262	縦長剝片	3.2×1.0×0.6	1.50	頁岩	〃	
9	C－5	Ⅳ－b_2	401.418	〃	3.3×1.2×0.6	2.20	安山岩	〃	
10	D－5	Ⅰ	－	横長剝片	4.3×1.5×1.1	5.40	黒曜石b	尖頭状石器	基部の作り出しが顕著
11	第Ⅱ調査区	撹乱	－	〃	5.15×1.65×1.3	7.50	安山岩	〃	
12	D－5	Ⅳ－a_1	401.802	〃	4.0×1.9×1.6	11.37	黒曜石b_1	〃	
13	D－6	Ⅳ－b_1	401.712	〃	2.9×1.4×1.1	3.10	〃 b_1	〃	
14	C－5	Ⅳ－b_1	401.507	〃	4.1×1.3×1.3	2.90	〃 b_1	〃	
15	B－5	Ⅳ－b_1	401.062	〃	4.2×2.5×1.6	12.70	〃 b_1	〃	
16	C－5	Ⅳ－b_2	401.210	縦長（？）	3.3×1.6×1.2	4.07	〃 b_1	〃	
17	C－5	Ⅳ－b_2	401.438	横長剝片	4.4×1.5×1.3	5.89	〃 b_1	〃	下－5－665と接合
18	C－5	Ⅳ－b_2	401.449	〃	3.3×2.8×1.6	5.91	〃 b_1	〃	
19	D－6	Ⅳ－a_2	401.302	〃	3.9×1.5×2.0	8.63	〃 b_1	〃	
20	C－5	Ⅳ－b_2	401.332	〃	2.4×1.1×1.2	2.60	〃 b_1	〃	
21	D－5	Ⅳ－a_2	401.486	〃	3.7×1.8×0.9	5.35	〃 b_1	彫器	
22	B－5	Ⅳ－a_1	401.810	縦長（？）	3.5×1.6×1.0	7.20	〃 b_1	〃	
23	D－5	Ⅳ－a_2	401.126	横長剝片	2.7×3.7×1.3	8.10	玉髄	削器	
24	C－5	Ⅳ－b_1	401.529	〃	4.2×5.3×1.7	26.31	黒曜石b_1	〃	
25	C－5	Ⅳ－a_2	401.208	〃	6.2×4.4×1.4	30.35	〃 b_1	〃	
26	B－6	Ⅰ	－	刃器状剝片	1.85×1.35×0.3	1.50	黒曜石a	使用痕のあるフレーク	台形状
27	C－5	Ⅳ－b_1	401.500	〃	2.0×2.0×0.5	2.10	〃 a	〃	〃
28	C－6	Ⅳ－a_1	401.819	〃	3.2×2.3×0.8	2.35	凝灰岩	〃	石刃
29	D－6	Ⅳ－b_1	401.014	調整剝片	3.8×4.2×2.0	25.10	黒曜石b_1	削器	
30	D－5	Ⅳ－a_1	401.537		4.1×6.6×4.1	85.20	〃 b_1	石核	背面に礫面を残す
31	C－5	Ⅳ－b_1	401.599		5.1×5.2×3.3	48.50	〃 b_1	〃	
32	C－5	Ⅳ－b_1	401.595		5.1×4.2×3.0	35.20	〃 b_1	〃	
33	C－4	Ⅳ－a_1	401.652		2.0×2.6×1.4	5.40	〃 b_1	〃	
34	D－5	Ⅳ－b_1	401.212		1.8×2.9×2.3	9.55	〃 b_1	〃	
35	C－4	Ⅳ－a_1	401.829		3.8×3.6×3.5	44.90	〃 b_1	〃	一部に礫面を残す
36	D－6	Ⅳ－b_1	401.014		2.1×3.5×2.3	0.70	〃 b_1	〃	
37	C－5	Ⅳ－b_2	401.324		2.4×4.0×3.0	19.17	〃 b_1	〃	
38	第Ⅱ調査区	撹乱	－		2.7×3.4×5.6	42.40	〃 b_1	〃	
39	C－5	Ⅳ－b_2	401.210		4.0×4.7×3.0	35.03	〃 b_1	〃	
40	C－5	Ⅳ－a_1	401.498		3.2×2.2×0.7	3.35	〃 b_2	剝片	
41	第Ⅰ調査区－4	Ⅳ－a_1	401.588		3.1×2.3×0.8	3.41	〃 b_2	〃	石核調整剝片
42	D－4	Ⅳ－b_1	400.731		2.9×1.7×0.4	3.00	〃 b_2	〃	
43	D－5	Ⅳ－a_2	401.429		3.2×2.8×0.9	5.12	〃 b_1	〃	左右両側縁欠
44	第Ⅰ調査区－4	Ⅳ－a_2	401.461		3.1×4.3×1.5	12.96	〃 b_1	〃	尾瘤部欠
45	D－5	Ⅳ－a_1	401.566		2.2×3.6×1.1	6.20	〃 b_2	〃	〃
46	第Ⅰ調査区－4	Ⅳ－b_1	401.514		2.0×3.2×1.1	6.50	〃 b_1	〃	〃
47	第Ⅰ調査区－5	Ⅳ－a_2	401.773		4.4×2.2×1.4	7.70	〃 b_1	〃	半截
48	C－5	Ⅳ－a_2	401.561		3.1×2.1×	4.36	〃 b_2	〃	
49	C－5	Ⅳ－b_1	401.497		2.9×2.4×1.0	4.45	〃 b_2	〃	左側縁尾瘤部欠
50	C－5	Ⅳ－b_1	401.499		4.8×3.0×1.4	12.22	〃 b_2	〃	
51	第Ⅰ調査区－4	Ⅳ－b_1	401.337		3.0×3.3×1.2	9.99	〃 b_1	〃	尾瘤部欠
52	C－5	Ⅳ－b_2	401.440		2.6×3.5×1.4	8.40	〃 b_1	〃	基部、尾瘤部欠

(3) 先土器時代のまとめと若干の考察

今回の調査の結果を以下にまとめる。

下城遺跡の先土器時代の遺物は、新期阿蘇ローム層の上部にあたる第Ⅳ層の中位に包含されており、集石、柱穴状ピット群がこれらとほぼ同じレベルで検出された。遺物は、石器製作の場と考えられる遺物の集中地点を中心として二次的な移動が比較的少ない状況で分布しており、さらにその分布範囲は、調査区外に延長するものと思われる。集石・柱穴状ピット群の配置の状況より、これらは、当時の生活の場として一つのセットとして機能を果していたものと考えられる。遺物はその様相からⅠ類～Ⅷ類にわけたが、これらはほぼ同一時期の石器組成と考えられる。Ⅰ類からⅤ類までの石器類の形態的特徴と、Ⅵ類の石核から窺われる剝片剝離技術から、遺物群は先土器時代終末の時期が比定される。さらにこのことは石器組成のうえから、下城遺跡では百花台タイプの台形石器・細石刃・細石刃核が伴わないこと、さらにナイフ形石器の小形化と器種の多様性は、当遺跡の時期比定の目安になる。これらのことをふまえ、九州西北部の各遺跡の石器組成と比較すれば長崎県遠目下層、同県日の岳Ⅲ層、佐賀県平沢良、熊本県石飛Ⅳ層の各遺物に近似しており、百花台遺跡第Ⅳ層に先行するものと考えられる。

今年度の調査は遺跡の全容をとらえるに至らなかった。幸い調査終了前数地点の試掘の結果なお広域にひろがり、道路予定敷地外にも大きく先土器時代の遺物包含層が拡がることが知れた。他地域の調査例からしても、遺物が集中的に出土する地点も数個所にわたることが考えられる。このようなことから下城遺跡は調査余地を残すところから、今後に期待をもたせる遺跡である。

（田中・緒方）

2 縄 文 時 代

縄文時代の遺構について、調査前この様な大遺跡があらわれるとは予想しなかった。試掘に際して、かろうじて縄文時代の遺跡の存在する兆候を感じ取ったに過ぎなかったが、発掘調査が進行するにつれ、遺構の分布が漸次拡大していった。結果的に、以下述べるような大遺跡を将来した。このことは調査の合い間をみて、尋ねた郷土史家である北里誠一郎氏（小国史談会長）の採集資料からも窺える。同氏の尨大な採集資料の中には、たしかに下城遺跡の採集のものがある。談話によると、主郭の北側（三郭としたところ）の水田化の際出土したものを集めたという。資料の大部分は細片で、青磁・白磁と弥生終末期の土器片であり、縄文土器とみられる土器片はついに発見できなかった。以下順を追って、第Ⅰ調査区と第Ⅱ調査区の遺構、遺物について述べる。

(1) 遺 構（第15～17図）

下城遺跡における縄文時代の遺構は、土層層序のうえから第Ⅲ層黒土層の中位からあらわれた。そこには多量の礫群のひろがりがみられ、部分的には疎密深浅の違いはあるけれどもほぼ同レベルから出土した。礫の大部分は径10～20cmの自然礫で、もともと近くの河川などから集められたものとみられる。土器などの遺物は礫の間に散在し、それがまとまった状態では出土しなかった。この礫のひろがるあたりが当時の生活面とみられるが、そこで使用された土器などが散乱遺棄されたものとみられる。また遺物は土器のほか、黒曜石などのチップや石器があり、ここでの火の使用（生活）を示すかのように木炭片が発見された。木炭片については細片ではあるが、^{14}Cによる年代測定のため約30gを集めることが出来た。

第Ⅰ調査区での礫群のひろがりは、区割りのうえからA列からB列におよび、西側は今次の調査域外に拡がるごとくである。北はほぼ6列で終り、南は溝様遺構で切断されている が恐らく第Ⅱ調査区の縄文遺構に連なるものとみられる。

第Ⅱ調査区は試掘溝を起点にして東へ拡大していったが、遺構は旧地形の傾斜転換点あたりまで延びるものとみられる。北は前述のごとく、第Ⅰ調査区の縄文遺構に連ることが考えられ西は勿論現在の水田下にひろがり、遺構は丘陵上をおおうものとみられる。また、序でながら述べるが、第Ⅱ調査区北寄りにある方形または円形の土坑は牛・馬を葬ったものである。中からそれぞれ、牛・馬の骨が出土した。それは村人の話から、疫病に羅った牛馬を葬ったとのことであった。

以上が第Ⅲ層、主として礫群のひろがりの状態であるが、そのうち礫が濃密に分布する地点が、第Ⅰ調査区で2個所、第Ⅱ調査区で4個所あった。ここでは、これらを集石遺構として調査することにした。

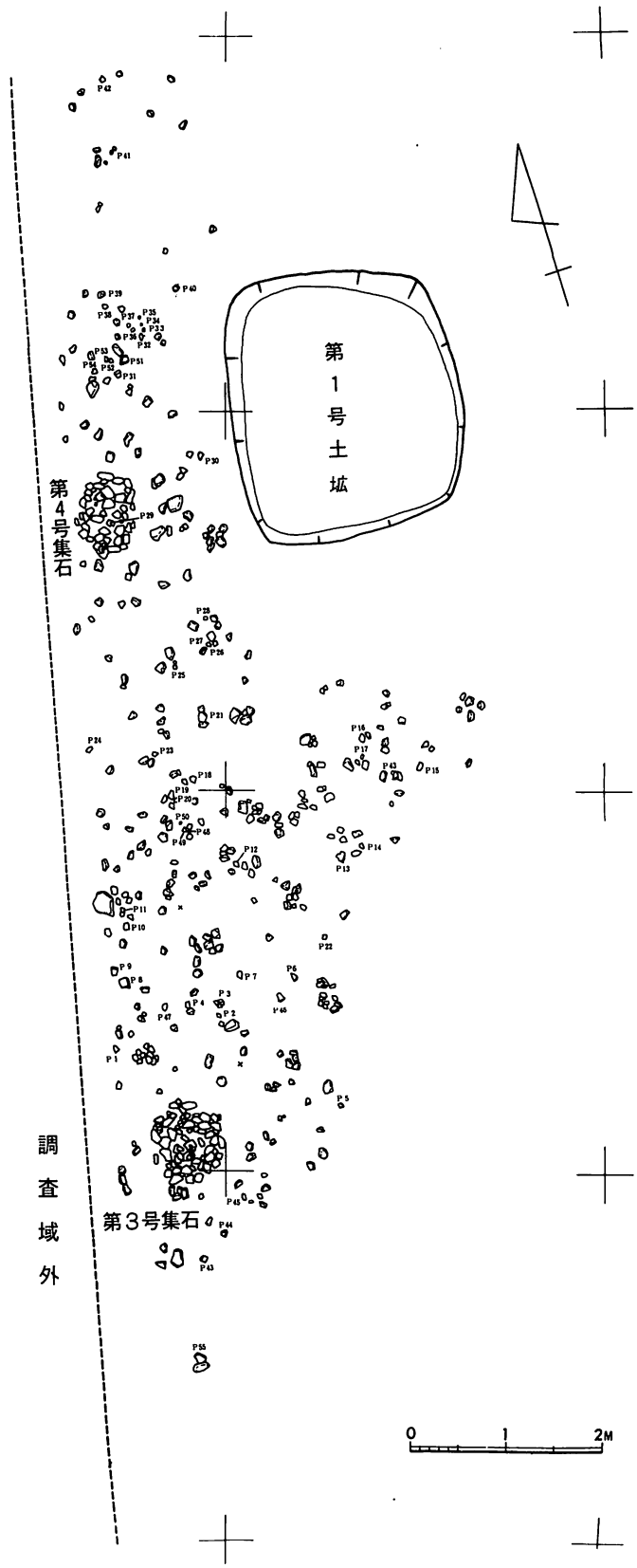
集石遺構 遺構を構成する石は灼けているものが多かった。中には、熱を受け赤変している

ものもあり、これがにたき等のために使用されたことは確かである。集石遺構のうち、1．2号はかなり動いており、うち2号については礫を取除き下部の状態をしらべた。3．4号はできるだけ綿密な実測と発掘を実施した。5．6号については表面的調査に止めた。

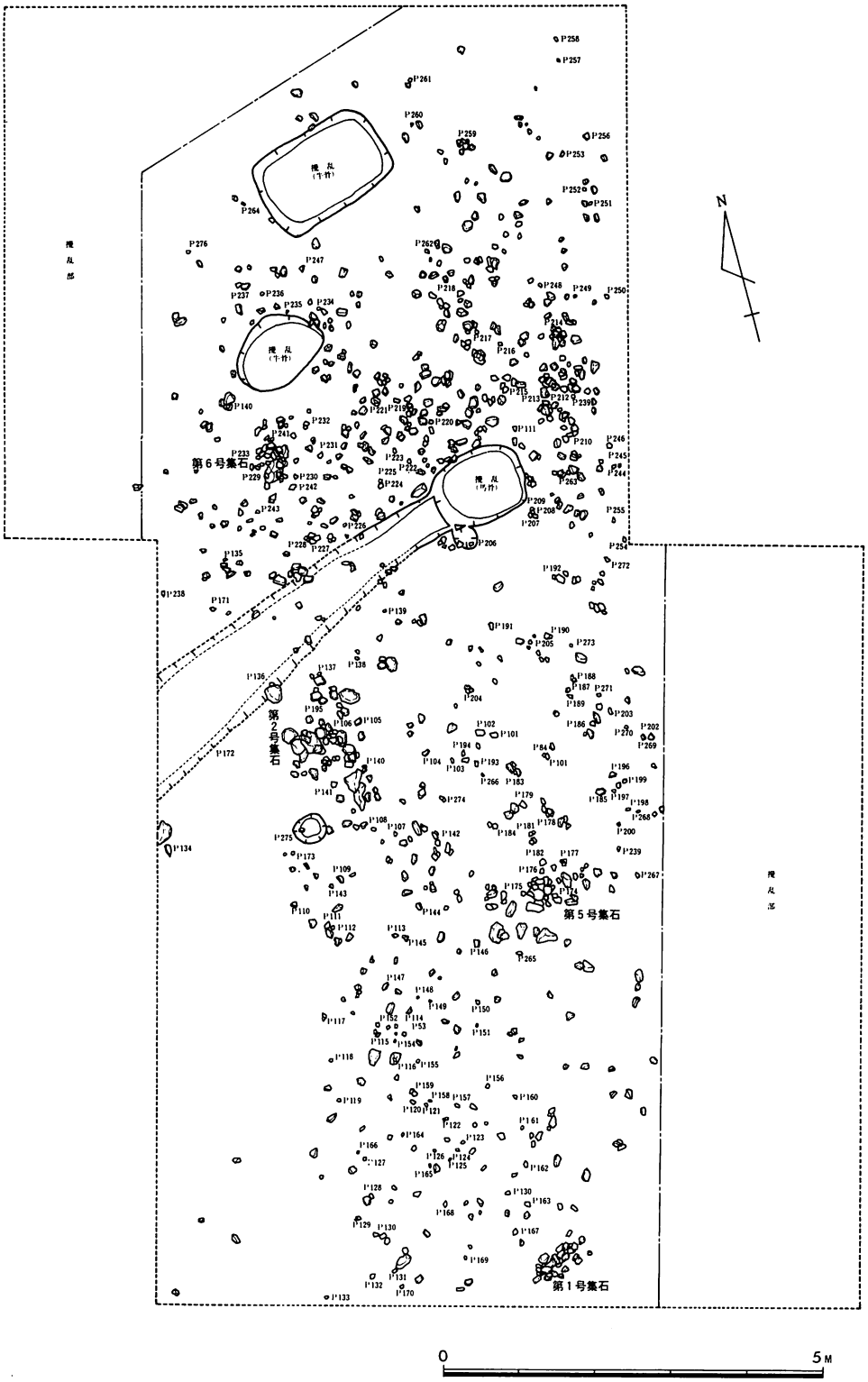
2号集石遺構は第Ⅱ調査区中央部西寄りのところに発見され、遺構を構成する礫群は乱れ、80cm～1mの範囲に散乱していた。礫は大部分が円礫であった。これらの礫を取除き発掘を進めると、僅かに掘込みらしいものがあった。周辺には黒曜石のチップと木炭粒があり、またピット中から底にへばりついた押型文土器が発見された。

3号集石遺構（第17図）は第Ⅰ調査区の西南端に近いA－8区に発見された。4号集石遺構とともによくまとまり、一つの完結した形で調査することができたのは大きな収穫である。また調査の手順として4号集石遺構から先に調査したため、その経験をもとにそれだけ入念な調査が出来た。

この遺構の礫の集積状態は、直径60cm位の範囲にまとまり、径10～15cm位の円礫が石組みの中に詰っていた。石組みの中に詰った石を一個また一個と取上げ、中から総数72個を取出した。これらの大



第15図　第Ⅰ調査区　Ⅲ層遺物出土状況



第16図　第Ⅱ区Ⅲ層遺物出土状況

部分の石が灼けていたことはいうまでもない。石組みは中央部が碗状に凹み、深さ15cm位であった。

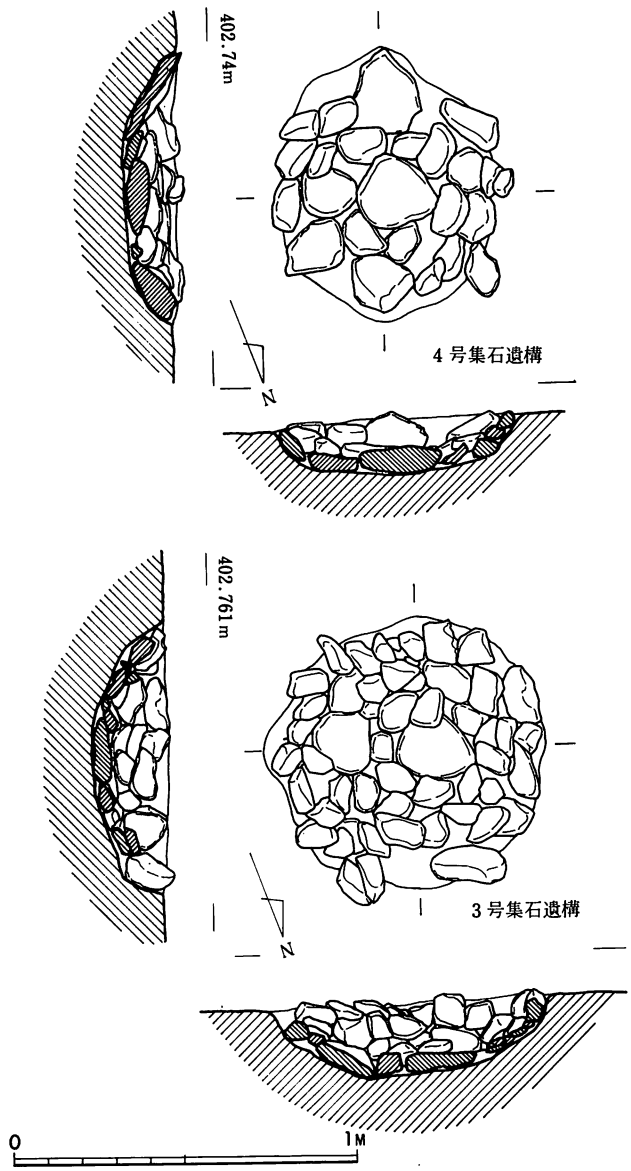
4号集石遺構は3号集石遺構の北約7mのあたりに発見された。ここは地区割によればA－6ということになる。集石は70～80cmの範囲にひろがりをみせていたが、調査の結果、径70cm位のまとまりのある集石遺構であることが知れた。これも手順にしたがい石を取出したところ、54個の礫を数えるに至った。

この遺構は、3号集石遺構に比べ、それを構成する個々の石が大きめであった。碗状の遺構の底も浅目で、深さ約10cmであった。

(2) 遺　物（第18図～第22図）

縄文時代に属する礫群と同レベルの黒土層には、礫に混り多数の縄文土器と黒曜石のチップ等が発見された。その分布の状態は図示したとおりである。以下、それらの出土遺物について述べる。出土した縄文土器には便宜的に番号を付し、第Ⅰ調査区出土のものはNo.1～No.100までとし、第Ⅱ調査区出土のものはNo.101以降として整理した。また、さらに表採および攪乱層出土のものについては番号の前に攪を付し、例えば、攪1、攪2と表記した。

土器は第Ⅰ調査区の第Ⅲ層出土のものは56片、それに採集または攪乱層出土のものが11片で、それらを合せると67片である。第Ⅱ調査区では調



第17図　第3・4号集石遺構

査面積に比例して出土した数も多く、第Ⅲ層から182片、それに採集または攪乱層出土のものが25片で、合計207片に達した。そこでこの遺跡で出土発見された縄文土器は274片ということになる。

本遺跡出土の縄文土器を文様ごとに分類すれば、押型文土器、撚糸文土器、そして斜行縄文土器、および条痕文土器、無文土器になるが、器面の磨耗や細片であるため種別の定かでないものが70片あった。

押型文土器は最も多く、総数143片に達した。破片からの単純計算では、土器片の半数余が押型文土器であった。押型文土器はさらに楕円、山形、格子目の施文に細別することができる。各々の数量は楕円文120片、山形文21片、格子目文3片の割合であった。これらの押型文土器はいずれも厚手で、胎土に砂粒を含み、比較的軟質の焼成のものが多かった。

楕円押型文の中にはいわゆる殻粒文（P159、187）と呼稱される細粒の楕円文から、個々の楕円文の短軸径10mmに達する疎大なもの（P13、P51）まであった。口縁部の状態も単に直上するもの（P173、P175）と、わづかに外反するもの（P8、P9、P159）、それにゆるく大きく外反するもの（P129、P172）などがあり多彩であった。底部の状態はその移行の状態から丸底（P103、P118）とみられるものと、平底（P22）のものがあった。口縁内側の状態は、通常上端から4～5cmの間に外側と同様の施文があるが、中には内側に山形文を施文したもの（P113）もあった。また、口縁部の直上するタイプのものには一般に内側の施文はみられなかった。

楕円押型文土器には器形の全体を知れるものはないが、大形の破片で興味ある資料がある。即ち、P8・P9のナンバーを付したもので、図示により復元すれば口縁部半径21.5cmである。口縁部はわづかに外反し、胴部はわづかに膨らみ、胴径は口縁径とほぼ同じである。この土器を特徴的なものとしているのに口縁下に一対の擬似穿孔がある。それは口縁下3～4cmのところに、内外からの丸い穴で、焼成前の造作である。穴は貫通していない。この一対の擬似穿孔が何を意味するか今のところ明らかでないが、縄文土器にみられるいわゆる補修のための穿孔と異なっている。

山形文・格子目文の押型文については、個体数が少ないので器形の全体像を知るに都合が悪い。しかし、大要として、楕円押型文と近いことが考えられる。横に山形文を押捺施文したものが多いなかに、縦方向に施文したもの（P250）もある。

撚糸文土器は押型文土器についで多く、総数42片の破片が出土した。さらに文様を細別すれば、網目状になるものが15片、単に一重の撚り糸を施文したのが27片になる。また、施文は縦方向のものが多く、土器の胎土は押型文土器と大差なく、粘土中に砂粒を含んでいる。焼成は概して軟弱である。これらの各土器片は厚さ10mmを超えるものもあるが、概ね薄手に作られていて、厚さ7～8mm程度のものが多い。口縁の状態は直上して上面が尖り気味になるもの（P221）もあるが、薄手のものは外へはねるもの（P193、P247）がある。底部の状態は破片のた

め定かでないが、移行の状態から丸底（P136、P108）になるものとみられる。

斜行縄文土器は合計4片で、土器の全体の割合にして少ない。胎土、焼成にしても前記の各土器と大差ない。

条痕文土器も少量出土していて、第Ⅰ調査区、第Ⅱ調査区合せて4片出土した。条痕文土器の胎土、焼成等についても押型文土器と変りがない。条痕は横に、数本を単位として施文されているごとくである。P195は口縁部の破片で、大きく外反し、末端にゆくにしたがって薄くなっている。この種の条痕文土器は、これまで中九州の各地で発見されているところのいわゆる円筒形条痕文土器とは異なるもので、類例が数多くないようである。

無文土器は12片が出土している。胎土、焼成なども押型文土器に類似し、大きな違いはない。P259は無文土器の口縁部と胴部であるが、口縁部はわづかに外反し、上端がいく分薄くなる。胴部は少しふくらみ、器面をナデにより調整され、文様の施文はない。

以上のように下城遺跡出土の土器は、文様別に大別して4種類あることが確認された。器形は口縁部が直上するもの、外反するものなどがある。胴部に張りのあるものは少なく、最大胴径は口縁径を上まらないものと思われる。底部は丸底又は平底で、今のところ尖底の存在は確認されていない。撚糸文土器のうち網目状の文様のものがあるが、他の地域に例のあるような塞ノ神式土器に属するものは認められなかった。

石器類（第24図）の第Ⅲ層出土のものは第Ⅰ調査区で23点（スクレイパー1点・石核4点・剝片および砕片18点）が、また第Ⅱ調査区では35点（石鏃1点・石核1点・剝片および破片33点）がそれぞれ発見された。石材には黒曜石、頁岩、玄武岩質安山岩が用いられている。剝片・破片には黒曜石のものが主体を占める。これらの石器の出土層位は、そのほとんどが縄文土器と等しいレベルで検出されたが、一部には、Ⅲ層下面ないしⅣ層上面において出土したものもある（第24図6、7、9、10、11）。また平面的には、一定の地点に集中して出土するといった傾向は示さず、散発的に検出されたが、第Ⅱ調査区の2号集石周辺において若干まとまって出土した。

ここでは上記のうち11点の石器および剝片について記述する。

1は頁岩製**石鏃**である。1.5×1.2×0.2cm、重さ0.42gである。表裏の二次調整は粗雑で、裏面には主要剝離面を残す。基部の抉りは明確でない。第Ⅱ調査区出土。2は頁岩製の**スクレイパー**である。3.3×3.9×1.0cm、重さ17.08g。厚手の不定形剝片を素材とし、先端部に最終剝離面側からの粗い二次調整剝離を加えて刃部を作り出している。基部は打撃面を残しており二次調整は施されていない。3は玄武岩質安山岩製の大型の横長剝片である。5.3×12.3×2.1cm、重さ88.98g。2枚の調整剝離面を持つ打面からの打撃によって剝取されたものである。上面観は翼状をなしており、先端および右側縁は折断されている。4・5はいずれも頁岩製の不定形剝片である。4は2.0×4.5×0.8cm、重さ6.14g。5は3.1×2.7×1.2cm、重さ12.20g。表面の剝離面の観察によると、8のタイプの石核が想定される。6は黒曜石製**横長剝片**である。

1.9×2.8×0.6cm、重さ2.60 g。腰岳産と思われる良質の黒曜石を石材に用い、調整打面を持つ石核から剝取されたものである。器面の風化はかなり進んでおり、油を薄くひいたように鈍く光る。使用痕は観察されない。7は頁岩製石核である。3.7×2.6×7.9cm、重さ18.89 g。第2号集石付近のⅢ層下部より出土した。打面は自然面を残しており、二次的な調整は施されていない。剝面剝離は打面のほぼ半周にわたって行われており、14枚の剝離面が最終的に残っている。剝離面の観察によると、得られた剝片はやや寸詰まりの縦長剝片と思われる。器面の風化はすすんでおり、灰色を呈す。8は頁岩製の不定形石核である。背面の一部に原礫面を残す。剝面剝離はまず上下面端の調整打面からの文互剝離によって行い、その後任意の方向からの打撃による。風化はあまり進んでおらず、灰黒色を呈す。3.8×3.3×2.1cm　重さ22.88 g。9は黒曜石製小石刃核で、3.1×2.3×1.7cm、重さ6.00 gである。厚手の不定形剝片を素材とし、2面の直交する打撃面をもつ残核である。打撃面は、それぞれ1回の打撃によって平坦な面に調整されている。図示した左図の有効加撃面での剝片剝取が行われた後、打面を 90° 反転させ、新しく打面を作出し、その面から再び剝面剝取を行っている。得られた剝面素材は小形の縦長剝片と思われる。D－5Ⅲ層下面より出土。10は黒曜石製石核で、3.1×2.8×3.0cm、重さ10.40 g。打面を 90° ごとに反転させるタイプの不定形石核である。打面は3と同様、1回の打撃によって作り出されている。剝取された剝片は寸詰まりの不定形のものと思われる。11は黒曜石製細石刃核である。3.5×3.3×1.8cm、重さ16.75 g。厚手の不定形剝片を素材とし、最終剝離面に二次調整を加え、下縁を作り出している。打撃面は平坦な自然面をそのまま残し、調整は施こされていない。有効加撃面には1条の剝離痕が観察されるのみである。3号集石の付近の第Ⅲ層下面にて出土した。

以上の石器のうち、1・2・3・4・5・8はその形態及び、出土状況から、Ⅲ層より検出し縄文土器群に伴なうものと考えられる。

残る6・7・9・10・11は剝片剝離技法、出土状況を考えると、先土器時代終末期の所産とも考えられる。

土器の接合関係を知るため、注記後折を見て土器の観察と接合につとめた。その結果いくつかの接合資料が得られ、また器面と胎土、焼成の状況から同一個体と目されるものが多数発見された。下に取上げるのはそれらの土器で、相互に接合関係にあるものは＝で示し、同一個体と見られるものには－で結んだ。

山形押型文

1．P155－P200－P214－P244－P258－P210＝P215＝P216＝P246＝P211

2．P205－P178－P220－攪－P227＝P226＝P109－P171

楕円押型文

3．P159－P231－P268－P273－P187＝P101

4．P121－P275－P173＝攪　－攪　－P239－P117

5．P188－P135－P104－P254

6．P８＝P９

7．P21－P47－P53

8．P26－P28

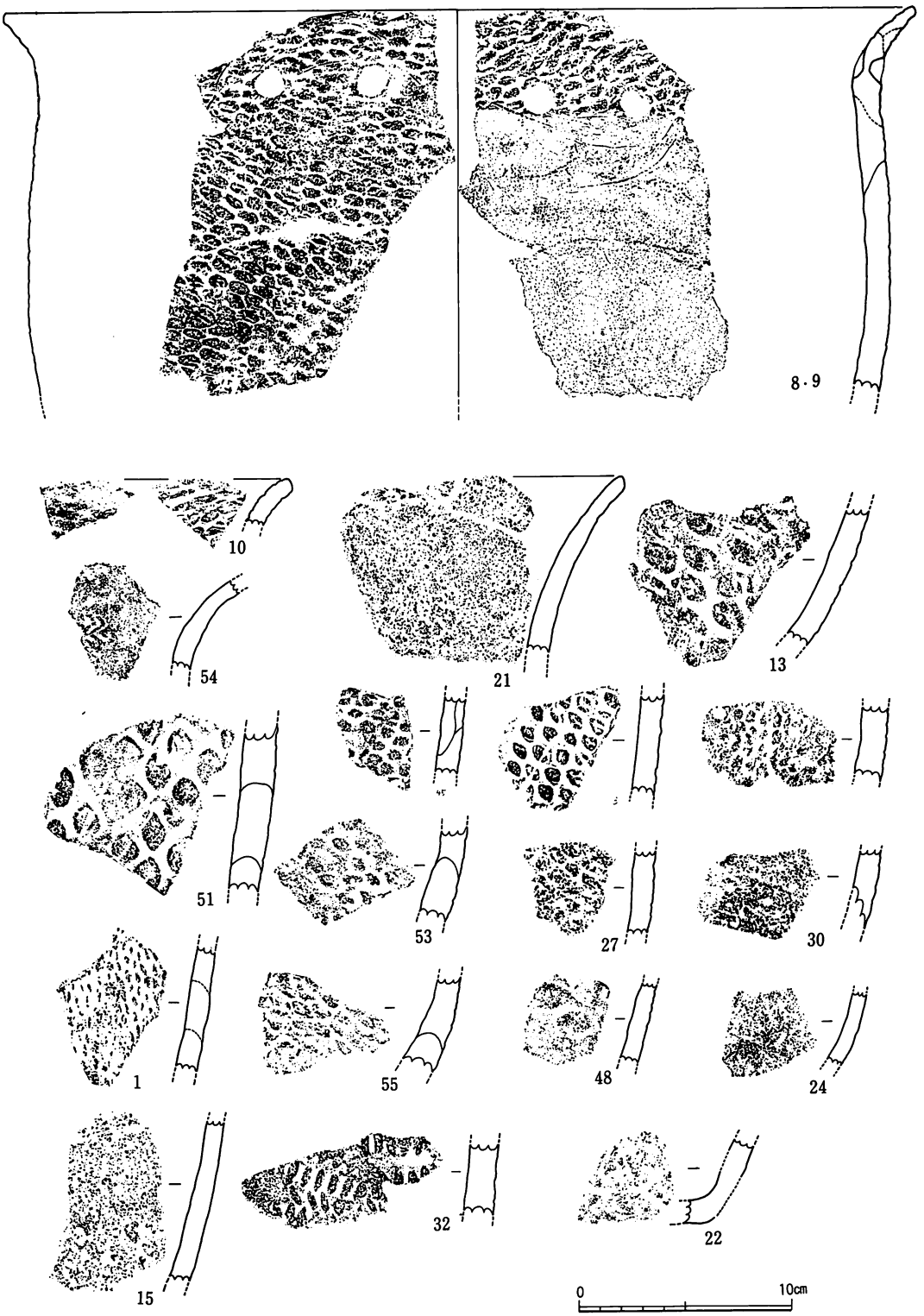
撚糸文土器

9．P111－P269－P202－P239

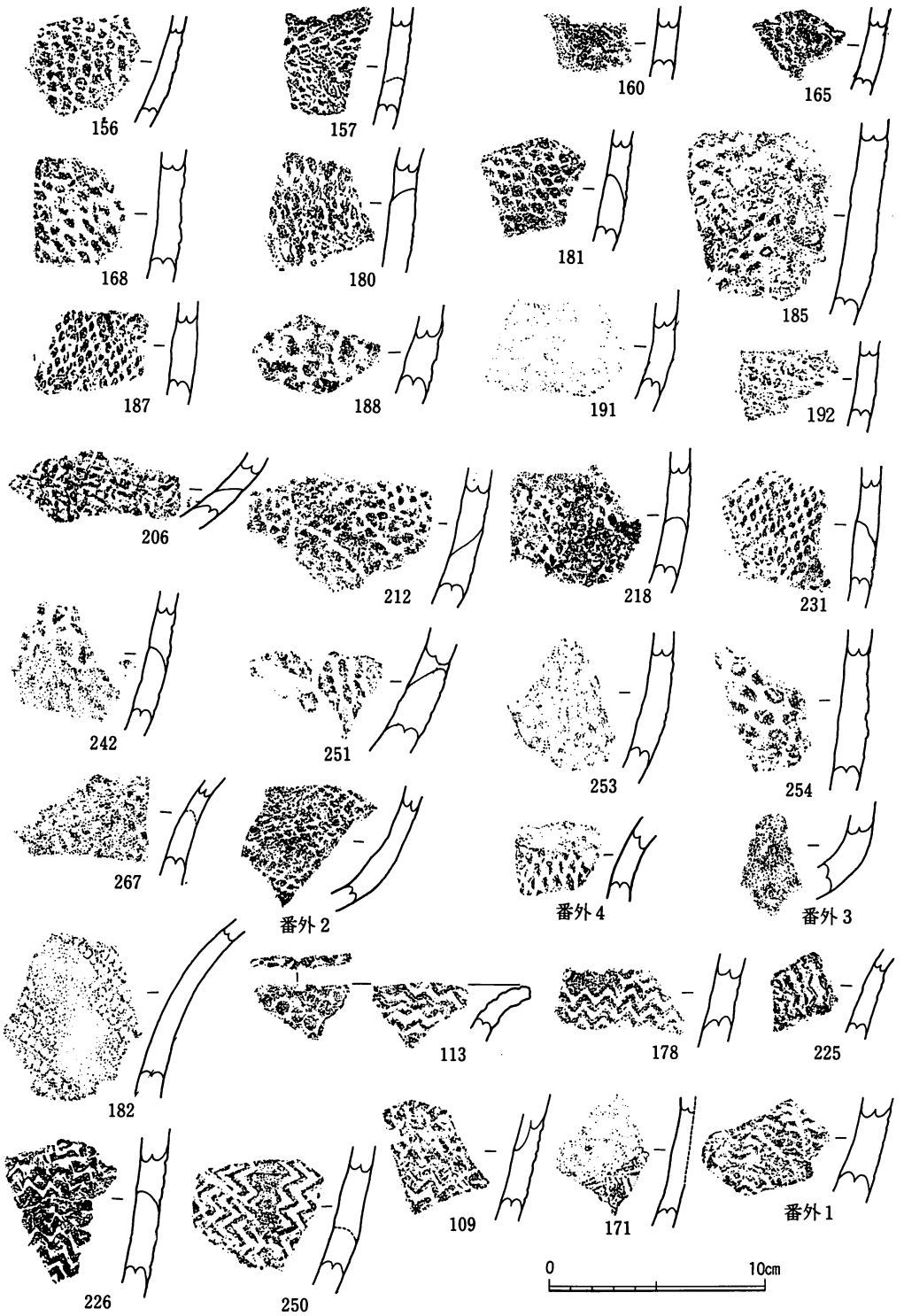
10．P141－P232

以上のように同一個体とみられるものが11個体あるが、この11個体分の破片数にすれば53片となる。本遺跡黒土層出土の土器片は総数274片（採集、攪乱層分を含む）ある。そこで残りの221片がそれぞれ独立した個体ということになるが､破片が小片であるため定かでないものも多く、必らずしもその様な数にはならない。

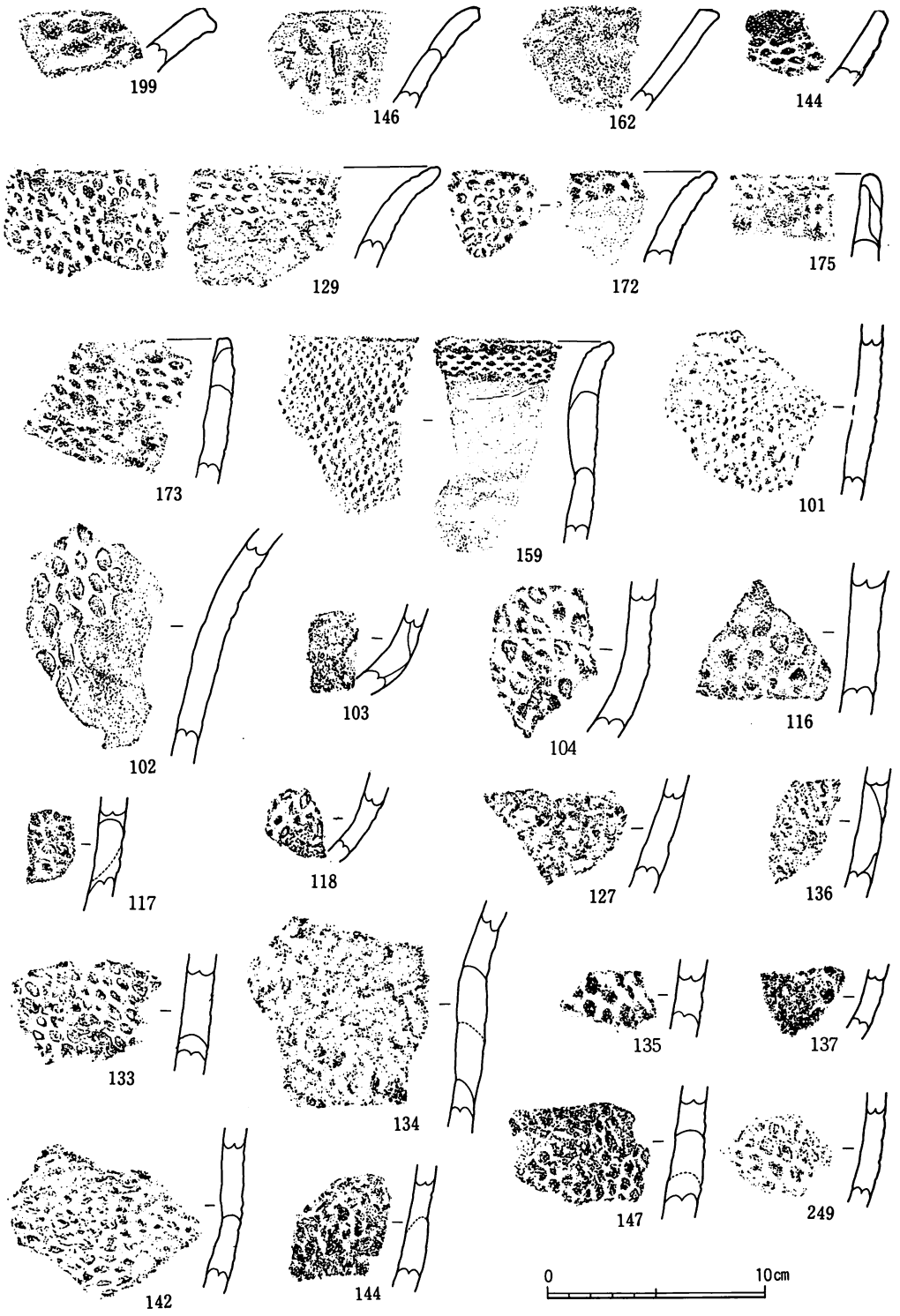
同一個体とみられるものは山形押型文２、楕円押型文６、撚糸文および無文土器がそれぞれ２個体である。出土分布のうえからみた場合、同一個体がかなりの広域に散乱していることが知れる。例へば１とした山形押型文土器は10片あるが、第Ⅱ調査区の最北にあるP258と南寄りのところにあるP155では13ｍ70㎝の離れがある。２としてあげたP205以下８片は同一個体とみられるが、これも５～６ｍの範囲に分布している。この土器片の分布が何を意味するか、分布の状況から判りようはないが、遺跡を考える上の参考とはなろう。



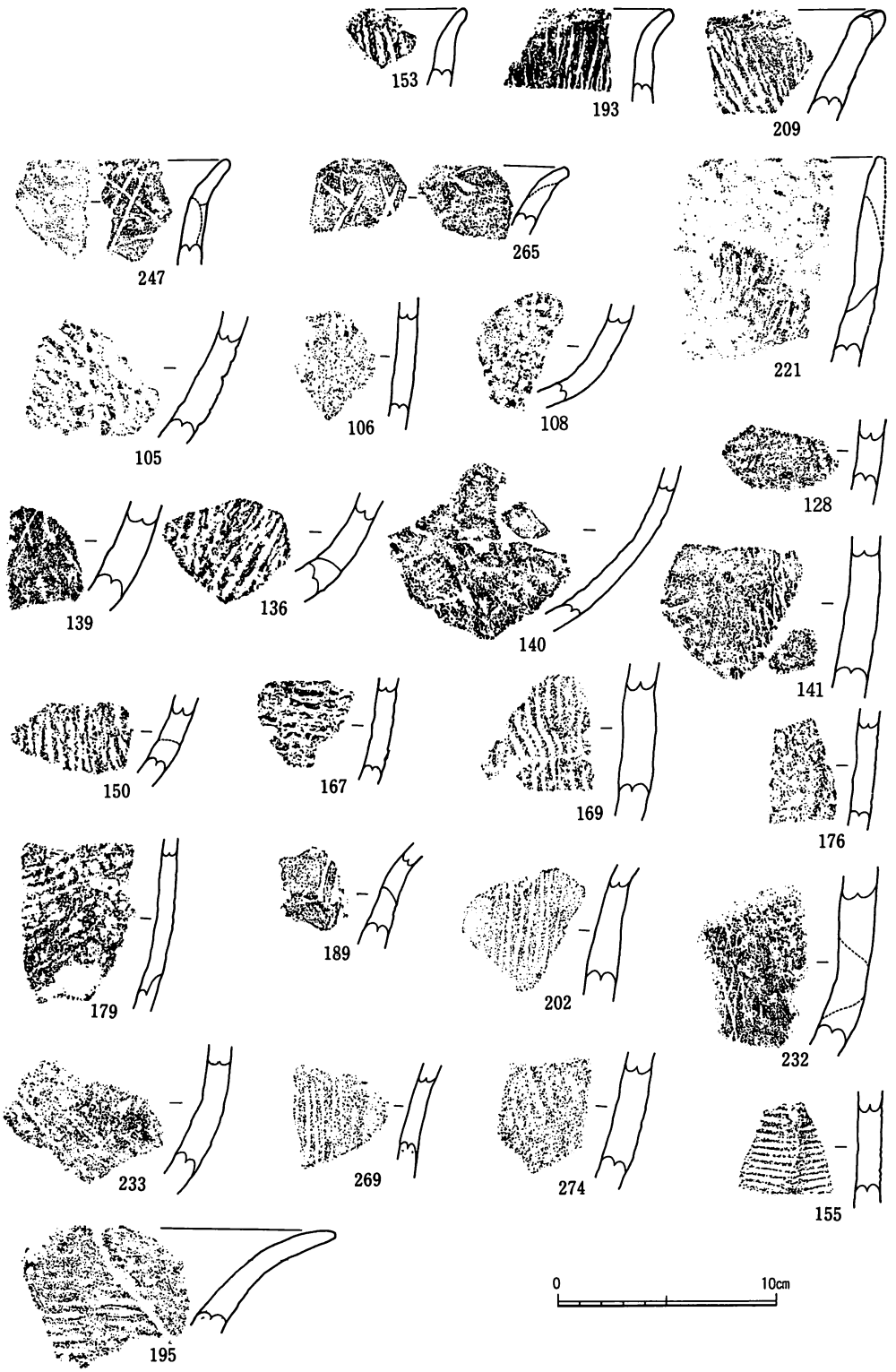
第18図　第Ⅲ層出土押型文土器 (1)



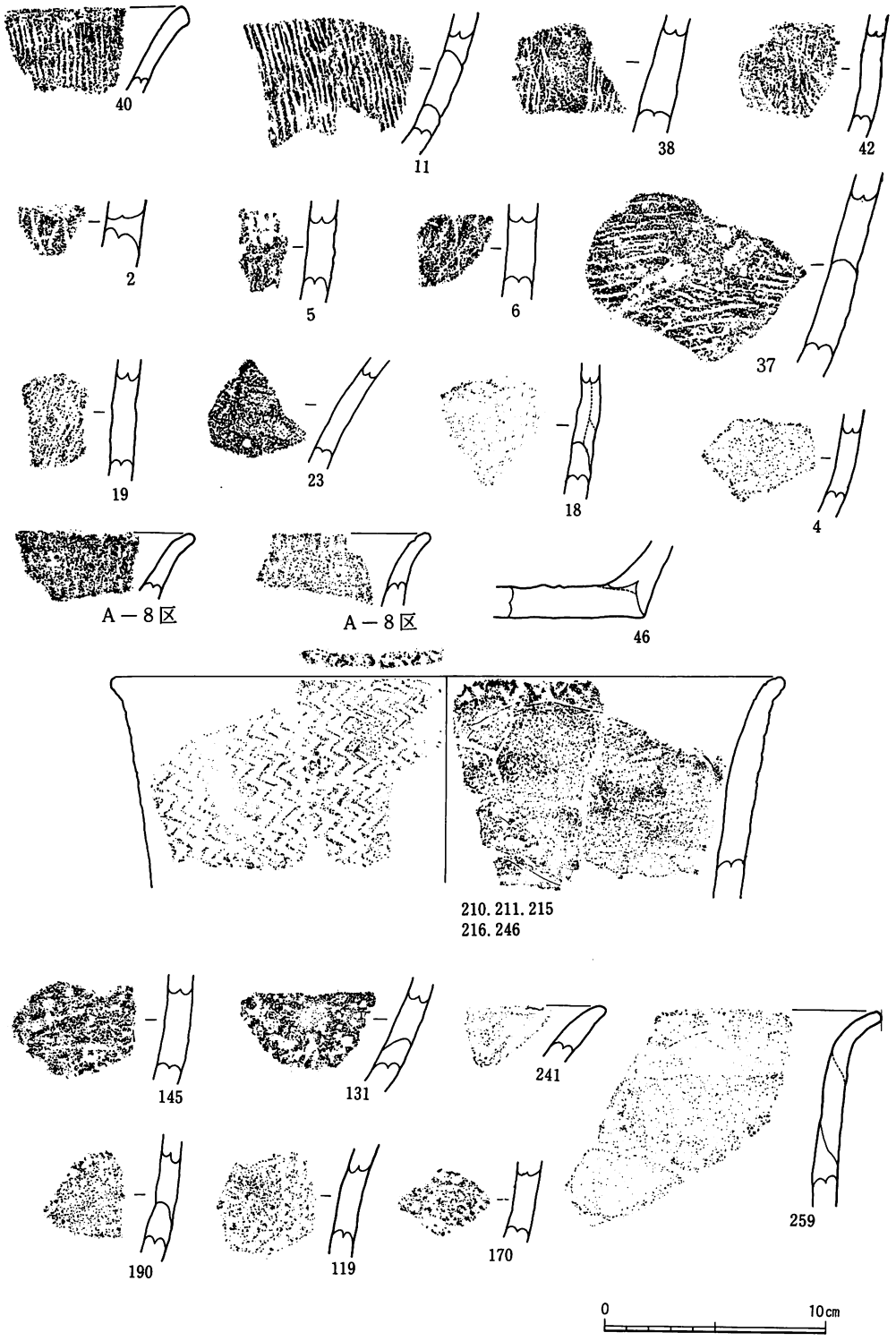
第19図　第Ⅲ層出土押型文土器 (2)



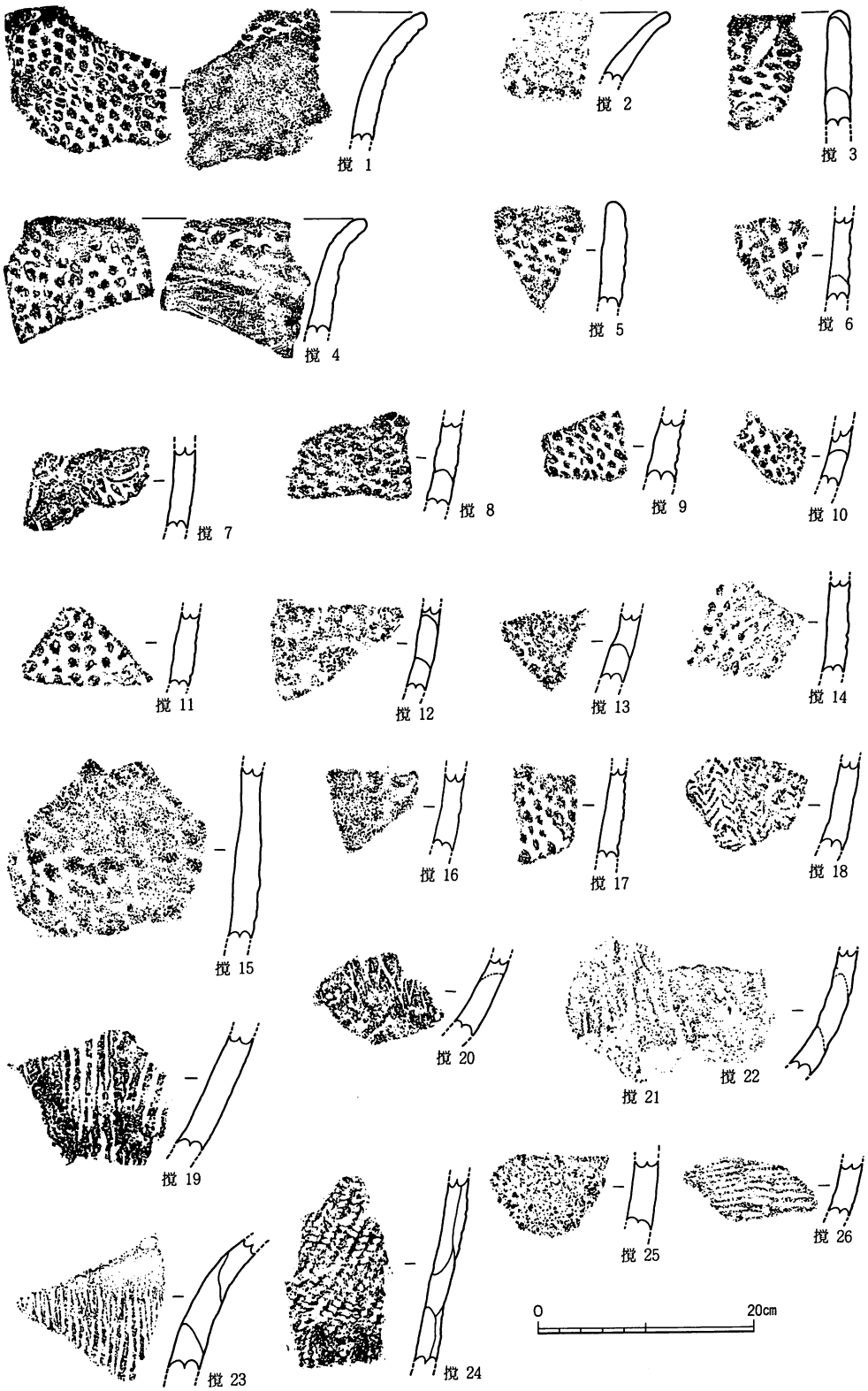
第20図　第Ⅲ層出土押型文土器（3）



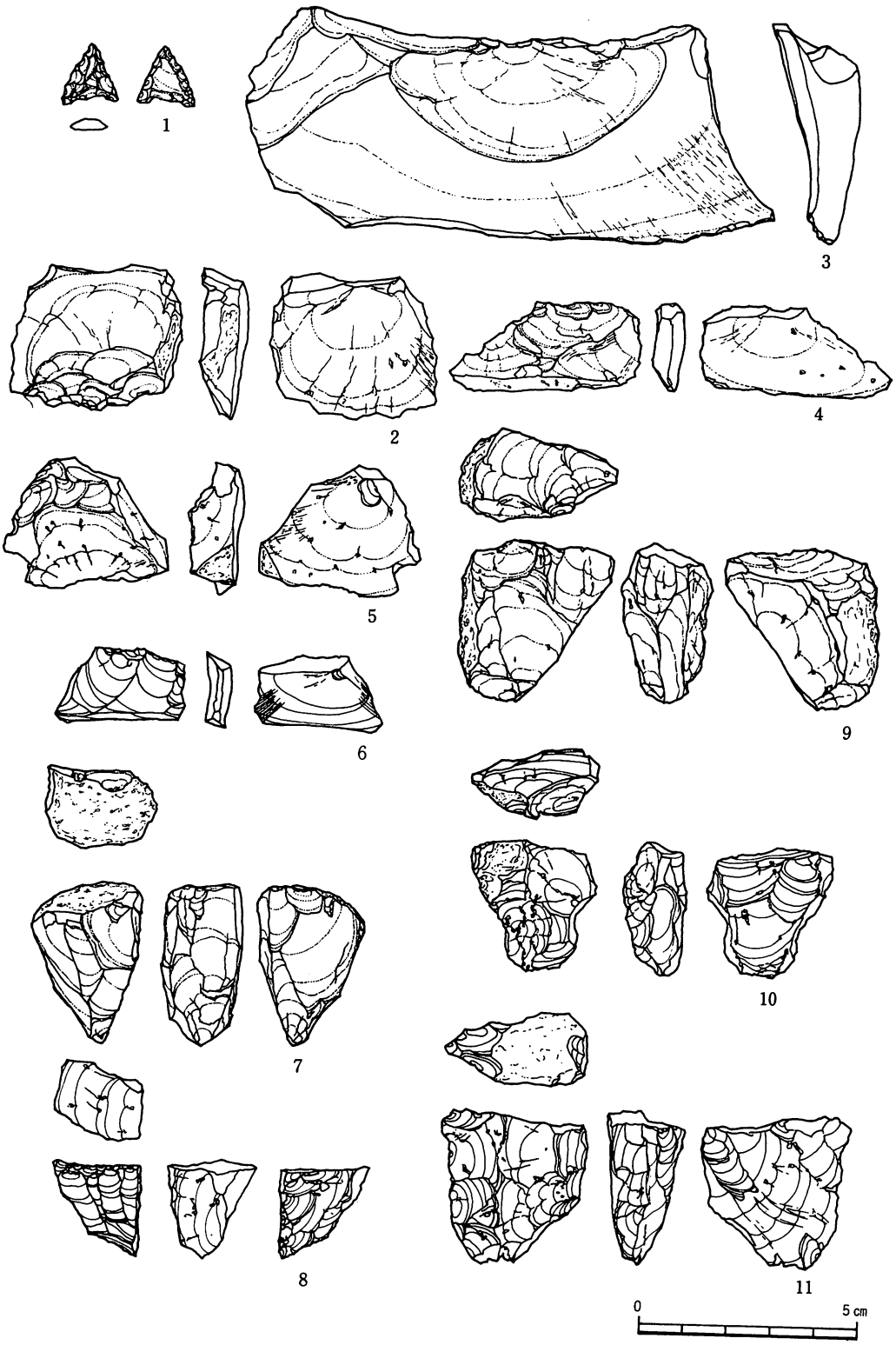
第21図　第Ⅲ層出土撚糸文・条痕文土器



第22図　第Ⅲ層出土撚糸文・山形文・無文土器



第23図　　調査区表面採集縄文土器



第24図　第Ⅲ層出土の石器

表6　縄文土器種別毎出土数

種別		区別	第Ⅰ調査区 表採・攪乱	第Ⅰ調査区 Ⅲ層	第Ⅱ調査区 表採・攪乱	第Ⅱ調査区 Ⅲ層	小計	総計
押型文	楕円文	口縁部	2	2	6	13	23	120
		胴部		20	12	61	93	
		底部		1		3	4	
	山形文	口縁部				5	5	21
		胴部			1	14	15	
		底部				1	1	
	格子月文	口縁部				1	1	2
		胴部				1	1	
		底部						
撚糸文	網目	口縁部				6	6	15
		胴部		5	1	2	8	
		底部				1	1	
	一重撚	口縁部		1		7	8	27
		胴部		7		11	18	
		底部		1			1	
斜行縄文	口縁部					3	3	4
	胴部				1		1	
	底部							
条痕文	口縁部			1		1	2	4
	胴部					2	2	
	底部							
無文	口縁部					5	5	12
	胴部				2	3	7	
	底部							
不明	口縁部			1		1	2	70
	胴部		9	14	2	41	66	
	底部			1		1	2	
計			11	56	25	182	274	

(3) 縄文時代のまとめと若干の考察

下城遺跡での縄文時代遺構調査により、そこから新たな資料を得ることができた。個々の事象については前に述べたとおりであるが、ここで集石遺構の構造が把握されたのが一つの収穫である。これに類する遺構は、これまで同時期とみられる遺跡にもみられたが、調査の時間的制約等により結果を充分見届けられなかった。下城の３・４号集石遺構にみられるように、自然礫を用いた石組みの遺構、それがどういった機能であるか明らかでないが、一つには炉としての機能も考えられるところである。表現として集石炉、あるいは石組み炉などの言葉も考えたが、焼土などが発見されなかったことから自重した。

出土遺物には土器片と石器があるが、土器の割に石器の数が少なかった。もっと広域に調査区域を拡大すれば新な発見もあろうが、今のところ石鏃とスクレーパーおよび多数のチップに止まった。土器は黒土層にひろがり礫群にまじって、ほぼ全域に散布していた。文様ごとに類別すれば押型文土器、撚り糸文土器、斜行縄文および条痕文土器、そして無文土器がある。それらはほぼ同一レベルに出土し、出土の様態に特別の違いはない。これを共伴遺物とみるには、あるいは意見の分れるところであろうが、一應の共件と見るほかない。器形の上からも、従来の様式観念を通してみれば、丸底で古い様相のものから平底の新らしい形のものまである。考えさせられるところである。

礫群を伴った縄文期の遺跡は他にも類例がある。下益城郡松橋町の古保山Ｃ遺跡[注1]、上益城郡益城町櫛島遺跡[注2]も同類の遺跡であろう。古保山Ｃでは押型文土器、撚糸文土器そして条痕文土器などが出土しており、集石と共に焼土なども出土した。櫛島では条痕文土器、塞ノ神式土器などが礫群と共に出土し、炉穴３基もここから発見された。礫群を出土した遺跡として菊池郡大津町無田原遺跡[注3]がある。調査者により環状列石として認識把握されたが、これも恐らく下城遺跡と同類の集石遺構または礫群と解することも出来よう。昭和53年に発見調査された大津町の中後迫遺跡[注4]も同類で、一面に礫群がひろがる中に押型文土器、塞ノ神式土器が伴出し、数基の炉穴と集石がみられた。

以上のように県内各地の調査事例の中に類例を求めることができる。礫群が一面にひろがり、そこに縄文の古い時期の遺物が出土する、それは、ある文化期における生活の態様を示したものとのみられ、特定の時期に属する遺跡の通有の現象とも受取れる。また遺跡の状況を山嶽地域の下城遺跡と平坦部の各遺跡と比べた場合、そこに大きな違いは見出せない。状況的に同一と言うことができよう。

熊本県内の縄文の古い時期の遺跡には、しばしば炉穴を伴うことがある。前述の櫛島、中後迫の各遺跡がそれで、他にも沈目立山、諏訪原の両遺跡からも炉穴が出土している。下城遺跡においては、未調査地域が大きく西にひろがることから、炉穴の存否について決しかねるが、それが存在しても不思議ではない。

以上の様な状況から、下城遺跡は縄文時代早期とみることができよう。念のため年代測定のため、黒土層の礫群のあたりから木炭採集した。早晩 ^{14}C による測定結果が期待され、とくに櫛島遺跡との ^{14}C の年代比較には注目される。^{14}C による測定値の相対的比較は、土器の形式比較と合せ問題の新たな展開ともなろう。（緒方）

注1　昭和46・47年九州縦貫自動車道工事に先たって調査、ここより押型文土器をはじめ、礫群と焼土が発見された。

注2　櫛島遺跡　熊本県文化財調査報告　第18集　昭和50年3月

注3　無田原遺跡は菊地郡大津町所在、昭和48年春坂本経堯氏らが調査

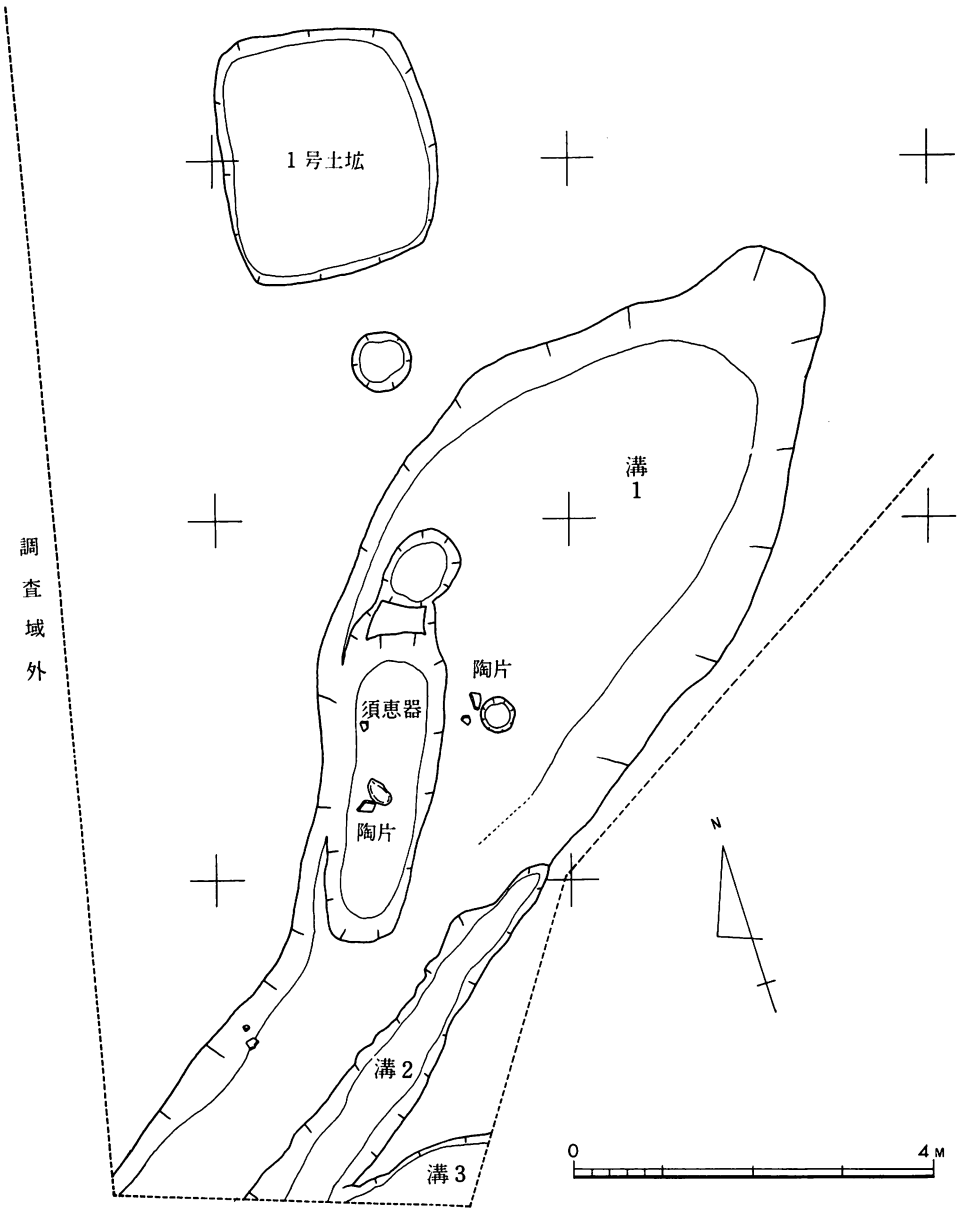
注4　中後迫遺跡は大津町に所在し、昭和53年県文化課が試掘、そして同年九州電力と同調査団（団長田添夏喜）が本調査を実施、目下報告書上梓中。

3.　中世城跡

(1) 第Ⅰ、第Ⅱ調査区の発掘（第25図）

第Ⅰ調査区の西側部分は城の主郭としての最重要部分と考えられ、それは踏査時の所見によっても明らかである。そこには由緒ありげな６本の大杉（元々７本あったが、１本は伐採）があり、大杉のあたりに古井戸があったという。古井戸はここぞと思われるあたりを探したが、埋没していて表面観察では所在をつきとめるに至らなかった。

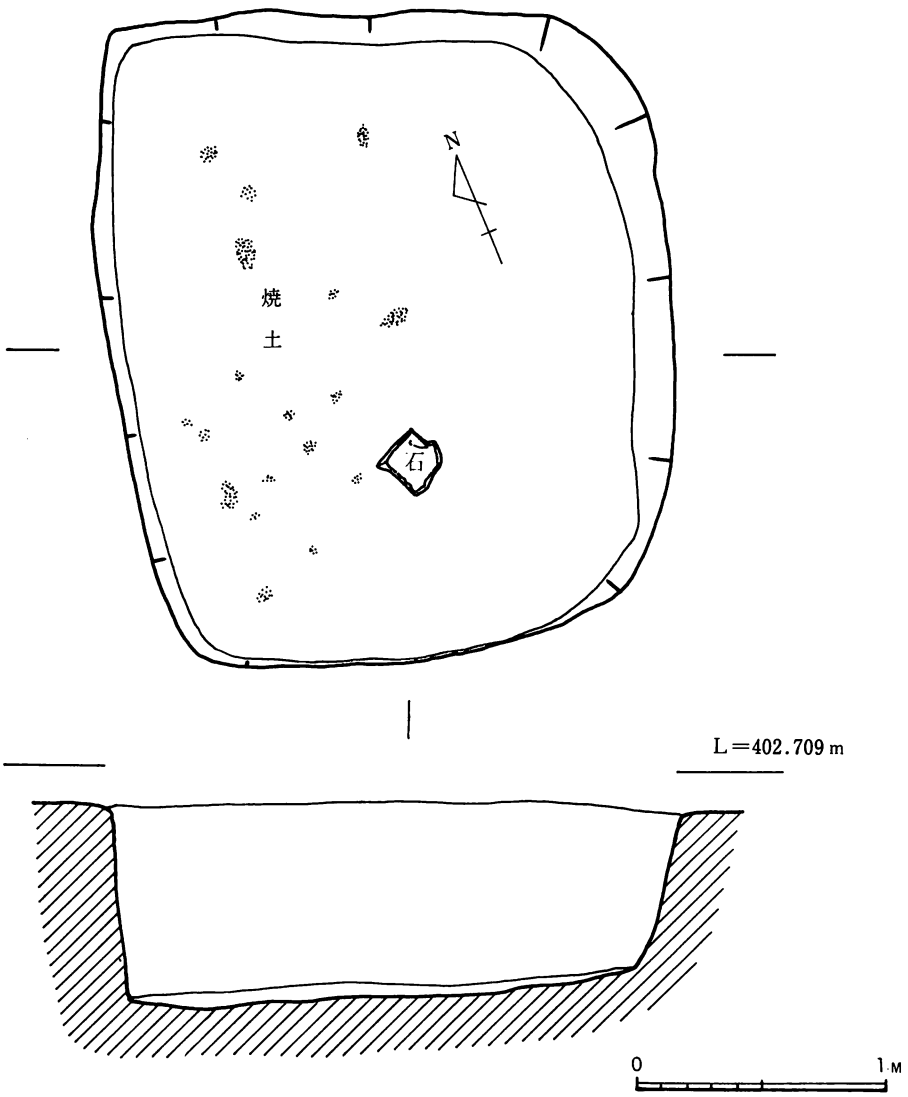
この下城の中心地域は不正五角形をなし、地形がわずかに東側へ傾斜しているもののほゞ平



第25　中世土坑と溝様遺構平面図

坦面をつくっている。道路予定地は東側をかすめるかたちで通り、そこを調査対象地とした。即ち第Ⅰ調査区である。

この調査地は前にも述べているとおり、櫟などの雑木地で、抜根、表土はぎに手こずった。とくに10数株の櫟の根株は、一部調査地の地層を乱すことにもなった。また表土下の地層の乱れもはげしく、南側はポカポカと浮いた状態のところもあり、中には木炭片が多量に混入したりしていた。どの様にして土壌中に木炭が混入するに至ったか、いろいろ考えられることではあるが、この小国・津江地区は球磨・芦北地区と共にかつては有数の焼畑地帯である。この地方では焼畑のことを「カンノ」と呼び、林木伐採後のうら木を焼いて焼畑耕作をするのである。植栽した幼木が成長するにつれ、再びもとの山林にもどすことになる。昭和の10年代までは焼



第26図　中 世 土 坑

畑をやっていた、というのは地元の作業員の話である。話の前置きが長くなったが、土中へ多量の木炭の混入は一つにカンノ作等によることも考えられよう。

第Ⅰ調査区より、土坑２と数条の溝様遺構が発見された。

土　坑　１号土坑は第Ⅰ調査区Ｂ－６．７から発見された。土坑は2.6m×2.2m位の隅丸方形で、深さ約80cmであっさ。この土坑発見の状態は次のとおりである。

表土はぎを終った段階で多数の石が出た。黒土層（縄文期）から出土する礫群とは異なり、多くは割石で、中には石垣石ではないかと思われるものもあった。２m位の範囲にひろがり、散乱の状態に規則性は見出せなかった。若しかしたら根固め石ではないか、或は埋納遺構ではないかと考えながら石を排除して行った。石は大小様々で、そう多くはなかった。やがて土壙の掘込みが知れ、土坑の平面プランが判るようになった。土坑は北側半分を残して、南側の部分を掘った。中に石の落込みは殆んどない。上面の石は後からのものに違いなかった。土層中には深さ20cm位のところから木炭が出はじめる。炭は堅炭状のもので、表面は消し炭の様に丸くなっていない。漸次土坑は深くなる。床面近くになると木炭の量もふえ、焼土が点々と出るようになった。

１号土坑の発掘の状態は以上のとおりであるが、焼土、木炭、それと小鉄片と土器片がある。鉄片、土器片は土坑の機能を示していないようで、類例増加をまって究明するよりほかにない。出土土器は火舎などの５点の瓦質土器があり、いずれも中世紀の遺物と考えられる。

２号土坑はＤ－４区から発見された。埋土の状態形状からして、１号土坑類似のものである。2.20m×1.40mの長軸をほゞ東西にとる隅丸長方形で、深さは約80cmであった。掘込みの層は第Ⅳ層のかなりの深さに達し、下面の先土器時代石器出土層を掘凹められていた。層中発見の遺物に黒曜石片があるが、それは下層遺物が混入したものとみられる。

１号土坑、２号土坑は形態的に近い。埋土の状態、出土遺物から中世城下城の時期のものとみられる。

溝様遺構　第Ⅰ調査区の南西端に溝様遺構が発見された。溝様のものは３条あり、いずれも東北より南西に流れている如くである。ここでは西側より便宜的に溝１、溝２、溝３とする。

溝１は約16mの長さを発掘した。幅約２mの溝は浅いＵ字形の断面をしていた。この溝は中央部が幅４m余に膨らみ、溝中の西よりのところに堀込みがあった。堀込みは円形のものと長楕円形のものがあった。溝１の中から須恵質の土器片と施釉陶片が浮いた形で出土した。

溝２は堀込みの状態から溝１より新らしいものとみられる。溝幅約80cmで、約５mにわたって発掘した。更に溝３は下の方で溝２と合流していた。溝３はその一部だけ発掘するのに止めた。

以上のような溝様遺構が発見されたが、遺構が調査域外にわたるため一部を発掘したに止まった。遺構の機能等については明確でないが、遺構中の土器からして中世に属するものとみら

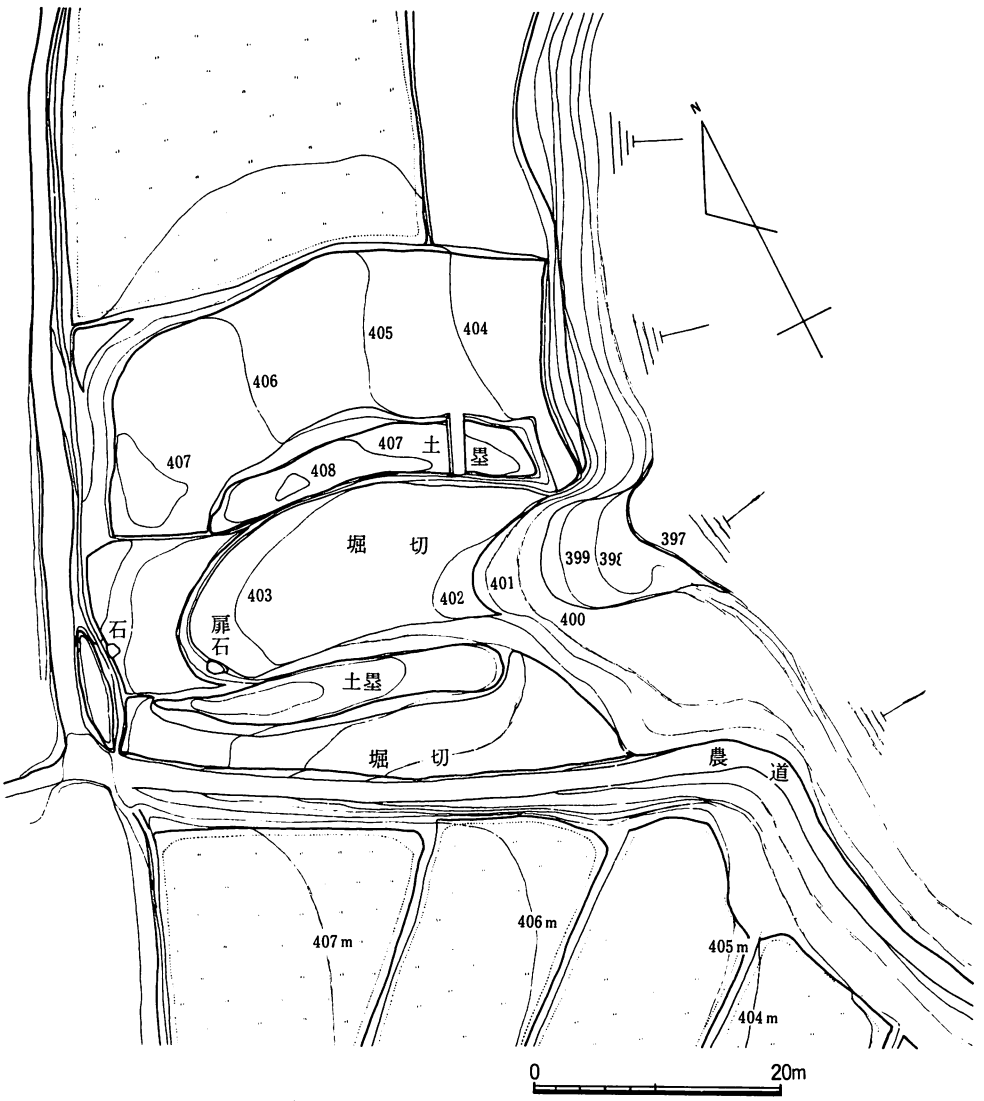
れる。

出土遺物（第29図）

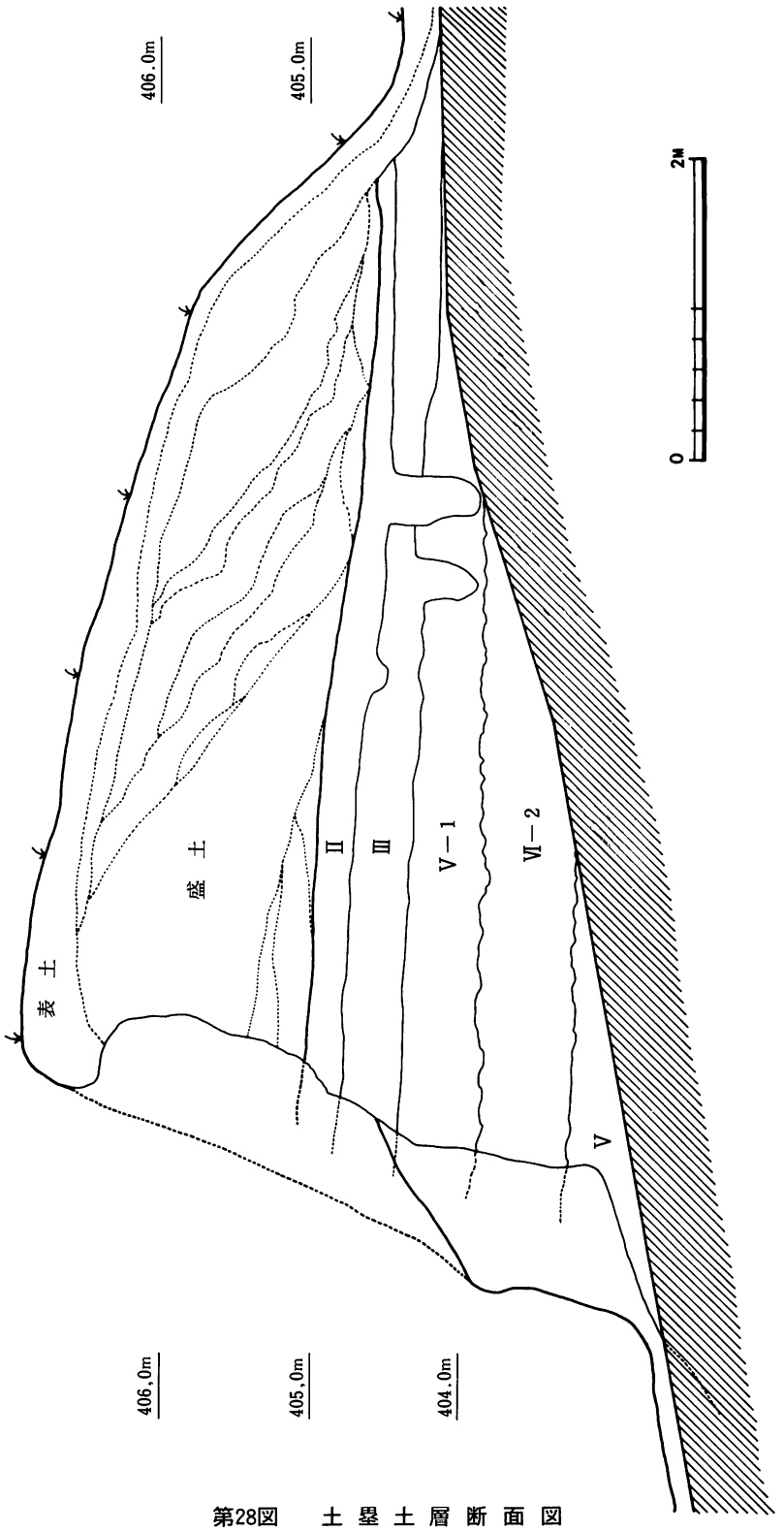
下城遺跡から中世に位置づけられると思われる遺物に陶磁器、須恵質土器、土師質の土器および瓦質の土器がある。大部分は小破片で図示にたえないが、第29図は主な出土遺物である。

1は青磁である。小破片であるので器形が定かでないが、形からして四耳壺になるものとみられる。色はくすんだ灰オリーブである。2、3は白磁で皿、碗形磁器である。また図示してないが、口縁部がふくらみ、断面が三角形になる碗も出土している。これらはいずれも攪乱土中よりの出土である。またこの種の磁器は中国華南の同安周辺の窯に出土をみている。

4～6は須恵質土器で、色調は赤い焼きである。4は蓋形土器で、5は壺の胴部、6は底の



第27図　土墨と堀切



第28図　土墨土層断面図

破片で、いずれも小破片である。4は攪乱層から、5・6は1号土坑上面から出土した。

7～10は土師質の糸切底の皿で、灯明皿などに使用されたものとみられる。この遺跡からこの種の破片は多く、完好なものはない。9は第Ⅰ調査区の溝より出土した。

11、12は瓦質土器で、火舎と呼ばれているものである。11は1号土坑より出土し、12は溝中より出土した。

(2) 堀切と土塁（第27図）

第Ⅰ、第Ⅱ調査区の調査が進んだ段階で、時間的余裕を見出し、土塁と堀切の部分の調査に取りかかった。土塁と堀切のある部位は、あたかも中世城下城の南の進入路にあたり、張り出した丘陵の頚のくびれ部に相当する。このくびれ部を堀切、土塁を築くことにより、おのづと城塁の守りを堅固にしている。

堀　切　堀切は二重堀となっていて、外側の堀は現在の農道の通っている部分にあたる。現状では幅約10mで、外側は高く内側は低い。外側の堀の一部と内側の堀の間は杉が植栽され、外見では堀の状態が見えにくい状態である。外側の堀はその端の一部が道路敷になるが、表面観察に止めた。

内側の堀は道路計画線のNo.76～77のあたりで、これも道路は溝の東端をかすめる形で計画された。大部分は計画線を外れているため、測量による地貌観察に止めた。幸いこの内側の堀は杉の幼木であるため、どうにか地形の把握が出来た。堀切の奥（西）の部分は現在農作業用の通路となっている。この農道と平行して水路が通り、域内の水田を養っている。

この堀切の部分について地元から聞込みがあった。それによると、この通路の部分には跳ね橋があり、それを通じて行き来していたという（堀切の部分の地主北里氏談）。また北里守翁により次の事実が判明した。通路の部分は、田に水を引くため周辺の石を割って水路をとおしたという。その際「扉石（とびらいし）」というのがあり、石工に割らしてしまうのは惜しいのでそっと残しておいたとのことであった。確かに扉石とおぼしきものは水路の横の土手に横たわっていた。この1.5×1m位の平板な凝灰岩は、たしかに古代城跡の門礎を思わせるものである。また堀切部にあたる農道は堀を埋戻したことを証するかのように、一部がブカブカで、横木を渡してかろうじて幅員を保っている。内側の堀の幅は15～16m、深さは1.5m前後である。外観は箱堀り状の断面を示しているが、この部分は畑として利用されたこともあり、一部の土塁などを壊し均平されたことも考えられる。中世城郭の一つである御船町城塚では、溝を発掘した結果、断面が薬研堀になっていた。この地点は何しろ調査域外であり発掘により確めることは出来なかった。

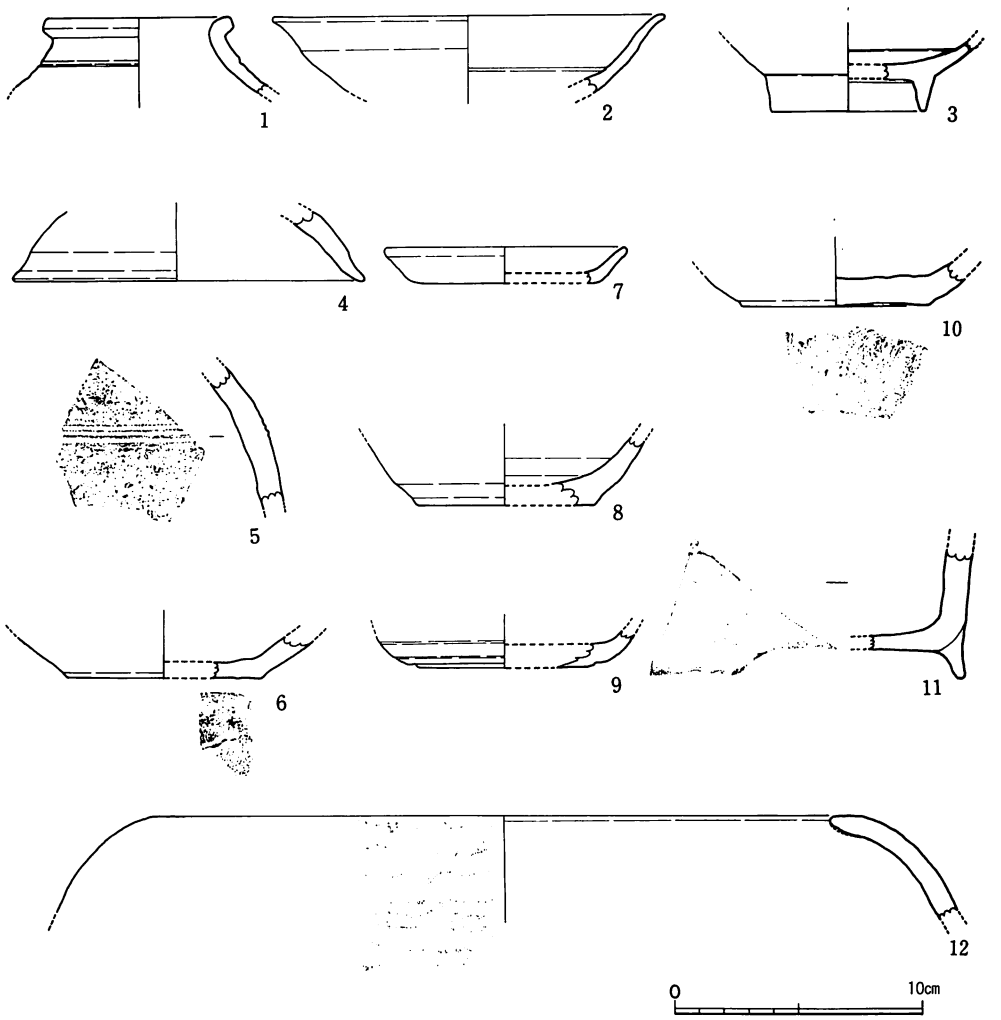
内側の溝はNo.76の両側幅杭あたりで東に急落し、わずかな平坦面をつくり、さらに落ち下方の樅木川へ落ちる。

土　塁　堀切の内側に城内を囲うかたちで二条の土塁がある。内側の土塁は長さ約28m、底

辺幅６～８ｍ、上端幅約５ｍの平坦面をつくる。外側が急傾をなし内側はゆるく傾斜する。土墨断面は台形をなし、高さは約３ｍである。また東の裾部には一抱え大の石があり、根固めの役を果している。外側の土墨は堀切と堀切の間にあり幅約５ｍ、長さ約２ｍである。

以上のように内側の土墨は東西約28m延びるが、西側はカットされたことも考えられる。それというのも、城域に通路をとおすため農道をとおしている。この際堀の埋戻しがなされたとみられるので、土墨の一部を壊されたことが考えられる。

土墨の土層の盛付けの状態等を知るため内側の土墨の一部をカットした。カット面には、ほぼ中位に一線を画して横へのくろずんだ線が走る。これは土墨築成時の表土の汚染によるものと考えられ、上面が旧地表とみられる。約２ｍの盛土がなされ、内より外に盛付けられている。



第29図　歴史時代の遺物

表７　歴史時代遺物種類別出土数

種別＼調査区		第Ⅰ調査区 表採	第Ⅰ調査区 Ⅰ・Ⅱ層	第Ⅱ調査区 表採	第Ⅱ調査区 Ⅰ・Ⅱ層	小計	総計
土師器	口縁部	1	4		4	9	41
	胴部		7		13	20	
	底部（糸切）	1	6		4	11	
	土鈴				1	1	
瓦質土器	口縁部	3	2			5	38
	胴部	9	23			32	
	底部		1（すり鉢）			1	
須恵器	口縁部	1				1	7
	胴部	2	3		1	6	
青磁	口縁部						1
	胴部						
	高台	1				1	
白磁	口縁部	3				3	3
陶磁器	口縁部	3	1	1	1	6	13
	胴部		7			7	
総計		24	54	1	24	103	103

この漸傾の状態、旧地表の延長線からも明らかに堀切が人工的に掘られたことが知れる。

土塁の盛土の状態はレンズ状の断面から読み取れる。黄褐色粘質土、黒褐色火山灰土、あるいは暗褐色土と多少の色合いをかえて交互に盛付けられている。盛付けは、外側から内側へむかって築成されたと見ることが出来る。おそらく、外の溝を掘る際、そこから搬出した土を土塁として盛付け、城の防護を堅固にしたものとみられる。

旧地表下の土層の状態は、この地域の一般的層序で、Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ層まで観察される。ついでながら土層の状態を述べれば、Ⅱ層は橙黄色の火山灰土で、他の地点に比べ土色が鮮明である。この層は層厚約23cmである。ついでⅢ層は黒色土で、他の地点（第Ⅰ・Ⅱ調査区）では縄文土器の包含層である。これは約35cmの層厚を示す。Ⅳ層はここで２層に分層出来、Ⅳ層は黄褐色ローム層で比較的軟質である。層厚約44cmである。Ⅴ層は灰黄褐色ローム層で、土質が硬い粘質土である。層厚約20cmである。Ⅴ層の下にⅥ層があり黄褐色ローム層で、Ⅳ層の様にかたく締っている。

（緒方）

(3) 下城と周辺の城跡

下城は阿蘇家臣、下城氏の本拠地と伝えられており、下城地区の本村、北側寄りの丘陵地末端部に城跡がある。丘城的なもので丘陵地続きの南西側と切通川（縦木川）を挟んだ東側に民家が建ち並んでいる。比高差において城跡と集落はたいした差異がない。平面的に眺めた場合、館的な要素さえうかがえる城跡である。

本村を中心とした一帯は小国町の谷間（たにあい）に開けた集落である。地形的にも一つの独立した社会を構成している。この様な自然条件の元で下城氏は中世期に下城を核として一つの支配体制を確立していたのである。現在でも、その名残りを止めるかのように、下城跡の周辺には三つの砦（とりで）的な山城跡が残存している。

ここでは、下城氏の支配体制の考古学資料とも言うべき下城跡とその周辺の三城跡について城の構造並びにその位置関係を踏査結果から明らかにしてみたい。

●下　城（小国町下城・下城）

城史は『北里文書』にかなり詳しく記載されている。裏の城・内の城・落合城などの別称がある（『小国郷史』）。

本村の北側寄りの丘陵地末端部が城跡であり、「下城」という字名が残っている。丘陵の背面は南北方向に主軸を持ち、帯状形をなしている。

北端部において、北北西方向にカーブを描き、北東側には段落ちの平坦地がある。背面の中央部分に最高所があり、現在、この地は小山状になっている。上面は幾分平らで大杉が数本、根をおろしている。周辺は荒地である。大杉の根元に井戸が埋没していると伝えられるが、現認出来ない。

小山の周辺は東側を除き、開墾されて水田となっている。水田は若干の段差によって数枚に

区分される。開墾時にかなりの地形変更があったものと思われる。したがって現地形から城跡の構造を論じる事は適切でないが、あえて地形的なものから推察すれば背面中央部の最高所を核に南北両側に各々1区画ずつの平坦地を有する、いわば輪郭式の造りではなかったかと思われる。北側区画においては、若干の段差によってさらに細分化されていた可能性がある。

帯状形をなす丘陵末端部もしくは山稜末端部が、その背面中央において最高所を有し、両端に平坦地を有する、いわば下城型の縄張りを有する城跡は次の通りである。

- 小森田城跡（玉名郡玉東町木葉・陣内）
- 戸崎城跡（菊池市今・南山ノ上）
- 九万石城跡（菊池郡大津町矢護川・中在目）
- 真木城跡（菊池郡大津町真木・東津留）
- 戸上城跡（上益城郡御船町田代・戸上）
- 木山城跡（上益城郡益城町寺迫・城の本）

南側のいわゆる丘陵のくびれ部分には二重堀の堀切がある。城内寄りの堀切が本格的造りで、城内側に高さ2m以上の土塁を積み上げている。この堀切の南側には、外側の堀切に付随する所の土塁が走行しているが、現認出来る高さは1mに満たない。堀幅も前出の堀切の半分以下である。

堀切には「扉石」と称される平石がある。1.5×1mで片面にはあたかも心礎のような円形状の窪地が認められる。城門の類が存在した可能性は大きい。

城跡の東西縁は急峻な崖で直下を杖立川（西側）と樅木川（東側）が流れている。両川は城跡の北方下で合流する。

城跡の南東側丘陵地続き部分に「馬場」という字名がある。樅木川に架けられた本村橋よりの道が、「馬場」を斜めに横切る。現在、この道沿いに民家が建ち並んでいる。大部分が水田となっているが、城跡寄りの一枚に「高屋敷」と呼称する所があり、同地内には古井戸も現認出来る。周辺を「花庭」と呼ぶ事などを考え合わせると、城主もしくはその一族の平時における居住の跡ではなかろうかと思われる。「馬場」の地は南側背後が山であり、東西両側は前出の川に挟まれる格好となる。面積的にかなりの広さを持つ一種の独立区画で、この区域内に城主及びその一族、配下の家臣が居を構えていた可能性は大である。同地に下城若宮神社が祀られているのも何か意味をなすものであろう。

城跡東側には樅木川の流れに沿って現在国道212号が山裾を走行している。この国道沿いにも民家が並んでいる。城跡に関連する2次的な集落の存在が比定出来る。道路沿いには逆修碑（明應五年の銘）や読誦経逆修碑（元亀三年の銘）をはじめ、城主・下城経隆とその母妙栄の墓と伝えられる室町期の五輪塔がある。

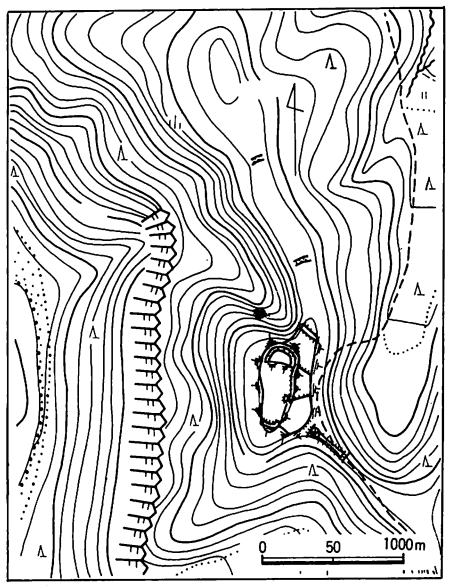
- 鳶ノ尾城（小国町下城・鳶ノ尾）

『古城考』には「小国下村ニアリ、城主姓名不分明」と記述されているにすぎない。『小国郷史』によれば「下城氏が小国に来て、最初に本拠とした城」であるという。

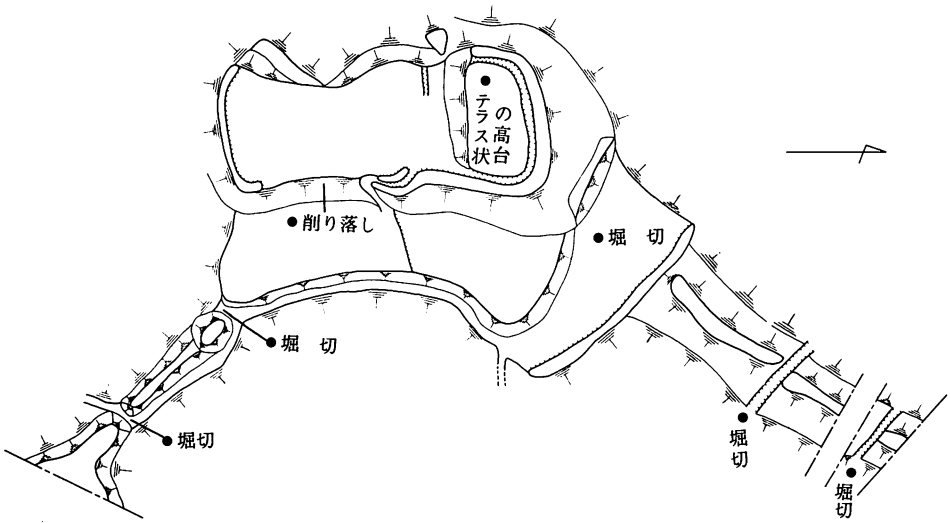
城跡は下城跡より南南西の方向にある。地図上の直線距離は0.6kmを測る。本村「馬場」の南側背後の山の中にある。若宮神社付近から徒歩で約15分を要する。登城道は細長い尾根づたいに走行する。先端部の小山が城跡で「鳶ノ尾」という字名がある。

登城道の登り口の所に(伝)市井野大善の墓が建っている。安山岩質の板碑で高さ85cm・幅20cmを測る。後世の供養塔と考えられる。

城跡の所在地は楕円形状の小山である。上面は南北に主軸を持っており、およそ60m×25mの規模である。北側部分にテラス状の高台がある。南側壁面は高さ約2.5～3m、若干の「削り落し」の工程が認められる。外観から高台は盛土によるものではない。削り残しによって形造られたものである。上面は平坦であるが南側を除く三方には溝が縁を巡っている。外側の落ちぎわには溝に付随する土盛りが残存する。昭和の初期にこの区画から「刀のツバ」が出土したと伝えられる。



第30図　鳶ノ尾城周辺地形図

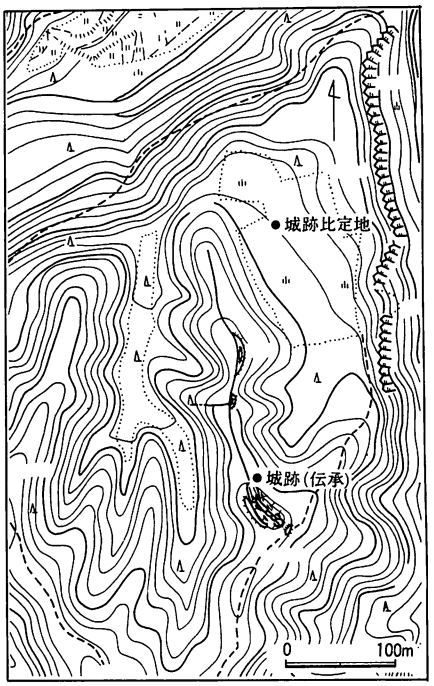


第31図　鳶ノ尾城見取図　(大田測図)

高台の南側段落ち部分は帯状形の平坦地となり、その南縁にはかなり崩壊しているものの高さ0.3mの土塁が現認できる。山の斜面は東側の鞍部を除く三方がいずれも急峻である。西側直下には杖立川が流れており水の流れる音がゴウゴウと伝わってくる。

必然的に城跡の遺構は東側の尾根続きに集中する。城跡平坦地の東側斜面は高さ5～6mで、壁面は顕著な「削り落し」の工程が認められる。裾部は帯状形の曲輪になっているが、一様に平坦ではなくほぼ真中に数十センチの段差がある。段差をなす所に城跡平坦地への登り道がある。U字形をなす凹道で、登り切った所に土塁がある。凹道は高台へ向って延びていく。最後は高台の三方を巡る溝と繋がる。

城跡所在地の山は北東隅と南東隅の二カ所に尾根筋がある。したがって北東隅については、城跡平坦地の直下に土塁を伴う大きな堀切が築かれている。北東側尾根筋にも二カ所に堀切が存在する。南東隅の尾根筋には二重堀が刻まれている。

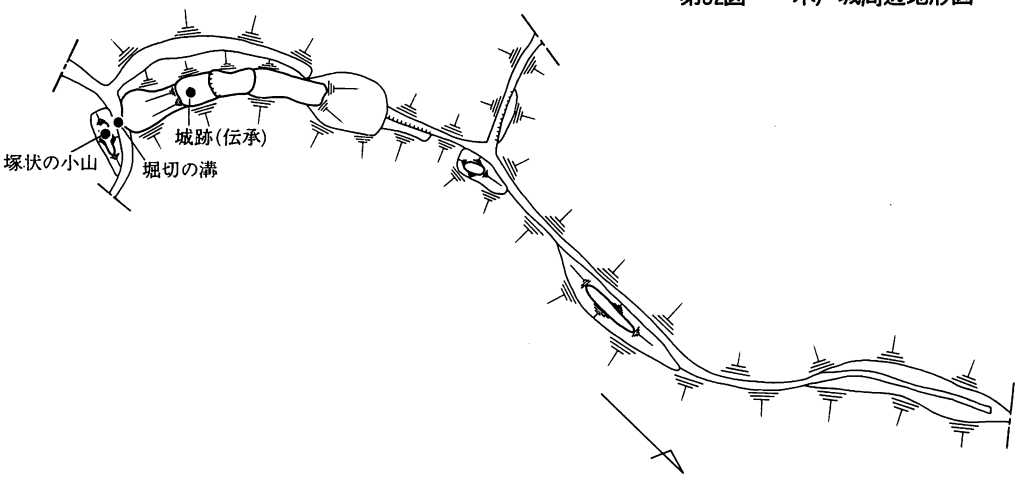


第32図　木戸城周辺地形図

・木戸城（阿蘇郡小国町宮原・城戸）

『古城考』は城主を下城氏としている。『小国郷史』には「永禄の頃石井阿波守居城、又下城備中守居城等の記がある」と記述されている。

杖立川と中原川の分岐点一帯を「馬洗瀬」と呼んでいる。城跡の所在地はこの「馬洗瀬」の南側背後の山に比定されている。「城戸」という字名がある。

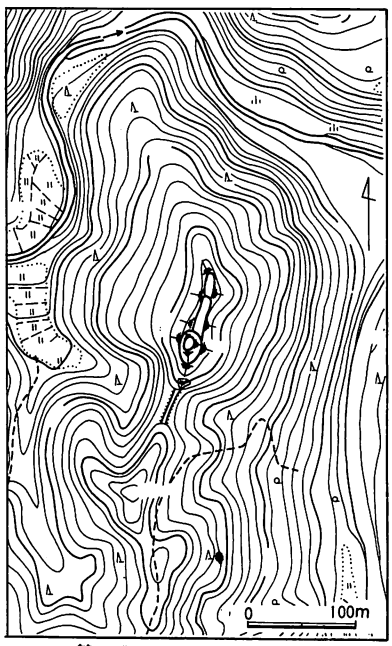


第33図　木戸城見取図（大田 測図）

遠く1.5km以上離れた戸角あたりから延びてきた山並みの北端部にあたる。「城戸」内における最高所は標高465.2mを示す地点で、石井集落と市井野集落を結ぶ山道の直上に小山状になってある。地元では、この周辺を城跡地と見なす傾向にある。小山は「く」の字型をしており、上面には三区画からなる平担面があるが、完全に削平されたものではない。ただ南端裾部に堀切状の溝で仕切られた塚状のもの（高さ 2.5m）がある。上面にコナラの大木があり、その根元に石仏が祀られている。尾根道はこの小山から北方へ延びていく。尾根筋には城跡に関連あると思われるような遺構は何もない。平坦地も存在しない。

最高所における小山及び尾根筋を見る限りにおいて「城戸」の山は城跡という観ではない。

そこで、「馬洗瀬」直上部分を取り上げる必要が出てくる。尾根筋の北東側段落ち（比高差約45m）にあたる平坦地である。かなりの広さを持ち、現在は牧草地に利用されている。ここからは北東方向に鳶ノ尾城を望む事が出来る。杖立川を挟むが、地図上での直接距離は約0.6kmである。直下の「馬洗渕」からは徒歩で5～6分の近距離にある。



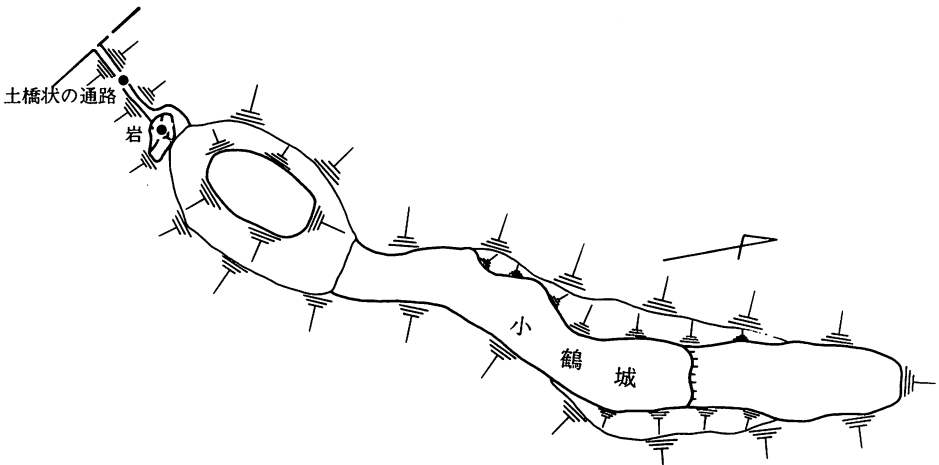
第34図　小鶴城周辺地形図

城跡の所在地と比定したい。

●小鶴城（小国町・宮原町黒渕・向カ山）

『古城考』に「北ノ里土田村ニアリ、阿蘇家臣在番、延文年中落城ト云」と記述されている。『小国郷史』には「北里内記の居城又戸波主馬の居城といい、一説には延文年間菊池氏の為落城したともいう。」と記されている。

城村集落の北方約700mの山中に城跡がある。「城霍」・「下霍」などの字名を残す山並の北端部が城跡



第35図　小鶴城見取図　（大田測図）

所在地である。帯状形をなす山の背面は北北東に主軸を持ち、南西側に鞍部がある。鞍部寄りに山の最高所があり、ここは小山状になっている。上面には楕円形状の平坦地（18m×11m）がある。これより北北東へ背面を削平された尾根が延びていく。全長94m、幅は12mを測る。先端部より鞍部側へ33mの所に若干の段差（0.3～0.5m）がある。

鞍部は数mの段下りとなり、尾根筋は幅2mにくびれて土橋状の通路となる。長さは25.5mである。山の斜面はいずれも急峻で、北方直下に蓬来川と滴水川の合流点がある。

東北東方向に木戸城跡の比定地を望む事が出来る。地図上の直線距離は約0.6kmである。

集落には道路端の大杉の根元に板碑（永禄2年）や、周辺の田畑から集められた宝篋印塔や五輪塔の残欠部がある。

まとめ

下城跡と周辺の三城跡の関連性を考えてみたい。前述のように城跡間の地図上での直線距離はいずれもほぼ0.6kmの等間隔である。地図の上からは下城跡一鳶ノ尾城跡一木戸城跡一小鶴城跡は一本の線上に並ぶ。この城跡列こそが下城氏の支配網の具象化であろうか。決して0.6kmの等間隔は偶然とは思えない。

周辺の三城跡の中では鳶ノ尾城跡が注目される。その地理的位置からして、下城跡の「詰めの城」であったろうと推察される。両城を結ぶ尾根筋は「十三塚」を経て下城跡より南南東へ約1.5km離れた土田の集落まで延びていく。かかる意味において下城跡と鳶ノ尾城跡との関連性は確実視される。

木戸城跡の中心地は不確である。しかし「城戸」の字名からして馬洗瀬、南側背後の山が城跡地である事に変りはない。「城戸」の山から、鳶ノ尾城跡と小鶴城跡が眺望出来ることから、木戸城跡は、両城間における「伝えの城」の役目を荷なった砦ではなかったろうか。

小鶴城跡は南側背後の城村集落の「詰めの城」である。ある意味で城跡を含めた城村は一つの独立した小社会であり、下城とは無関係のようにも思える。しかし両集落とも中世的色彩を濃く残す集落であり、互いに近距離（地図上で2.5km）にある所から、無関係に存在したものではなかろう。総じて城村を下城の外郭的集落の一つと見なす事が最も妥当であろう。ここに下城及びその周辺の城跡の配列から下城氏の支配圏の一部が浮びあがってくる。　　（大田）

四　ま　と　め

下城遺跡の調査は、この地区における初めての本格的発掘調査で、調査の進展につれ次々と新たな知見が生まれた。当初は土に馴染めず、どの土層のところからどの様な遺物が出するのか見当がつかなかった。しかし暫くすると馴れてきてその不安も解消した。

下城に字名と同名の中世城が存在する。そのことは以前から知られていた。しかし、縄文、まして無土器の遺跡が発見されたのは調査が或程度進んでからのことで、この調査の大きな収穫である。以下調査成果の要点を述べてまとめとしたい。

先土器時代の遺物の発見には多分に僥倖が伴った。ローム層を掘ったからといって、そこから先土器時代石器が出土すると限らない。たまたま下城遺跡では、攪乱土の中から数点の石器が発見された。一つの徴候である。そのようなことから第Ⅳ層のローム層を掘ってみるとこになった。粘質土の中から、１点・２点と発見され、確実に無土器の遺跡の存在が裏付けられた。

下城遺跡より出土した先土器時代石器は、「ナイフ型石器」のセットとして知られるもので、ここでの石器の製作を物語るごとく、多量のチップとコアが発見された。このようにして下城遺跡の先土器時代の石器の組合せは、それらの製作過程、技法の検討により他遺跡との比較が可能になる。

第Ⅳ層のローム層から黒曜石などのチップと共に木炭粒が確認された。そのことはここでの生活を裏付けるもので、遺構の存在を窺せるものである。そこで精査の結果、あるまとまりのあるピットの配列があらわれた。ほぼ円形をかたどり、住居跡であろうと考えられるものである。今後周辺には調査余地が残っている。遺物の存在状況を知ることも必要であるが、今後の問題として、確実な遺構を一つでも多く調べることがより重要な課題である。

次に縄文時代の遺構遺物の調査について述べる。第Ⅲ層の黒色土層がその包含層で、縄文時代の古期に位置づけられる遺物が出土した。礫群、そして集石遺構が発見された。この地域は標高400m の高地の遺跡であるが、様相として平坦地、熊本市周辺の遺跡と変りないことが認められた。出土遺物として土器と石器があるが、石器の数が少なかったことは印象的である。しかし、黒曜石のチップはかなりの量が出土した。土器には押型文土器をはじめ、撚糸文土器、少量ながら斜行縄文、条痕文土器も出土した。

中世遺構として下城城跡（裏ノ城又は内ノ城）がある。発掘調査であるため、どうしても工事予定地の発掘が中心になる。中世遺構が現地表に近いため攪乱を受け易いことを、一部の発掘ではどうしても遺構の連関意味づけが難しいことになる。土坑、溝様遺構がそれで、その性格を窮めるに至っていない。土塁切断により盛土の状態が知れた。堀切りは道路予定地外のため測量により地貌を観察するに止めるほかなかった。

中世城下城発掘調査を補完する意味で、周辺の石造文化財、塔碑類の調査をした。また踏査、聞込みにより居館址（高屋敷）の推定をも行なった。

発掘調査を地質学のうえから層位的裏付を得るため、専門家により地質の調査を実施したことは、専門家の知見だけに有効である。今後の小国地区調査にも利用出来るものである。

下城氏の終焉について、文献的に裏づけられた。考えてみれば加藤氏により肥後支配のための予定の行動であろうことが知れた。それはあたかも中世より近世への移り変るための胎動であり、悲劇とも思えてならない。

今次調査の終了直前、下城遺跡における先土器時代の遺物の分布範囲を知るため、数地点を撰んで第Ⅳ層の一部を発掘した。

東の端は第Ⅰ調査区のE－5区、第Ⅱ調査区では南壁断面の中ほどのところに黒曜石のチップ又は石器が発見されていて、地形のうえから傾斜転換点のあたりまで無土器時代の遺物を包含することが判明した。そこで北の端をおさえるため、第Ⅰ調査区A－1（道路計画のNo.70＋4mの西端あたり）に1地点、第Ⅱ調査区では中央部西端（No.72＋8mあたり）と、南端をおさえるためにNo.73＋15mのあたり（51年秋試掘溝、この時第Ⅲ層まで発掘）にそれぞれ1個所、都合3地点を試掘した。試掘の結果、そのいづれからも先土器時代遺物が発見された。

以上のようなことから、下城遺跡の先土器時代遺物の包含範囲は、道路予定敷内ではNo.70～74の間（第Ⅱ調査区の西側の一部は開田の際盛土）の平坦部分全域におよび、面積にして約600㎡を下らないものと思われる。今次の調査で約100㎡を発掘したので、約500㎡に先土器時代の遺物の包含層が残っていることが考えられる。

道路は下城城跡の丘陵の東側を、南北にかすめるかたちで計画されている。3地点の試掘でも明らかなように、西側はさらに丘陵上に先土器時代の包含層がひろがり、城跡の主郭および3郭としたところに延びることは確実で、あるいは2郭のあたりにも遺跡がひろがることが予想される。

国道改良工事に伴って、城跡調査を契機にして、新に先土器時代の遺跡が発見されたことの意味は大きい。（緒方）

追　　補

下城遺跡のC－14による年代測定結果について

本報告書の校正の段階で下城遺跡出土試料の^{14}Cによる年代測定結果が、社団法人日本アイソトープ協会よりもたらされた。そこで、末尾に資料として追補するものである。それによると

N－3417　　下城－1　　8260±130 Y・B・P

N－3447　　下城－2　　8570±115 Y・B・P

が^{14}C測定結果で、これは^{14}Cの半減期を5730年にもとづいて計算されたものである。

この二件の試料は下城遺跡第Ⅲ層、即ち縄文土器の包含する礫群の間から採集した木炭片を供試試料としたもので、およそ下城遺跡の集石遺構および押型文土器、撚糸文土器等の年代を知る手掛りを与えるものである。

熊本県内で火山灰の下城遺跡第Ⅲ層の対比層から^{14}C測定結果の判明している遺跡に、上益城郡益城町の櫛島遺跡がある。この遺跡の第Ⅳ層から炉穴3基が発見され、1・2号炉穴採集の木炭によるデーターが示されている。それは以下の3件で、それぞれ

N－1730　　櫛島－1　　9410±125 Y・B・P

N－1820　　櫛島－2　　9320±185 Y・B・P

N－3417　　櫛島－3　　9100±115 Y・B・P

である。この遺跡から主として円筒形条痕文土器と、塞ノ神式土器を出土した。広域、広面積の調査にかかわらず他の種類の土器として、斜行縄文土器と押型文土器の数点が発見されたのみである。

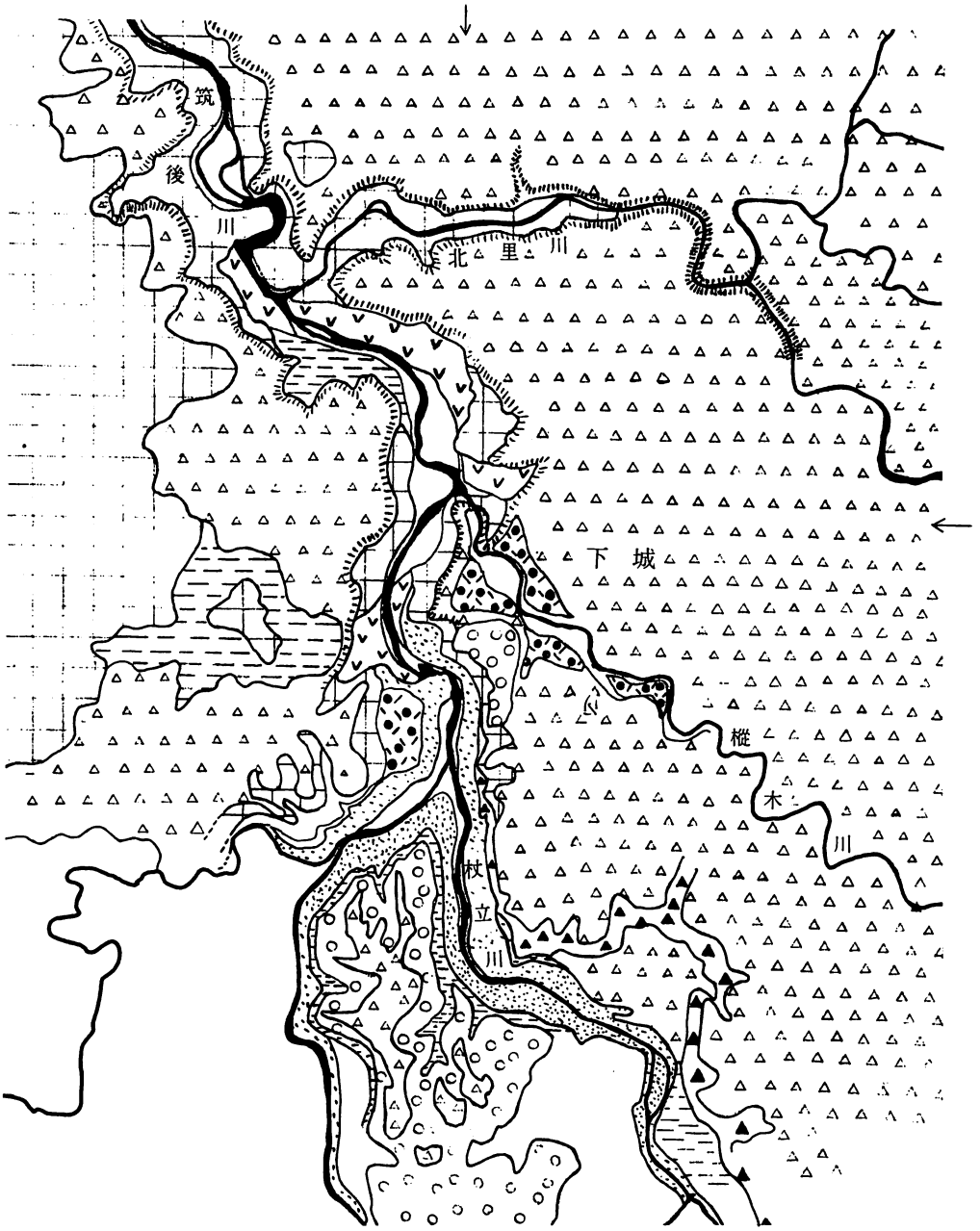
下城遺跡の第Ⅲ層は押型文・撚糸文土器を主として出土する遺跡である。櫛島遺跡の炉穴の検出された第Ⅳ層は円筒形条痕文と塞ノ神式土器を主として出土する遺跡である。^{14}Cの年代に影響する諸要因はいろいろ取沙汰されているが、提示されたデーターを単純比較すれば、櫛島遺跡の円筒形条痕文・塞ノ神式土器の方が下城遺跡の押型文土器より年代的に古いことになる。以上の結果、考古学上の様式編年と異なり、別箇の学問体系により出されたオーダーだけに我々はその結果を、頂門の一針として耳を傾ける必要があろう。　　(緒方)

付　篇

付一　下城遺跡の火山灰と地質環境　　籾倉克幹

付二　下城周辺の関連遺跡（資料）　　緒方　勉

付三　加藤清正と下城氏　　松本雅明



a；沖積層 未固結粘土礫礫

b；段丘砂礫層 未固結～半固結砂礫

A_4；ASO4 の非溶結相

A_{4W}；ASO4 の溶結相

A_3；ASO3 の非溶結相

A_2；ASO2

A_{2-1}；ローム(ASO1,2間の火山灰層)

A_{1W}；ASO1 の溶結相

Hn；万年山流紋岩(黒雲母,角閃石流紋岩)

T_+；杖立層(ローム,軽石層,シルト層)

An；豊肥安山岩類(普通輝石,紫蘇輝石安山岩)

矢印の交点が下城遺跡

(注) この地質図には，表層火山灰，表土は表現していない。

第36図　小国町下城遺跡付近地質図

付1　下城遺跡の火山灰と地質環境

九州農政局　地質官　籾　倉　克　幹

1　は　じ　め　に

下城遺跡は、熊本県阿蘇郡小国町下城にあり、筑後川上流杖立川が小国盆地を過ぎ、貫入蛇行して峡谷を形成しはじめるところにある。

小国盆地の北方には、本流に懸る滝がいくつかあり、滝周辺は天然の要害となっている。本遺跡もその一つで、落差30mで下城滝に近接している。

国道212号線の改良工事に伴なって、遺跡の緊急調査が実施され、筆者は昭和53和11月と昭和54年2月に3回、延べ4日間、調査現場に赴く機会をもった。

遺跡発掘現場の観察と、周辺踏査の結果、クロボク、アカホヤ、明褐色ロームクラック帯、姶良Ｔｈ火山灰などの特徴ある火山灰層と、中世遺構、縄文期の押形文土器、無土器時代石器などの含有層との関係を明らかにした。また、遺跡の立地環境について考えめぐらすことができた。

火山灰の同定は、土色・粒度・硬さ・構造・含有鉱物・浮石および包有岩片の肉眼観察によった。岩石顕微鏡による観察や浮石の屈折率の測定などによる検討は、今後に譲る。

本稿を草するにあたって、現場観察の機会を与えられた熊本県文化課緒方勉参事、日頃御討議をいただいている熊本県立第二高校高野啓一教諭、琉球大学海洋学部古川博恭助教授、熊本大学教育学部渡辺一徳講師および踏査に同行された日本ボーリング㈱恒富赴彦部長の各氏にお礼申し上げる。

2　下城遺跡および周辺の地形・地質概要

下城遺跡は、阿蘇外輪の北麓の雨水を集めて北流する杖立川と、これに右岸側から合流する樅木川とにはさまれた細長い台地の上にある（北緯33度9分50秒、東経131度3分18秒）。

台地は、標高400mで、東側は樅木川に、西側は杖立川にそれぞれ落差50mの急崖を介して接している。また、樅木川にかかる下城滝は、遺跡の東縁から見下す位置にある。これらの急崖は、すべて柱状節理の発達した溶結凝灰岩からなっていて、人畜を寄せつけない懸崖を形成している。

下城遺跡は、南方背後以外はすべて懸崖となっており、まさに「砦」としての条件に恵まれた地形条件を備えている。

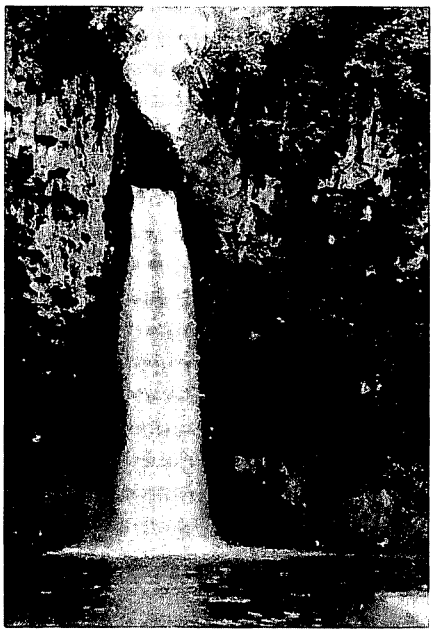
下城遺跡およびその周辺の構成地質とその構造は、第36図および第37図に示すとおりである。

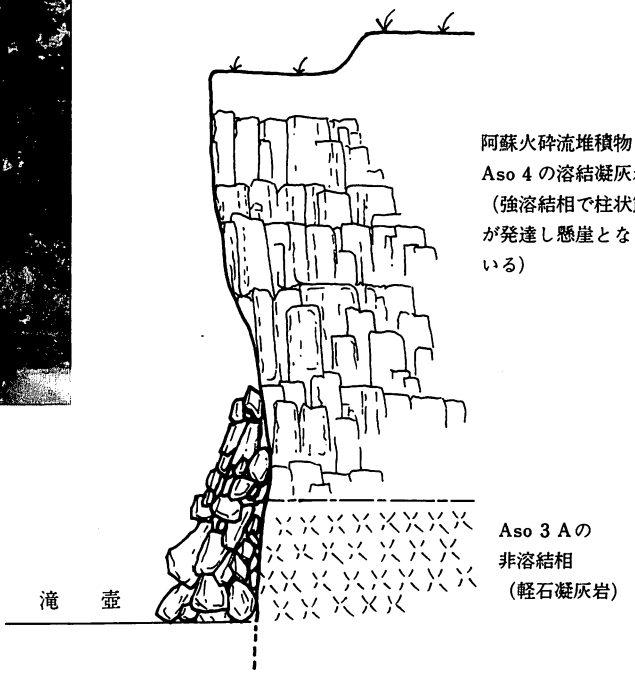
当遺跡の台地および懸崖を構成する溶結凝灰岩は、角閃石と紫蘇輝石を包む軽石流堆積物の溶結相で、阿蘇カルデラ形成に関与した末期の放出物である。下城滝の主部およびこれより上流の樅木川河床廊下、下流両岸の急崖、さらに下流の簗瀬東方の二俣滝なども同じ溶結凝灰岩からなる。これらは阿蘇カルデラ東麓や北麓に広く分布する非溶結軽石流堆積物Aso4に連続しており、その谷埋め溶結相Aso 4 wである。

Aso 4の下位には、Aso 4 / 3間堆積層、Aso 3、Aso 2、Aso 2 / 1間堆積層およびAso 1の一連の阿蘇火砕流堆積物と、火砕流間堆積層が重なっている。

これらの堆積物の基盤岩類として、万年山(はねやま)流紋岩類、杖立層および豊肥安山岩類が周辺の山地や、杖立川筋を形成して分布している。

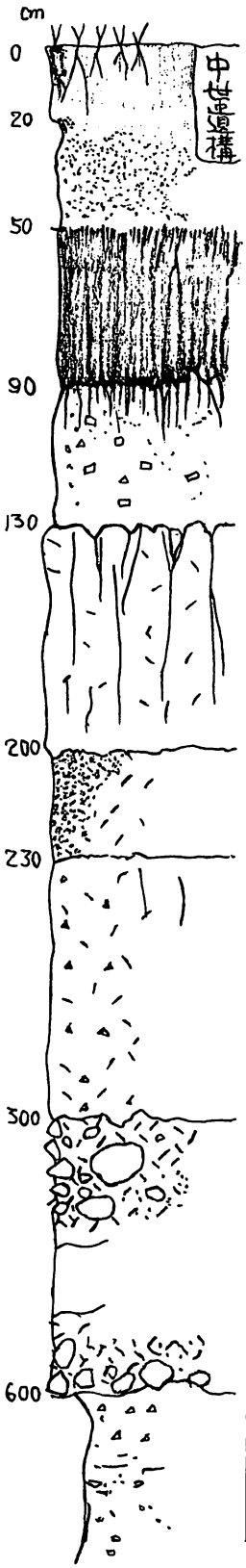
また、Aso 4の上位には、Aso 4堆積原面を数メートル削りこんで、九重新期軽石流堆積物と密接な関連をもつ段丘砂礫層が分布し、これらを、過去約3万年間の降下火山灰が覆って





第37図　下城遺跡東崖に懸かる下城滝

表８　下城遺跡の火山灰層序と特性一覧



層　厚	区　分	通　　称	土　色	色	土　構　造（軽・重ルーズ）	土
cm 20	Ⅰ層	耕作土(クロボク)	7.5YR4/2	灰褐色	(軽) 屑粒状	
25～30	Ⅱ	アカホヤ	5 YR6/6 5 YR3/2	橙　色 暗赤褐色	(軽) 単粒状	
40～50	Ⅲ	クロニガ	5 YR 1.5/1	黒　色	(軽) 屑粒状	
40～50	Ⅳ-1 Ⅳ-2	クロキドロローム キドローム	5 YR4/3 7.5YR4/4～6	にぶい赤褐色 褐　色	団塊状（小クラツク） (重) カベ状	
70	Ⅴ	ネバキローム (クラツク帯)	7.5YR4/6	褐　色	(重) 柱　状 クラツク帯	
20～30	Ⅵ	アカサク (大隅降下軽石)？	7.5YR5/6	明褐色	(軽) 単粒状	
70	Ⅶ	砂ローム	7.5YR5/4 5 YR5/6	にぶい褐色 ～ 明褐色	(重) カベ状 (クラツク)	
300	Ⅷ	下城泥流	2.5Y7/3 雑	浅黄色	板　状 砂礫層	
500＋	Ⅸ	八女粘土 (Aso 4)	7.5YR7/2	明褐灰色	カベ状 粘土化火砕流	

性	肉眼鑑定による火山ガラス・構成鉱物の大きさと量									備　考
	火山ガラス	石英	長石	Mafic	黒雲母	角閃石	斜方輝石	単斜輝石	不透明鉱物	
細粒砂	○小	—	○	少			△	△	△	プラント オパール
粒火山灰	◎			多			○		○	ツブツブ
ルト	○小	—		少			△	△	△	パサパサ パラントポール 木炭
ーム ナあり あり ーム	◎大 ◎ 3		○ ◎	少 少		△ ○	○	○	○	粘土化 粒度不摘 木炭あり
ローム	◎		○	中		?	?	○		黒曜石あり 石レキ多
粒火山灰 あり	◎	○	◎	多	—	○	◎		○	ツブパサ
粒火山灰	◎			中		?	◎	◎		
山礫	○	○	◎	多	△	◎ 3～4	○		○	φ5－30℃ の円レキ 円レキを含む
山礫～ 粒火山灰	◎	—	○	多	—	◎ 2	○	○	○	φ5～10℃ の角礫 含む

いる。これは、地質図では省略したが、遺構や土器、石器の含有層でもあるので、後に詳しく述べる。

この地域の河川の下方侵食は、いまでも著しく、Aso4堆積原面や段丘面を40～50m削り込んで急崖や滝を作りながら流れている。そのため、段丘などの原面保存が概して悪く、降下火山層が連続して観察できるところは少ない。また、河床堆積層など沖積層もその発達は、極めて乏しく、崖下崩落物のほかは、見るものがない。したがって、当遺跡は、狭小ではあるが原面保存が良く、一連の火山灰層が連結して観察できる点で意義が大きい。

上述した地質構成の特徴、分布、模式地、年代、組立根拠などについては、煩雑を避けるため本文での説明を省略した。表８、第36～39図を参照していただきたい。

3　下城遺跡の火山灰層序

下城遺跡発掘現場の掘削断面における火山灰のスケッチとその特性は、表８に示すとおりである。総合柱状11mの断面のうち、上位３ｍが降下火山灰、下位８ｍが泥流もしくは火砕流堆積物からなる。降下火山灰は、上位から表土（Ⅰ）、沖積火山灰（Ⅱ．Ⅲ）、新期ローム（Ⅳ－１．２．Ⅴ．Ⅵ）、旧期ローム（Ⅶ）の７層、８細分できる。

中世遺跡は、Ⅰ、Ⅱ層を削り込んで作っており、押型文土器はⅢ層上部、旧石器はⅤ層の直上にある。

以下、層ごとに説明を加える。

(1)　表　　土（Ⅰ層）

地表20cm程度の表層を構成する草木根の根群域をなす土層で、耕作土でもある。灰褐色の軽い屑粒状細砂である。下層のアカホヤも混入し、現世火山からの風積灰が土壌化しつつある土である。

発掘現場の南端にある中世の砦の土塁は、この土と下層アカホヤとを掘りこんで作られている。

表土は概して乱れが大きく、詳しい観察に耐えない。

(2)　沖積世火山灰（Ⅱ・Ⅲ層）

表土の下層の25～30cmの厚さの橙色～暗赤褐色細粒火山灰と、その下位の黒色屑粒シルトとを沖積世火山灰と呼ぶ。前者はアカホヤ、後者はクロニガとして、南九州の農民によって古くから言いならされて来ている。

アカホヤは有色鉱物を多量に含んだ火山ガラス、軽石からなり、長さ２mm程度の斜方輝石や磁鉄鉱を伴なっていて、鬼界カルデラ形成に密接に関連した火山活動で放出したアカホヤ火山灰層に対比できる。（第38図参照）

アカホヤの下位のクロニガは、火山活動の激しくない植物繁茂期の黒色土で、プラントオパ

ールや、火山ガラスをともなった土壌である。40～50cmの厚さがあるがその上部に、押型文土器と縄文期の生活遺構がある。

九州各地におけるアカホヤ火山灰と縄文土器との層位関係と放射性年代を町田・新井(1978)から第39図にまとめた。

（3） 新期ローム（Ⅳ－1・2・Ⅴ・Ⅵ）

明褐色～褐色ロームで、新期阿蘇ロームとして知られて来ている粘土化した火山灰である。詳細に観察すると4層に細分できる。上部20cmは、上層のクロニガからの黒色しみ出しによる汚染をうけた部分で、クロキドロロームと呼ぶことにする。その下位30～40cmは火山ガラスと斜長石が多く、角閃石と斜方輝石を含む粘土化があまり大きくない火山灰で、キドロロームと呼ぶ。主として阿蘇中央火口丘の活動によってもたらされた火山灰であろう。この火山灰の表層が粘土化と、上層からの黒色汚染によって成生したのがクロキドロロームであろう。

キドロロームの下位は、柱状クラックの顕著に発達したネバキロームと呼ぶ粘土化火山灰で、上層のキドロロームとは若干鉱物量比にちがいがあり、両者の間に火山活動の静穏期があったと予想される。

ネバキローム70cmの下位は、明褐色単粒状の陶汰の良い層厚20～30cmの降下浮石層で、鉱物量比からみて、町田・新井（1976 6）の姶良Ｔｎ火山灰層である可能性が強い。ここではアカサクと呼ぶことにする。

ネバキロームの表面、キドロロームの最下部が土器のない石器破片が多数散在する旧石器文化層を形成している。石器は主として黒曜石片からなり、詳細な検討がまたれる。

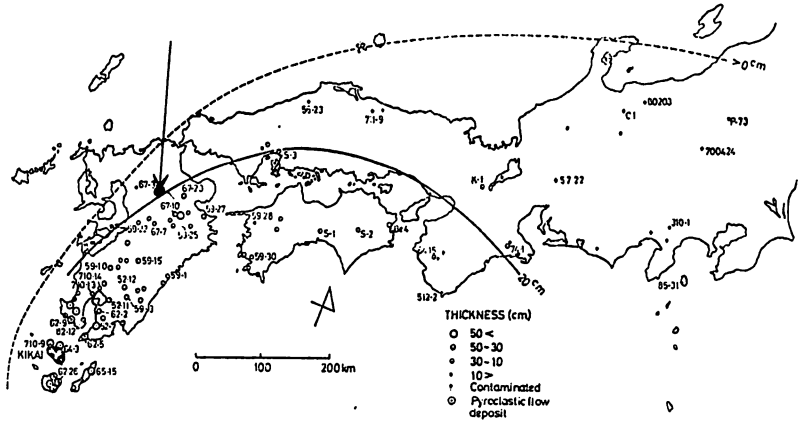
（4） 旧期ローム（Ⅶ層）

にぶい褐色ないし、明褐色の小クラックをもった粗粒火山灰層で、斜方輝石と単斜輝石で特徴づけられるロームで、菊池台地や熊本で、旧期阿蘇ロームとされているものに相当する。粗粒であることから、ここでは砂ロームと呼ぶ。火山活動は激しく、文化層はこれまで発見されていない。今後にも期待はかけられそうもない。

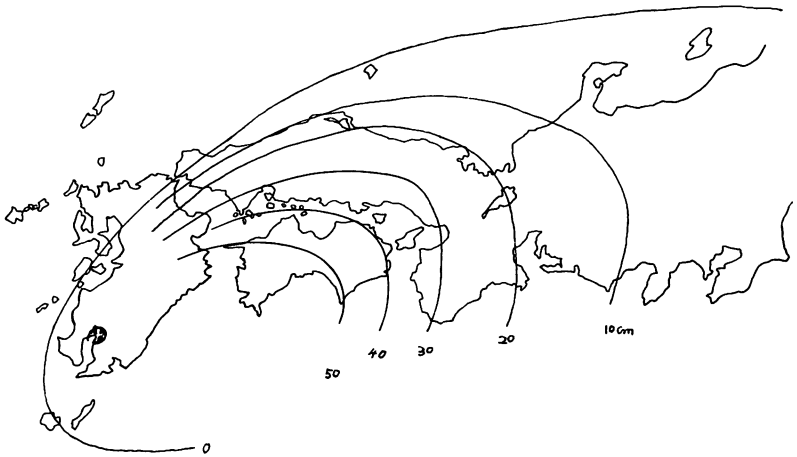
4 火山灰層序の熊本周辺遺跡との対比

熊本周辺の弥生、縄文、先土器の各文化の遺構や遺物含有層準と火山灰層序との関係は、古川ほか（1966）、古川・籾倉（1971）、籾倉（1974）、籾倉（1975）などによって明らかにされてきている。しかし、アカホヤや、姶良Ｔｎ火山灰のような、特徴的で短時間に広域に分布する鍵層との関係は、必ずしも明瞭ではなかった。

今回の下城遺跡の調査結果から、従来、黒色土Ⅰ・Ⅱの中間に認められている沖積火山灰土の大部分がアカホヤに対比され、黒色クラック帯としたものがクロキドローム、新期阿蘇ロー



アカホヤ火山灰の分布　　(町田・新井1978)



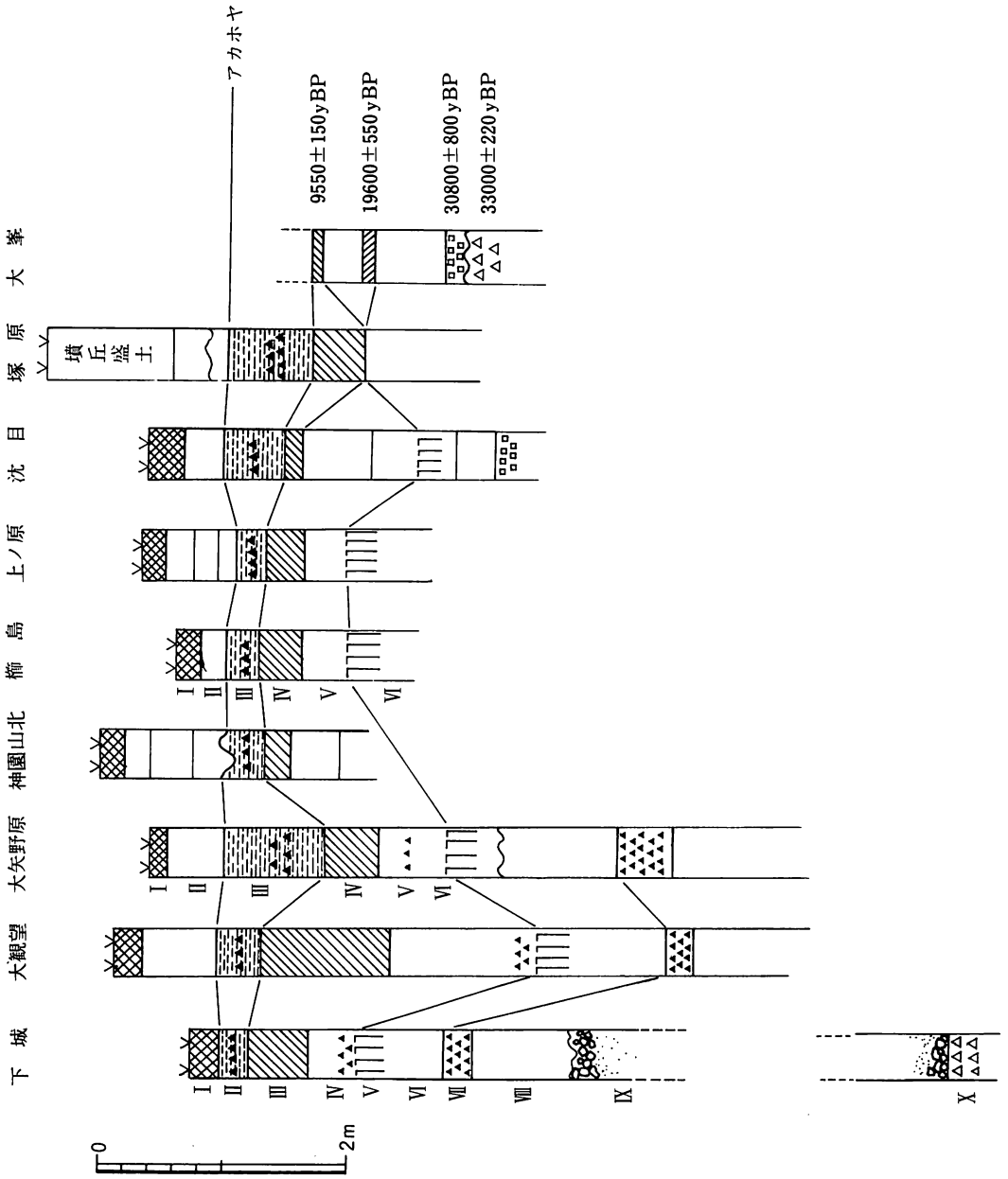
姶良火山灰の分布　(町田・新井1976)

アカホヤ火山灰の放射性炭素年代

地層名	産地	年代（年前）	試料	測定番号	文献
九州各地					
大浦火砕流堆積物	鹿児島県薩摩硫黄島	5,590±170	木炭	CaK-6128	金原ほか（1977）
幸屋火砕流堆積物	鹿児島県佐多町晶栄開拓	6,050±110	〃	CaK-3744	宇井・福山（1972）
	〃　佐多町大中尾峠	6,290±120	〃	CaK-3745	〃
アカホヤ火山灰層	指宿市下門	6,400±110	〃	CaK-659	宇井（1967）
	鹿屋市笠野原	4,640±80	腐植土（上位の）	?	松井（1966）
		5,450±160	〃（下位の）	?	Aomine . Miyauchi（1965）
		6,360±90	〃	?	松井（1966）
	熊本県多良木町横馬場	3,950±90	〃（上位の）	?	田村（1969）
	〃　上村神殿原	5,280±140	〃（下位の）	?	Aomine・Miyauchi（1965）
	〃　阿蘇大観峰	4,360±160	〃	?	〃
	宮崎県川南町番野地	4,570±140	〃	?	〃
	大分県久住町沢水	4,300±270	〃（上位の）	?	山田（1967
		9,060±100	〃（下位の）	?	〃

アカホヤ火山灰と縄文土器との層位関係

遺跡名［（）内のNo.は表2，4］	上位から出土するもっとも古い土器	Ah	下位から出土するもっとも新しい土器	文献
種子島の諸遺跡	市来式、指宿式（後期）		塞の神式、轟B式、曽畑式など（前期・早期末）	盛園（1953、1968）
指宿市岩本遺跡（82−12）	—		吉田式（前期）	—
鹿児島市加栗山遺跡	曽畑式（1〜2点）（前期）		塞の神式、石坂式、吉田式、前平式（早期末〜前期初）	石川・加藤（1977）ほか
鹿児島県溝辺町石峯遺跡	塞の神A式（前期）		塞の神B式（前期）	河口貞徳氏談、1977
〃　桑の丸遺跡	阿高式（中期）		塞の神A式（前期）	鹿児島県教育委（1977）
〃　山の神遺跡	市来式、指宿式、岩崎上層式（後期）		貝殻条痕文土器（前期）	
都城市今町	—		型式不明（前期）	松井（1966）
静岡県裾野市富沢内野山遺跡	型式不明（中期前半）		野島式（早期後半）	—
伊豆大島野増王ノ上(85-31)	木島式、関山式（前期）茅山式（早期末）			一色・松村（1976）



第39図　下城遺跡と熊本周辺火山灰の対比

ムとして一括したものが細分され、その中に姶良Tn 火山灰が夾在することが明らかとなった。

これらの知識を整理して第39図に示し、以下に若干の説明を加える。

下城Ⅰ層は、中世の砦構築や、その後の開畑・開田のために乱され、土層の保存がよくないが、城南町塚原（くぬぎ塚）、沈目、益城町櫛島、矢部町大矢野原および熊本市上の原のⅡ層以上に対比できる。したがって、下城Ⅰ層は、いままでのところ縄文・弥生時代の遺物・遺構は発見されていないが、アカホヤ火山灰降下後、縄文時期～弥生期を経て、現在にいたる、かなり長い期間にわたって成生された土層である。

下城Ⅱ層は、さきに述べたとおり、町田・新井（1978）のアカホヤ火山灰に対比できる。土色・構成鉱物からみて、阿蘇カルデラ北壁大観望、矢部町大矢野原のⅢ層、熊本市神園山北のⅤ層も、アカホヤ火山灰に対比される。甲佐町大峯のA層、塚原、沈目、櫛島および上の原のⅢ層は、土色が黄橙もしくは赤橙色でなく、暗褐色を呈するため、通常アカホヤとは呼ばれていない。しかし、含有火山ガラスや斑晶鉱物の量比、層準からみて、これらの沖積火山灰層の大部分は、アカホヤ火山灰およびその二次風成土壌と考えられる。アカホヤ火山灰は、6000年前もしくは、6000年～6500年前までの間のごく短期間のうちに降下したものとされており、しかも降下域が広いため縄文時代の示標層としての価値が高い。したがって、この層からの出土品は、これが降灰前の遺物が埋没したのか、降灰後の石器や土器が、灰神楽状に二次的に舞ったアカホヤ中に沈んだものか、その出土状態を再検討する必要がある。下城のアカホヤ火山灰には出土品がないが、これに対比した上の原Ⅲ層からは、籾圧痕とともに、縄文後・晩期の土器が出土している。これは、アカホヤを被覆する黒色土層下部からの出土品に共通しており検討を要する。

下城Ⅲ層（クロニガ）は、アカホヤ火山灰に被覆される黒色土層で、集石遺構、押型文土器および石片（黒躍石と万年山流紋岩）が出土している。この層は、塚原・沈目・櫛島・上の原および大矢野原のそれぞれⅣ層、ならびに大峯B_1層に対比できる。この層は、アカホヤ降灰前の3000～4000年間の堆積物で、植物繁茂し、火山活動の少ない時期の堆積物である。

下城Ⅵ－1、Ⅵ－2、Ⅴ層は、火山活動の比較的激しい時期の堆積物であるが、Ⅳ－1とⅤの上部は小康期（クラック帯）をもっている。Ⅳ－2層は土器を伴わない石器文化包有層となっていて、黒躍石小片（姫島産ではない）や緻密細粒安山岩の薄破片を出土する。下城Ⅳ－1、Ⅳ－2層は、大峯B層、塚原、沈目、櫛島、上の原のそれぞれⅤ、Ⅳ層に対比できる。無土器石器の包含層準は大峯では両層にまたがるが、大矢野原、沈目では明褐色ロームクラック帯（キネバローム）の上位、下城では下位にある。これらは、2万年ほど前から約1万年間にわたって断続的に降り積つたものである。火山活動の影響は、大峯が一番少なかったと推定される（黒色バンドの存在）。しかし、阿蘇を中心とした区域の活動はかなりきびしく断続したらしい。

下城Ⅵ層は、姶良Th火山灰層および南九州のシラス直下に分布する大隅降下軽石層に対比さ

れる可能性が強い。熊本市周辺は、姶良Th火山灰層分布の西縁にあたるため、これまで確認されたものがない。しかし、下城Ⅵ層の発見を契機に、分布確認が急増する可能性がある。この層は、鹿児島湾形成に密接に関連した火山活動の産物であるため、当時人類がいた場合、九州南部では全滅した可能性が強い。この火山灰の降下時期は、二万数千年前であろう。

下城Ⅶ層は、阿蘇カルデラ形成後の、阿蘇近辺での激しい火山活動の産物であるが、熊本市周辺との対比は、いまのところできていない。

下城Ⅷ・Ⅸ層は、それぞれ、三万数千年ないし四万数千年前の九重カルデラ（ドーム火山の中に埋没）と阿蘇カルデラの形成を伴つた活動の産物で（前述）で、人類遺跡はいままでのところ発見されていない。

5　まとめにかえて

下城遺跡の地形環境の成立は、数十万～数万年前の阿蘇火砕流堆積物Ａso１～４の放出・流下によってもたらされた。さらに流出前の谷地形が火砕流によって埋めたてられた。堆積の過程で、谷埋め部は溶結し、柱状節理の発達した溶結凝灰岩が形成された。Aso４流出後の河川は低所を下刻をつづけ、滝の後退によって、峡谷が形成された。この過程で、九重泥流の流出があったが、この活動は、下城滝下流では小段丘を形成するだけにとどまった。

基本的地形は、一万年前までにでき上つた。この間、阿蘇中央火口丘・九重ドームの活動に伴う火山灰が断続的に堆積し、２万数千年前の姶良Ｔｈ火山灰と、6000年前のアカホヤ火山灰が九州一円と西日本に共通に降下し、台地原面ではこれらがすべて保存され、斜面では、浸食・流下してしまった。

現在までに確認されている下城における人類存在の痕跡の最初は、姶良Ｔｈ火山灰降下の直後である。当時の文化は、先土器時代であった。

土器をもつ文化存在痕跡の最初は、アカホヤの前の黒土層で、阿蘇・九重などの近辺における火山活動が小康期に入ってからである。この時期が押型文土器文化であるのに対し、アカホヤ降灰後は、下城では確認されていないが、縄文後期から晩期の土器が出土し、編年に期待がもてる。

砦むきの地形は、先土器時代人・縄文人・中世人さらに現代人にも共通して活用されている点は興味をひかれるところである。崖にかこまれているが、崖を介して豊富な水をもち、南背後からの導水容易な環境がこれをささえたと考えられる。

付二　下城遺跡周辺の関連遺跡（資料）

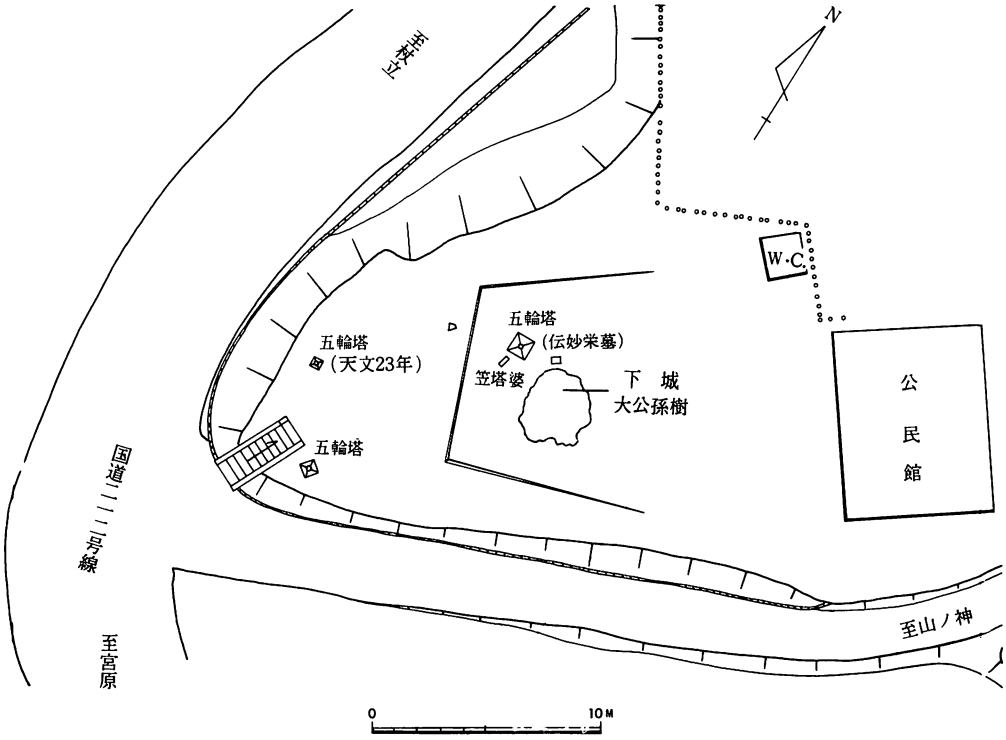
下城遺跡調査の合間をみて、この地域の資料の発掘に努めた。ここでは下城を理解するうえの参考資料として、この地方にある石造文化財を重点的に紹介することにした。

この地方、即ち小国地区には中世に属する石造物は多く、しかも保存がよい。石造物にしても我々が日頃見なれた熊本市周辺のものと異なり、独得の形、姿をしていて、それがこの地域の風土とマッチして一つの雰囲気をかもしだしている。

このように小国地区に興味ある資料も多いが調査はあくまで関連のうえ、時間的余裕を見出て調査したものであるから手の届かないところが多い。あれもこれもと悉皆調査じみてくるが、ここでは下城地区を中心にいささか取上げてみたい。また地元には禿迷盧氏の「小国郷土史」があり、出来るだけ屋上屋を重ねる煩をさけたい。

花山の五輪塔群地　（第40図 図版16・17）

下城には国道212号線沿いに国指定の天然記念物の大公孫樹がある。目通り9.6mに達する巨木であり、樹勢なお旺盛で天空を覆う。この公孫樹の下には五輪塔・笠塔婆があり、これと



第40図　　下城大公孫樹周辺石塔群

道越しの墓地横には六地蔵がある。

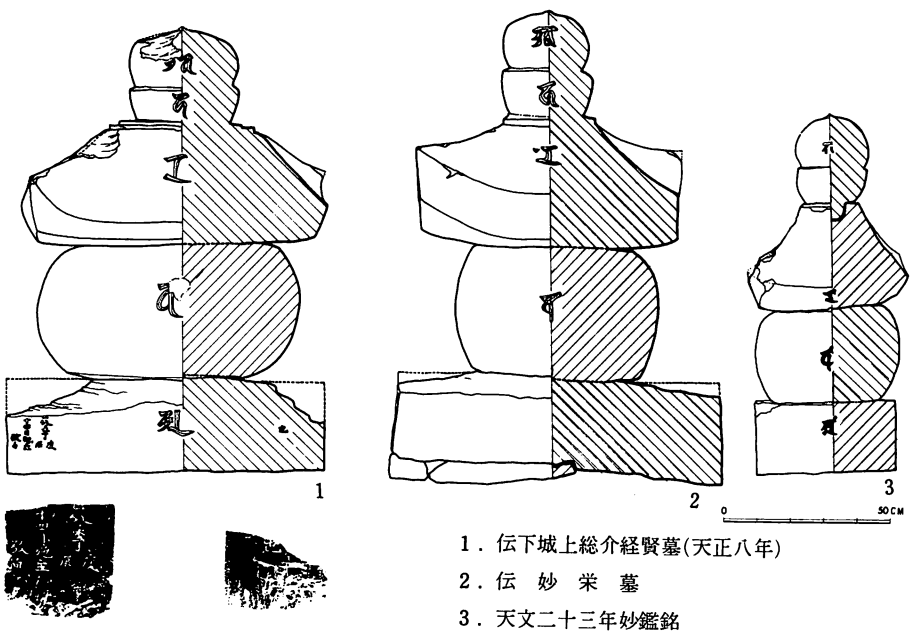
五輪塔　一基は下城城主経賢の母公妙栄の墓と伝えられるもので、全高1m40cmに達する堂々たる五輪塔（第41図）であるが、永年の風雪のため凝灰岩の碑面の傷みが激しい。また碑面には刻名などの確認も出来なかった。地輪は幅97cmに対して、高さ30cmである。水輪は径61cmに対し高さ39cmである。ここでは火・風・空輪（折れているのを補修）は一石より切出されており、この点他の地区に一般的に見られる五輪塔と様相を異にしている。火輪の軒反りは大きく、1辺の長さ78cmに対して4cmの反りをみせている。火輪が風輪に移行するあたりに2つの段があり、風輪がある。風輪の径は27cmで、空輪の宝珠の径は26cmである。また上端の宝珠の尖りは少ない。全体的印象として幅広い感じのする五輪塔である。

他の一基は伝妙栄墓とする五輪塔より約9m離れ、下の段に積まれている。この五輪塔は一見完好の姿をしているが、子細に検すると風空輪の石の材質が異なり、不釣合であるところから別の石を組合せたことが知られる。現高108cm、北面して据えられている。この五輪塔の地輪には刻銘があり、造立年紀等が明らかである。銘文は

天文廿三年甲刁
七月廿三日

種　字

帰寂月影妙鑑禅定門



1．伝下城上総介経賢墓(天正八年)
2．伝　妙　栄　墓
3．天文二十三年妙鑑銘

第41図　　小国町下城遺跡周辺所在五輪塔図

とあり、種子をはさんで右側に「帰寂月影妙鑑禅定□」となり、妙鑑に続いて禅まで知れるがそれ以下は知れない。恐らく「禅定門」または「禅定尼」となるものとみられる。種子の左には二行にわたり、「天文廿三年甲刁　七月廿三日」となっている。

国道より大公孫樹へ登る石段の右手に五輪塔が積まれ、下から宝篋印塔の台座、そして水輪が2つ重なる。その上に火輪、空風輪となっている。空風輪には種子が刻まれている。総高110cmに積まれた5石は一見して、それぞれ別個の五輪等を組合せたものであることが知れる。またこの周りに空風輪2個が転がっていた。

笠塔婆（第43図）　大公孫樹横には笠塔婆一基がある。これは、伝妙栄墓の五輪塔と並んだ形で西面して立っている。地上高53cm、碑面の横幅31cm、高さ26cm（一部は埋没）、厚さ15cmの凝灰岩切石を使用している。碑面には刻銘の発見はできなかったが本来墨書銘のあったことが考えられる。笠石は別石で、寄せ棟で棟が切出されている。棟は中央がたるみ気味である。軒には垂木などの造作はない。

花山の六地蔵幢（第42図）　下城の大公孫樹と国道を距て、人家の裏手に一基の六地蔵幢がある。すなわち花山の六地蔵で刻銘があり造立の趣意などの知れる好資料である。

総高4m78cm、竿石は下の方がいく分大きく安定感がある。請花、そして龕部には六体の地蔵が刻み出され、丹彩が施されている。笠は比較的小さく、ゆるく傾斜する。軒には垂木が切出され、これにも鮮やかな丹の彩色が残る。宝珠は火焔宝珠で国東仏教文化の影響を受けていることを表わしている。

この六地蔵幢の竿石に刻銘があり、建立の趣意と講衆の名が記されている。

伏願現世安穏後生善処者也　　日峯朝公

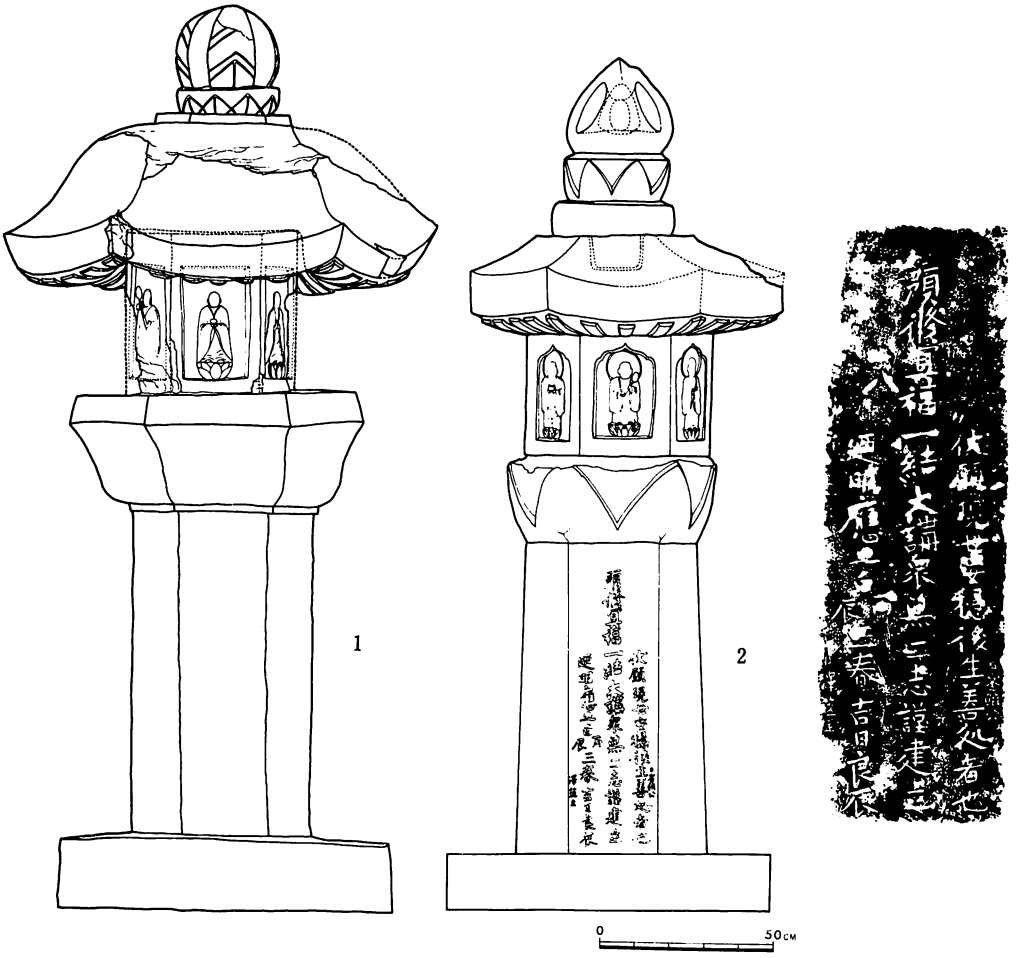
預修冥福一結大講衆無二志講建立

廼明應五白丙辰三春吉月良辰

澤藍主

竿石の他の五面には線を区切り、4段に講衆の法名がみえる。まさに大講衆にふさわしく、人数も多数にのぼっている。当時の社会組織の動きを知る上にも好資料である。

（花山の六地蔵拓本）



1　十三塚（弘治２年）
2　花　山（明應５年）

第42図　六　地　蔵　幢

下城不動尊　（図版13）

下城不動尊のあるあたりを地元では護心寺と呼んでいる。護心寺は、護身又は護神とつくることもある。名称からして神護寺の臭いのする寺名である。

下城の本村橋のあたりで、国道より東へ少し登ったところに堂宇がある。ここは坂下地区にあたるのが、下城の大公孫樹とは至近の距離である。このお堂には不動明王をはじめ、阿弥陀如来などの佛像が安置されている。この中に多くの佛像があるのは、地元の話によると明治に入って下城の各地にあった堂祠が廃絶し、各地にあった佛像を集めたものと言う。

不動明王はいたみが激しく、バラバラになっていた。それを地元では、昭和52年に至り修復した。今では見違えるようになり、生気が甦った。

この下城不動明王には造像を示す銘文は明らかでないが、脇侍に紀年銘がある。制吐迦童子の首に

天保十□
二月廿八日
開眼
當旦那山部
朝臣經賢
（背　面）

願主春湖叟
大永未三年
佛師了賢上人
（正　面）

所薦旦那
□ニ次第
（右側面）

と墨書銘があり、佛師了賢上人、旦那山部朝臣經賢の名が見える。紀年銘に大永三年と天保の年号があり、字体も異なり、大永三年（1523）が当初のものと思はれる。そこで不動明王も、おそらく脇侍と同時のものと推定される。なおこの不動明王は護心寺の本尊とみられ、今なお月の28日には霊験あらたかな「下城のお不動さん」として、遠近からの尊崇を集めている。

坂下の五輪塔　（41図 図版16）

坂下の杉野氏宅前に一基の五輪塔がある。この五輪塔は保存もよく、西面して立っている。総高1m31cm地輪は1辺94cmの方形で、高さ27cmである。地輪には種子のほかに銘文がある。水輪は径78cm、高さ40cmで偏平である。火・風・空輪は一石から切出されていて、高さ64cmを計る。火輪の軒は僅かに反り、風輪との移行部には段があり、二段が切出されている。風・空輪ともに偏平で、全体として安定した感じのする五輪塔である。ついで地輪の銘文は素材の凝灰岩が剝離して、銘文の全ては明らかでないが、幸いにも年紀を読み取ることが出来た。

□正八季庚辰
□十四日施主
敬白

種字

也

上記のように種子の右手に「也」の字一字が残っていて、上の部分が欠失している。種子の

左手に「正（一部欠失）八季庚辰」とあるのは、干支からしても天正８年（1580）であることが知れる。造立の月は不明であるが、以下「十四日施主　敬白」が知れる。

この五輪塔は下城上總介経賢の墓と伝えられるもので、今でも花などが供えられている。また、この石塔の前にも五輪塔が散乱していて、水輪１、火輪１、風空輪３が確認された。

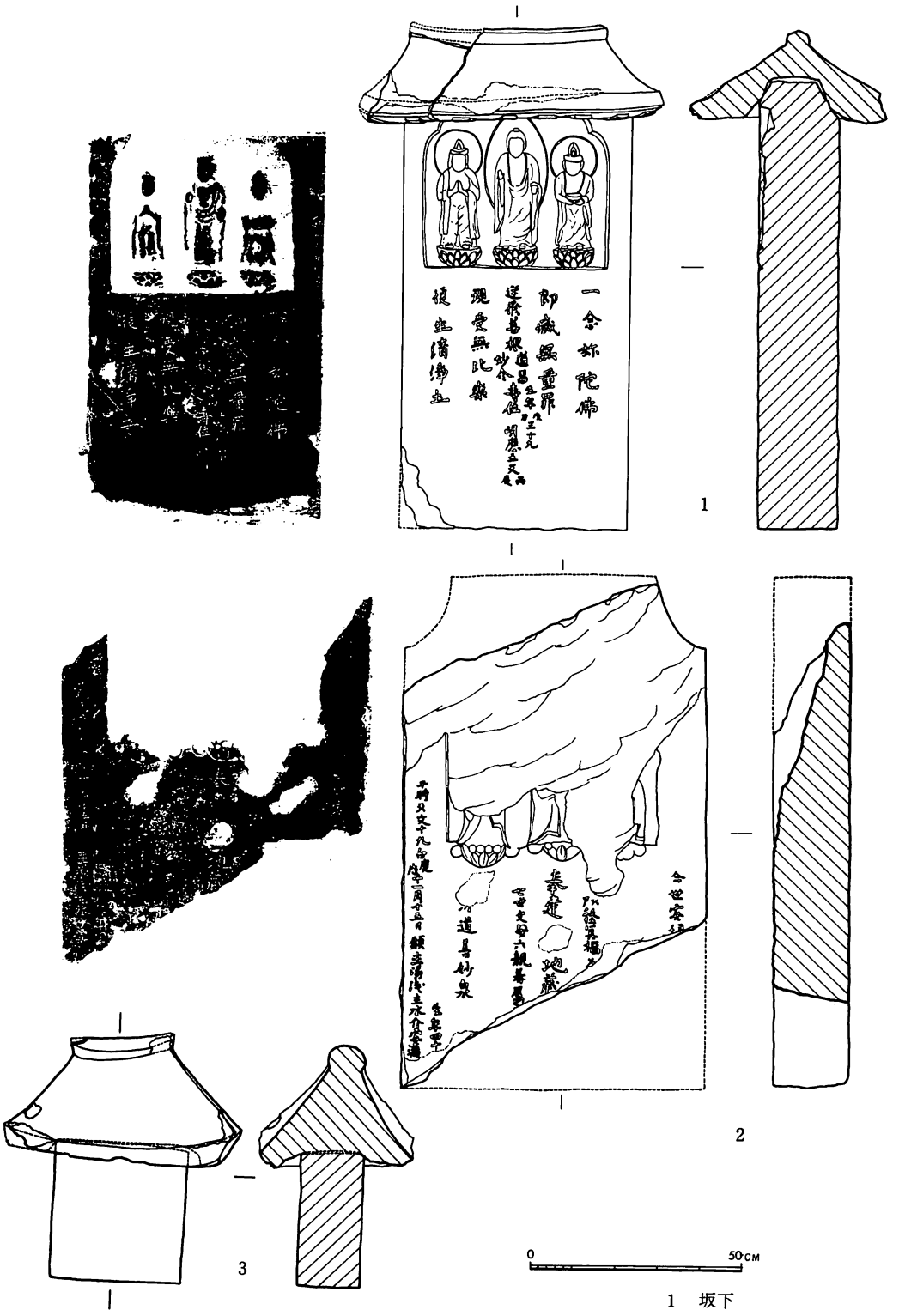
笠塔婆（第43図）

下城の坂下地区に二基の笠塔婆がある。一基は国道沿いの東側旧ガソリンスタンドの裏手にあり、他の一基は樅木橋の近くから分かれ、弓田へ通じる道の左手の山にある。前者の笠塔婆は傷みが激しく、畑の角近くに倒れており、後者は元々九州電力の導水路にあったのを、工事のためここに移したという。前者の塔身は幅72.8cm、推定高122.5cm、厚さ17.8cmの平板な凝灰岩切石からなっていて、上端は笠受けのため両側（１側は欠失）をまるく削られている。碑面には三尊形式の佛像が彫られているが、台座と下肢部以外は欠損している。刻銘からして地蔵三尊であることが考えられる。

今世安穏
預修冥福□
奉建立地蔵□
七世父母六親眷屬
□□道善妙泉　生年四十□
于時天文十九日白庚戌十一月十五日願主湯浅主水介安満

と読み取れる。この塔婆は天文19年（1550）、湯浅主水介安満が願主となり建立したことが知れる。銘文にある湯浅氏については定かでないが、今後の追考が望まれる。なお笠石は破損し、くり込みのある石材が現地に残っている。

他の一基の笠塔婆は保存がよく、完好な形で残っている。塔身部は幅54.8cm、高さ104.5cm、厚さ19.0cmの切石で、上部に阿弥陀三尊が彫られ、下部に銘文が刻まれている。阿弥陀三尊の彫りは比較的深く鮮明で、中央の弥陀には舟形光背が、脇侍には円光線が二重の線により形どられている。光背・尊像以外のところは丹彩され、刻像を浮出させ、荘厳な雰意気をかもし出している。銘文には



1　坂下
2　坂下
3　花山

第43図　下 城 笠 塔 婆

一念弥陀佛
即滅無量罪
逆修善根道昌生年ヲ戊三十九
妙金壽位明應五天丙辰初
現受無比楽
後生清浄土

と記されている。

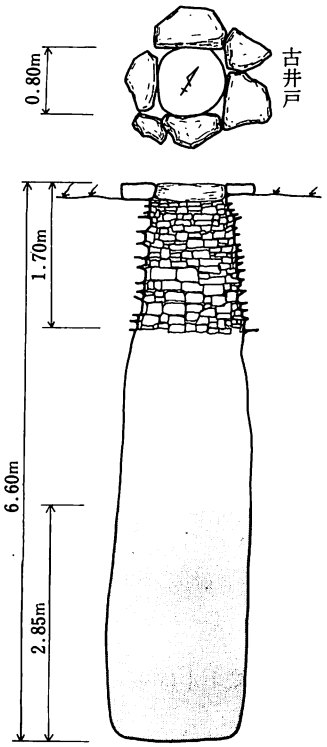
笠石は寄棟で、軒先はゆるく反る。棟は4㎝位で切出されており、中央部がいく分下がっている。軒先には棰木が1㎝ほどの高さで切出され丹く彩色されている。笠の中央左⅓のあたりから縦に割れているが、まづまづ完好な姿を保っている。総高116㎝である。

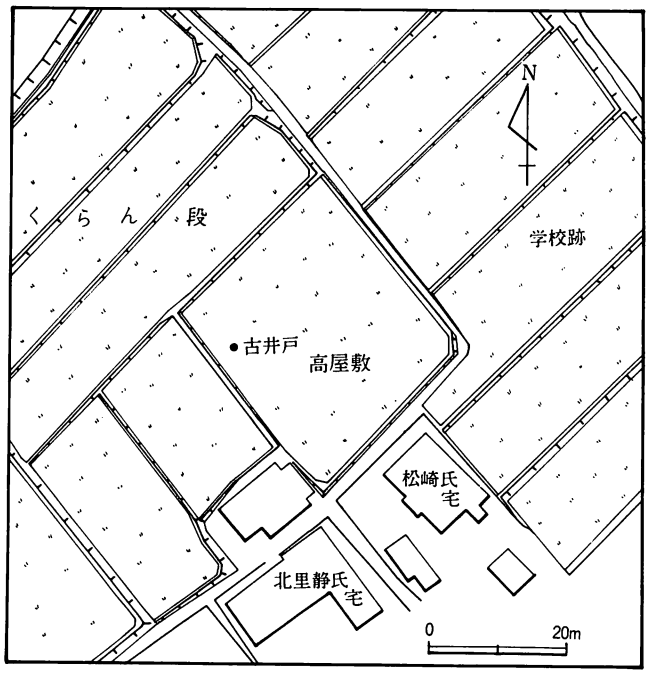
高屋敷と古井戸　(第44図 図版12)

これは道路建設予定地外であるが、松崎方の北側、農道を距ててほぼ方形区画の水田がある。この水田は34×28m位で、周辺の短冊形の水田と大きく様相を異にしている。さらにこの水田には北から9.2m、西から3.5mのあたりに古井戸があり、かつて屋敷跡であったろうことを窺はせるに充分である。この地点について地元の言い伝えによると、「**たかやしき**」、「**はなにわ**」という小名をもっていることが知れ、また北側の一段高い水田を「**くらんだん**」と呼ばれている。文字を充てれば、それぞれ高屋敷、花庭、倉の段が考えられ、屋敷にちなんだ名前であることが知れる。また北里守氏によると、この畑の角に西金吾の「雲乗り石」(今では別の地点にある)があったという。その石は1㎥位の自然礫であるが、北里家では毎年定った日に供養していたという。ちなみに北里家は今でも西家と呼び、西金吾ゆかりの家と伝えられている。

井戸についてふれたい。前述のように高屋敷の隅近くに古井戸一眼がある。そこでこの井戸について略測を試みた。井戸の上面径約80㎝で下になるにしたがい径が大きくなり、徳利状の断面を呈している。目測で底の方では150㎝位になるとみられる。上から1m70㎝は無造作に石が積まれ、井戸の崩壊をくい止めている。井戸の深さは6m60㎝、9月中旬の水田落水時の水位は底から2m80㎝の水位であった。

この種の徳利型の断面の井戸はあまり見かけず、現代の井戸では勿論なかろう。強いて卑見を披露すれば、私は且て中国の農村部でみかけたことがある。場所は中国の山東省南部の臨城というところの農村で、畑の灌水用の井戸として用いられていた。機会を得て中を調べたところ、下ぶくらみの徳利状の断面をしていた。上から井戸水を吸み上げる時、容器が井戸壁に触れずスムーズに上がるという利点がある。恐らく古い様相をもったものと考えられ、他にも類





第44図　高屋敷と古井戸見取図

例を求めたい。

以上のようなことであるが、高屋敷と呼ばれる水田には、地元でも注目して「庄屋の屋敷」ではないか、などと考えられていた。しかし、下城若宮神社、さらに城跡との関係位置からしても舘跡とみるにふさわしいところである。

佛山（ほとけやま）の奉讀誦経塔　（第45図 図版16）

下城の坂下から山越えで弓田へ行く山中に一基の経塔がある。四辻より東へ約 500mの山中の最高所とおぼしきところに倒れている。

ここには一辺7m位の方形土壇が築かれていて、もともとその中央部に南面した経塔が立っていた。（今では倒伏）。また碑面は上端を尖らせ、二条の横線がある。高さ9.7cm、幅52cm、厚さ17cmの切石の碑上部に弥陀三尊の種字、そして三行の文字がある。中央に「奉讀誦法華妙典一千部為妙澄逆修」そして右側に「元亀三年壬申」、左側に「十一月廿日」と記されており、元亀三年（1572）の逆修碑であることが知れる。

第45図　佛山の奉読誦経塔（拓本）

なおこの種の経塔は、小国には黒渕の城村観音堂に大乗妙典十三部（永禄２年）、上田の貴船迫に法花妙典十三部（永禄６年）、南小国波居原の千辺の大乗妙典（享禄５年）などがある。

十三塚と六地蔵（第42図）

下城から山越えで土田（はんだ）へ抜ける。その村境い近くに十三塚がある。峠とおぼしきあたりの杉林中には径５～６ｍの円墳状の塚を探しだすことができる。もともと杉を植栽される前は草原で、相当数の塚があったという。またこの中の一つから発掘により刀が出土したとも言うが定かでない。十三塚については全国的に例が多く他に十三峠などという名稱のところもある。中世紀のものとみられるが、正体があまりはっきりしないのも現状である。ここではただ現状の紹介に止める。

十三塚の少し南、土田よりの方に松櫟などの生い繁るあたりが広場になっていて、そこに山ノ神、馬頭観音が祀られ、一基の六地蔵幢が造立されている。六地蔵は大きく、高さ２ｍ56cmで銘文からして弘治二年（1556）の建立であることが知れる。傷みがあるが処々補修されている。

下城地区には文化財と目されるものは多々ある。中でも下城神社の銅戈４本は余りにも有名である。この銅戈は元々この地域の出土品が神社に奉納されたものと考えられる。それにしても小国地区は他の地区に比して弥生時代の遺跡に恵まれてないのは不思議に思えてならない。神社には能面が一つ奉納されている。奉納の箱書きに「一　御能一面　右御面往古下城某永禄年中迄内城御在城之時（とき）宇土林世ト申人御能役ニ而所持之由當家ニ傳来人家ニ備置恐多依テ當社神殿奉納也　天保十年己亥初春吉日　高野為右エ門藤原政勝」と記されている。専門家の見立てがもとめられようが、南北朝期の能面と思われる。

下城地区には、下城神社近くから鳶尾城（城の辻というところにあり、山林根払いの時刀の鐔が採集されている）へ上る途次山林中に「市井野大善」の墓がある。自然石の碑面に丸のみでたたき、墓誌銘を刻んでいる。様相として比較的新しいことから後世の供養墓とみられる。市井野集落への坂を上ると左手に地蔵堂がある。そこの裏手に五輪塔と宝篋印塔が転がっている。これらは古墓に相違ない。

法成寺の梵鐘（第46図 図版18）

下城氏に直接関連ある資料として、下城上総介経賢の母妙栄が享禄四年（1531）両神社に寄進した鐘が、南小国町矢津田、下城真氏宅の道越しの崖下の祠に安置されている。この鐘の池の間には銘文が彫られ、それは次のとおりである。

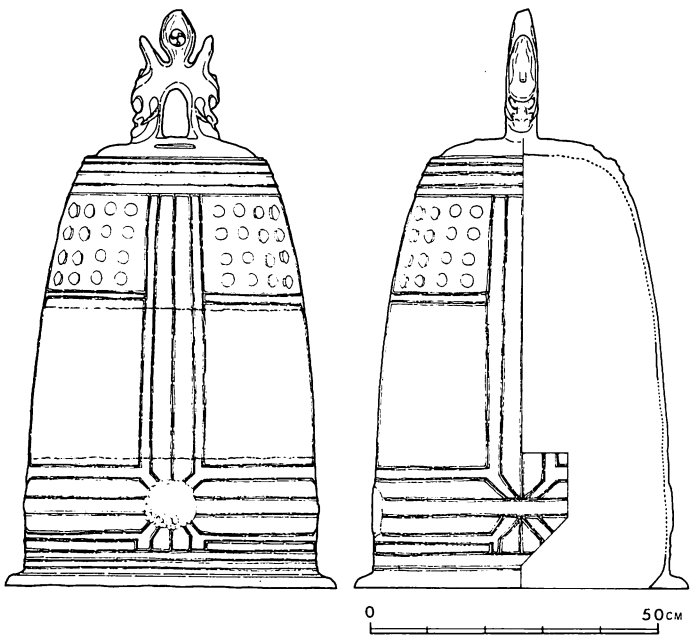
奉鋳　安（ママ）
銅鐘一口
肥後國阿蘇郡小国庄
高橋火宮兩大明神宮
夫以一聴鐘聲當願衆生
脱界若得證菩提者如来
誠諦之金言郡生得脱之指

南也爰下城上総介悲母改
名妙榮抽無二之懇志奉
寄進兩大和（ママ）荒之御社檀一
口之梵鐘所謂以八万之銭貨令
錬鋳畢社頭安穏威光自在惣
天長地久国土大平金輪聖皇寶
祚長遠別信心大施主（カ）某甲息（カ）災延命

子孫繁昌増長福壽當所
安全諸人快樂結縁合力各
成善願乃至法界平等利益
享禄三年辛卯
大願主氏女法名妙榮
阿蘇三社大宮司宇治惟豊
下城上総介山部經賢
鑄師奉行　公次

豊後國笠和郷駄原村
大工藤原氏樹新右衛門景次
鐘取合武石九郎兵衛尉

で、この鐘の功徳、趣意が述べられている。実測の結果、１ｍをわずかにこえ、総高１ｍ１㎝である。龍頭の上には巴文があり、火焔の上端は擦切りられている。蓮華文の撞座は使用のあ



第46図　法成寺の梵鐘

とがあり、長年使われたことを示している。池の間の上下端近くに鋳込みの際の傷あとがみられる。

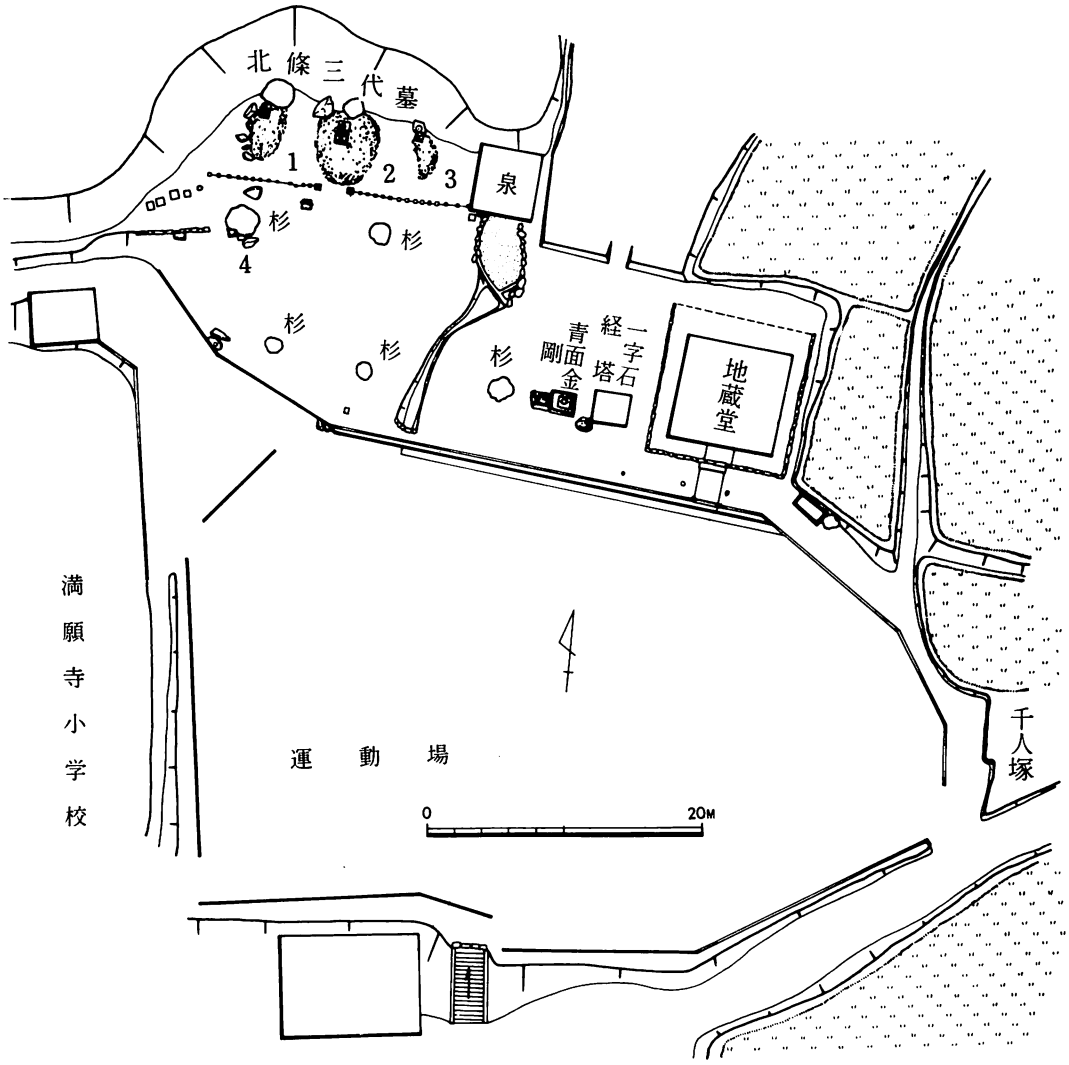
銅鐘のある矢津田には磨崖の六地蔵（図版18）がある。凝灰岩の壁面に切り出しているもので、興味ある資料である。

以上のほか黒渕地区には、城村観音堂大杉の前に「奉造立読誦大乗妙典十三部」とした永禄２年（1559）の経塔があり、同所に宝篋印塔、五輪塔の残欠が多数あった。話によるとこれらの塔碑は堂の裏の畑から出土したという。また、柿木集落の毘舎門天のある堂域には二基の五輪塔が、さらに少し手前の国道よりの墓所にも五輪塔がある。

この他、小国の各地区には多数の塔碑類がある。そこでいくつか図と写真を上載し資料とした。南小国町千光寺には天養元年（1144）の自然石の碑がある。その下から越州窯経筒が出土し、北里誠一郎氏のところに保管されている。蓋付の筒形の容器で、蓋付のままで高さ33.0cm、身だけで28.8cmの完好の経筒である。また満願寺には草創の古さと共に、多数の石造物が残っている。北条三代の墓（五輪塔）開基にあたった経杲和尚の墓（宝篋印塔）などがそれで、参考資料とし図示した。

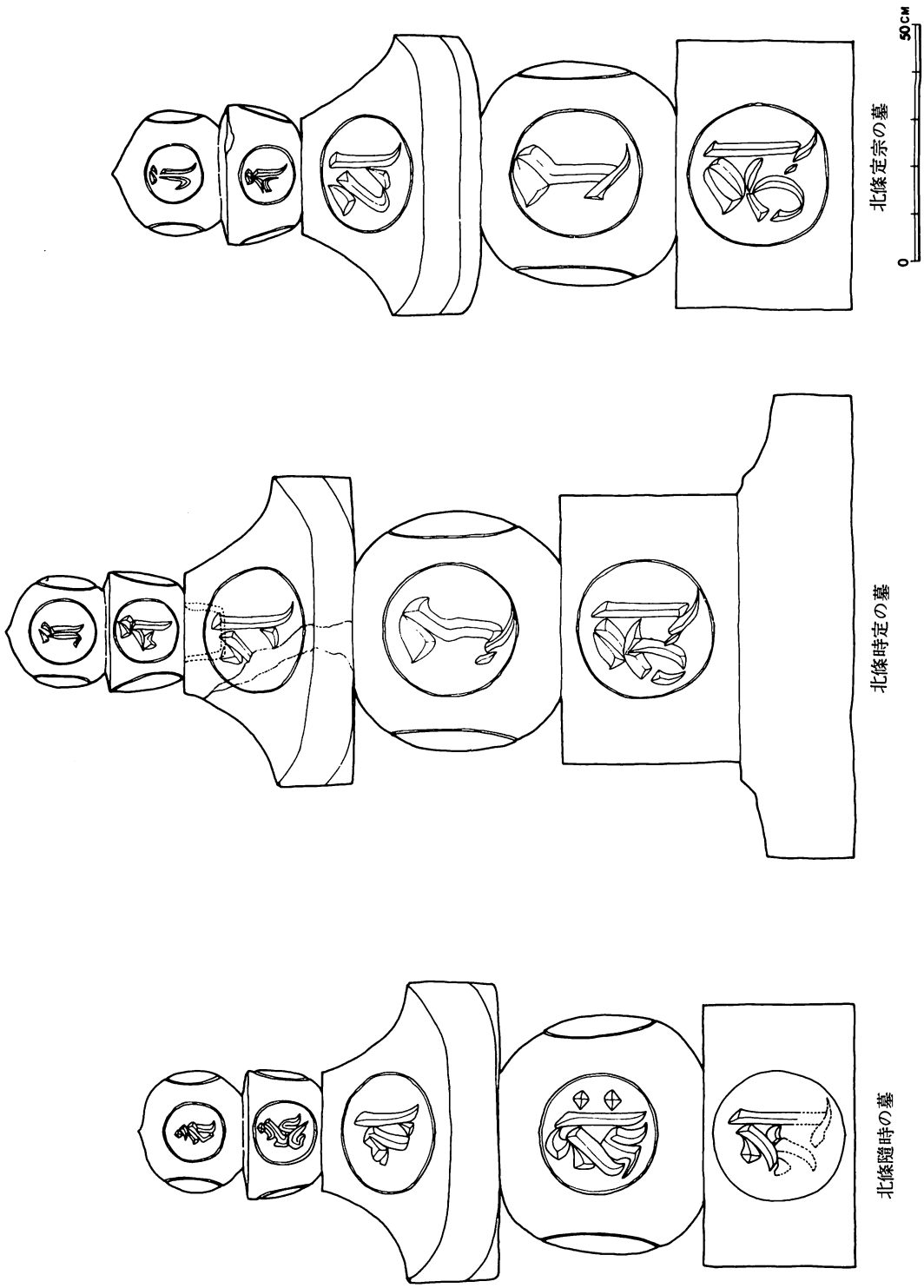
注　下城不動尊の修復にあたった原田清一郎氏(熊本市)によると、尊像はバラバラでみるかげもなかったという。修理の際、尊像のどこからともなく「玉」が出て来た。くろい玉は径２cm余りで重く、表面は風化しているが貴石かガラスと思はれるものであった。今まで多数の仏体を修理しているが、この様な経験はなく驚いたとのことであった。その後昭和54年３月、宇土市の如来寺の本尊を修理するにおよび類例が発見された。仏体の胸の部分を内側からくり抜き、径10.5cm、深さ６cm位の円穴をあけ、そこの玉が納めてあった。穴の蓋の表には「如来院本尊釈迦如来　正元二年庚申正月十日建立　同二月九日収之　開山住持比丘義尹　同開山尼修寧」と書かれ、内側にも同趣のことが記されていた。穴の中には径５cmの木製の玉と香木があり、玉の半面を金色に、半面を銀色に塗られ、それを文字曼陀羅で包み、さらに絹布、紙でくるんで納められていた。恐らく厳修の後、魂として封じ込められたのであろう。正元二年は1260年であり、比丘義尹とは熊本市川尻の大慈禅寺の開山でもある。なお原田氏によると下城不動尊の場合、再び玉を頭の部分に封じ込めておいたという。

後刻知らされたことであるが、如来寺の木製の玉を割ったところ中には籾19粒、水晶小玉１、さらに麻紙に書いた陀羅尼が封じこめてあった。

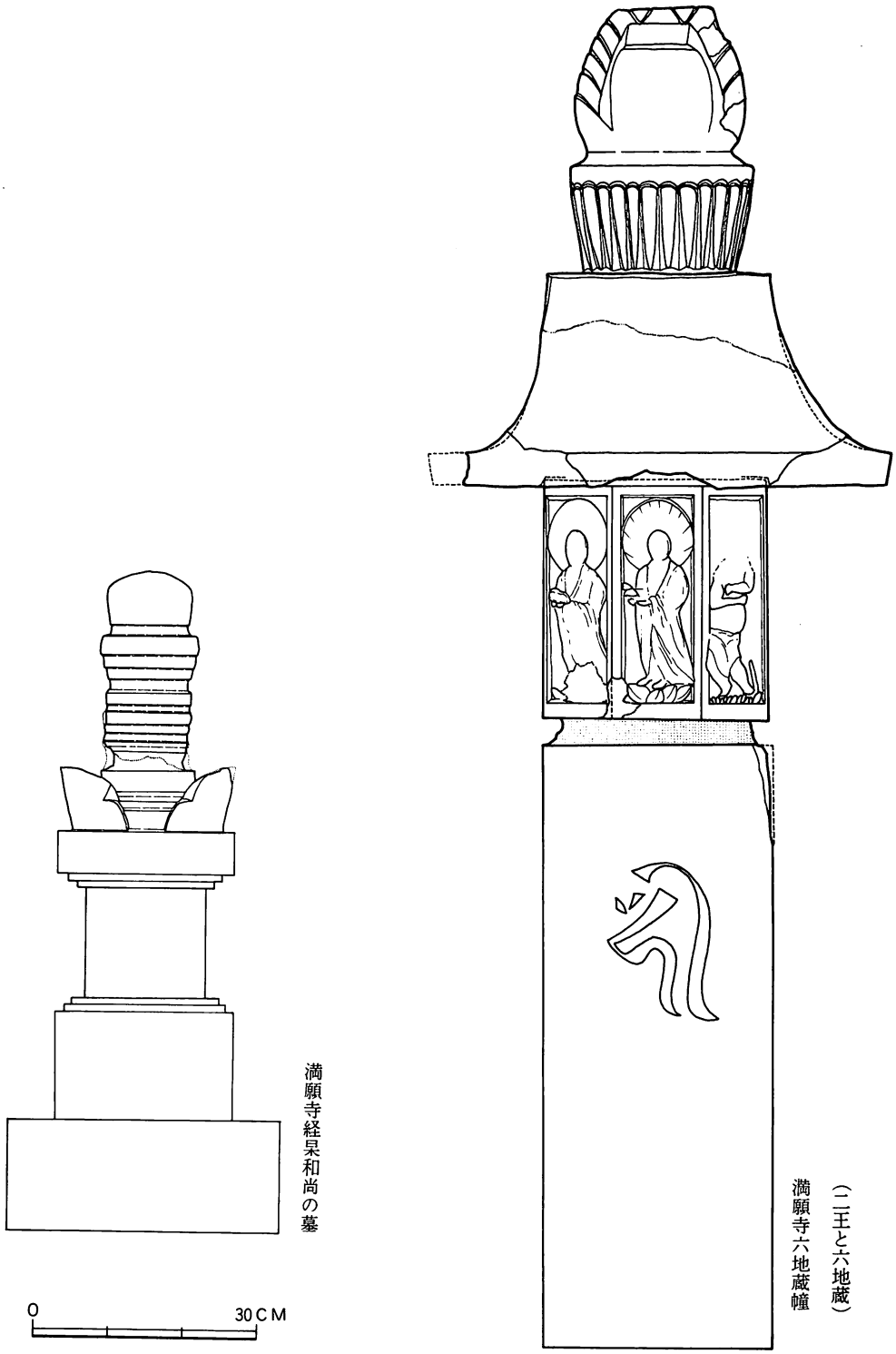


1　北條隨時墓
2　北條時定墓
3　北條定宗墓
4　児玉源八郎墓

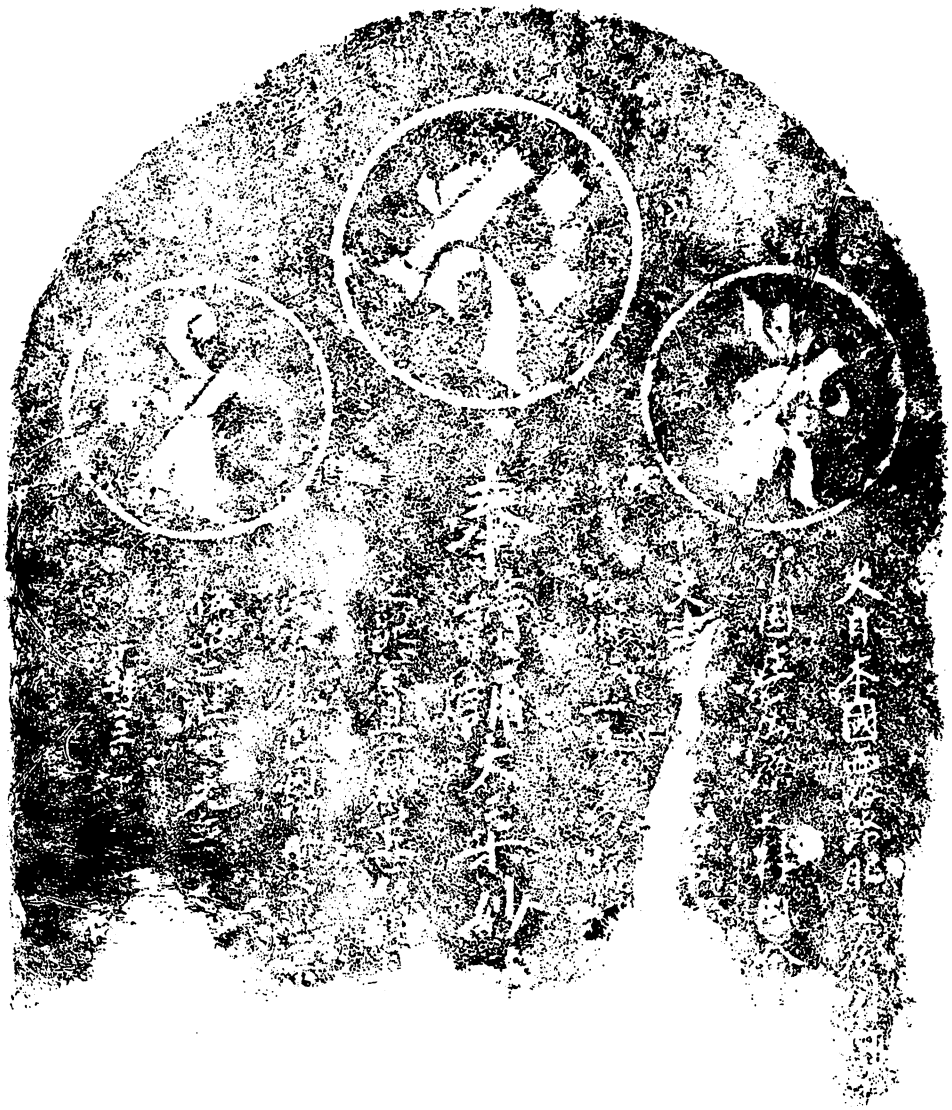
第47図　北條三代墓の周辺



第48図　北 條 三 代 墓



第49図　満願寺経杲和尚の墓と六地蔵幢



享禄五年（1532） 銘

0 20CM

第50図　千辺の経塔（拓本）

付三　加藤清正と下城氏

熊本大学名誉教授　松　本　雅　明

1　阿蘇氏と清正

加藤清正が肥後に入国したのは、天正16年（1588）6月27日である。豊臣秀吉は島津征伐ののち、すなわち前年天正15年（1587）6月2日に佐々成政をして肥後を領治させたが、成政は隈部親永が服しないのを怒り、鎮定しようとして土着の領主五十二人（五十二人衆）の反抗に遭った（国衆一揆）。黒田孝高・毛利勝信・安国寺恵瓊らの救援と阿蘇氏家臣の内通によってようやく鎮定することができた。しかし秀吉は、成政が秀吉の領地朱印を与えたものに所領を与えず、また命をまたないで検地を行ったことを怒り、天正16年閏5月14日に、成政を尼崎に呼んで自刃せしめた。秀吉は肥後領を二分し、加藤清正・小西行長に分治せしめた。それは、清正・行長がともに島津征伐に従い、勲功があったからである。

清正は尾張の百姓出身の直情径行の武人、行長は堺の商人出身の智謀にたけた才人で、両者を組み合せ、牽制させることによって、肥後の統治を成就しようとしたのである。

肥後には五十二人衆の残党のほか、一揆に加わらなかった土豪、佐々氏の旧家臣団が存在した。菊池氏はすでに亡び、その家臣らが北に割拠し、益城郡の甲斐氏、宇土の名和氏もすでに勢力を失っていた。ただ阿蘇氏が矢部に、相良氏が球磨に旧勢力を温存していた。相良氏は旧領を安堵され、加藤・小西の領外になったが、加藤氏の領内には阿蘇氏のほかに、小国の北里、下城、室原の三領主がおり、小西領には天草の五人衆がいた。小領主ではあるが、金峰山系には山ノ上の三名字（田尻・牛島・内田）が存在し、その東北部には真言系の修験の勢力が存続していた。

清正は入国のとき26歳、行長も20代であったと思われる。若年の領主は入国に際して、細心に旧勢力に対処しようとしたことはいうまでもない。しかし阿蘇氏に対する処置が実行されたのは、入国後5年経った文禄2年（1593）朝鮮の役の時で、清正は出征し、留守の熊本城代下川又左衛門によって、秀吉の命として実行された。それより前、天正11年に阿蘇惟将・甲斐宗運が没し、翌年3歳の惟光が大宮司職をついだ。翌13年、島津軍の進出によって浜の屋形を攻落され、4歳の惟光は弟惟善、その母夫人とともに上益城郡目丸の山中にのがれた。加藤・小西の入国ののち惟光は隈本に、惟善は宇土に引きとられていた。やがて朝鮮の役がおこり、その虚に乗じて薩摩の梅北宮内左衛門国兼が反乱をおこし、肥後の南に攻め入り、葦北・八代の両郡をかすめた。肥前名護屋に駐在した秀吉は、その反乱が肥後に阿蘇大宮司などの名門が残存するからだとし、下川又左衛門に命じて、文禄2年秋8月13日にわずか12歳の阿蘇惟光を花岡山の山腹で斬らしめた。その場所に孤松があり、後世まで「阿蘇殿松」と呼ばれた。この少年

の大宮司はいわば加藤家の捕虜に等しく、彼を中心に反乱がおこるとも思えず、しかも清正の留守中のことである。秀吉の勘気にふれたとしても、薩摩勢力と合流するとは考えられず、理解しがたいことが多い。おそらく清正入国いらいの阿蘇氏対策を、この機に乗じて実現したとしか考えられない。

この阿蘇氏対策はさらに朝鮮の役の終了後、熊本築城のころ実行される。それは慶長6年(1601)に阿蘇氏の所領を358石3斗4升としたことである。しかし一挙にそれが実現したというのではなく、阿蘇氏への圧力は徐々に加重され、この時点で固定するとみなければならないであろう。それは次の二通の文書に示されている。

加藤清正所領充行黒印状(阿蘇家文書 326)

宛行所領之事、阿蘇郡之内を以参百石五拾八石三斗四升目録別帋有之遣之候、全令所務、可抽忠勤之状如件

慶長六年
十月十四日　清正(黒印)「履道応乾」
(阿蘇惟善)
神主又次郎とのへ

加藤清正所領充行目録(阿蘇家文書 327)

神主又次郎とのへ

目　録

一、弐百拾三石四斗五升　阿蘇郡宮地村之内
一、五拾石六斗六升　同坂梨村之内
一、九拾四石弐斗三升　同竹原村之内

都合参百五拾八石三斗四升也

慶長六年十月十四日　清正(黒印)「履道応乾」

古代末以来、中部九州最大の勢力をほこった阿蘇氏も、ここでは一介の神主におとされ、領主としての権勢を奪われ、甲佐・健軍・郡浦など、熊本平野・益城・宇土郡を支配した拠点も、阿蘇氏から脱落してゆくのである。阿蘇氏は南北朝の初期までは、阿蘇町の坊中から内牧にゆく道の西側の本塚(573.8m)を居城とし、その前面の低い丘陵に居館があり、浜の屋形(館)といわれていた。しかし建武3年(1336)の敗戦後は、防備に弱いこの地をすてて、天然の険をなす矢部に岩尾城を築き、浜の屋形(矢部高校敷地)を移し、神殿を築いた。一時矢部による阿蘇惟澄と阿蘇に拠る阿蘇惟時が対立し、それぞれ南朝・北朝に属したことがあったが、惟時も正平5年(1350)に宮方に帰順した。南北合一ののちは、もっぱら矢部を本拠としたが、島津氏によって矢部が陥され、清正が入国するに及んで、再び矢部に帰ることはなかった。

この阿蘇氏所領の削減は、上述のように、領主としてではなく、単に神主家として阿蘇氏を認めることを意味し、したがってそれは神社・寺院（西巌殿寺）にも大きな影響を与えたと思われる。加藤氏時代の文書は残っていないが、細川氏入国後の措置は、加藤氏の政策を踏襲したものと思われる。細川忠利・光貞（光尚）・綱利のそれぞれ同文の判物が残っている。

細川忠利判物（阿蘇家文書 329）

為寄進肥後国阿蘇宮社領事、任先規阿蘇郡之内宮地・坂梨・竹原・黒川村所々都合九百八拾九石余目録有別帋、令寄附之訖、以各配分、相勤神事、祀祭之禮、不可有懈怠者、国家安泰之旨、可被抽丹誠之状如件

寛永拾年正月七日　細川肥後少將忠利（花押）

阿蘇宮　神主又次郎殿（阿蘇友貞）
寺社中

寺社中とあるので、この中には阿蘇神社、西巌殿寺が含まれていることがわかる。

このことはすでに清正の西巌殿寺宛の判物にみえている。

加藤清正判物（西巌殿寺文書 201）

抑当社退点之儀（転）、先年大閤御所御下向之砌（天正十五年）、郡中之者共邪心を相搆儀、神主一人之科ニ究、御成敗候、其付而当社も破滅候、彼邪心之者御成敗之上者、阿蘇大明神破滅不仕様ニ可被仰付哉と達上聞、当社造宮等并坊中をも取立、社領等可申付と雖念願候、高麗在陣に付而押移候、然處、大閤様御他界ニ依而、其志も無詮候、然者、為冥加豊國大明神を当分領へ灌頂可申（勧請）賞悟候、令灌頂事成就之上にて受神明、其上を以神領等をも可申付之条、各相集、阿蘇大明神之行等、先規之姿を可有勤行事尤候、然時者、寺社居屋敷并沙彌一人宛之堪忍分、黒川村内を以可申付之間、各令還住、少庵をも可被結事肝要候也、

慶長四年十一月廿九日　清正（花押）

阿蘇大明神長善坊
寺社中

ここにはたしかに事実の錯誤がある。清正が、豊大閤の九州下向（天正15年）の時、阿蘇神主を邪心の構えのために成敗し、阿蘇神社を破滅したというのは、実は朝鮮の役の文禄2年に、梅北の乱で12歳の阿蘇大宮司惟光を斬ったことをさすであろう。そのあたりを曖昧に表現し、秀吉の死後、豊国廟をつくるに際し、阿蘇神社を復興し、坊舎を黒川村（現坊中）に復興し、寺僧を還住せしめる旨を令している。ここには矢部にいた阿蘇氏を阿蘇谷に神主として居住せしめ、神社を復興し、山上にあった西巌殿寺の諸坊を荒廃の故に黒川に移し、定住せしめようとした意図がうかがわれる。それは清正の施政の方針であろう。ここには阿蘇氏、阿蘇神社、

西巌殿寺のつよい結びつきを破壊し、自己の支配、監視のもとに置こうとする意図がある。西巌殿寺は本堂のみを山上に残す（明治初年まで）ことになったのである。この清正の圧力によって、36坊52庵は修験の勢力を弱め、それぞれの坊は門徒との結びつきを強くするほかに生きる道を失なったのである。(1)

この具体的な内容は、細川氏の入国のときの社領総目録にあらわれている。それは上の加藤氏の阿蘇氏弾圧の結果をそのまま反映したものであろう。

細川氏奉行衆社領総目録（西巌殿寺文書 206）

（折封ウハ書）　浅山修理亮
「阿蘇宮領惣目録　田中兵庫助
　　横山助進」

阿蘇宮社領高九百八拾九石六斗壱升之内配分目録

一、高三百五拾八石三斗四升　神主

一、高百六拾六石五斗八升　社家中

一、高百八拾九石弐斗　衆徒中

一、高百六拾石八斗　行者中

一、高百石　御神事領

一、高四石七斗　霜宮分

一、高参石四斗　経坊

一、高壱石五斗八升　鐘撞

一、高五石　大山寺

以上

右、任先規無相違御寄進之旨、被仰出候間、如前之可有配当者也

寛永拾年正月七日　横山助進（花押）（黒印）

田中兵庫助（花押）（黒印）

浅山修理亮（花押）（黒印）

神主又次郎殿

阿蘇宮　長善坊

寺社中

神主の配分が加藤氏時代と同一であるのをみると、他もその時代のものを踏襲したのであろう。

2　加藤氏と下城氏

上のように、加藤氏の入国と阿蘇氏対策をみると、そこには明らかに意図的な削減弱体化があることが知られる。それは五十二人衆を中心とする国衆に対する施策、佐々氏の残党に対する処置と対応するものである。ことに古代末～中世を通じて、肥後におけるもっとも強大な阿蘇氏に対して、それを抑えるための方策が徐々に進められていたことは否定できない。

下城に対する対策も、この一環として捉えるのが妥当ではなかろうか。ただ阿蘇郡でも小国は交通上豊後の日田とふかい関係をもち、中世末には大友氏の勢力が浸透していた。

文永11年（1274）に蒙古襲来に際して北条時定が満願寺を創建し、経杲和尚を開基とする前には、小国地方は北里氏によって支配されていたと思われる。室原・下城両氏は、北条氏の滅亡後興り、その頃は北里氏が南小国を中心として小国の東部、下城氏が中部、室原氏が黒淵を中心とする西部を支配した。

それより先鎌倉末に北条氏の勢力が、阿蘇谷と小国の間に楔をうつ形で、満願寺を中心に形成され、阿蘇氏（西巌殿寺）の勢力の浸透をくいとめるために、阿蘇氏の天台宗に対して真言宗を勧請すると（北条氏は禅宗であるにかかわらず）、両者の間に大きな溝ができる。この北条氏～満願寺の結合によって、北里氏の勢力は西北に移ったと思われる。南小国の千光寺（現、満願寺支配）に藤原期の木造十一面観音立像があり、境内に平安末の天養元年（1144）12月13日の自然石の板碑があり、その下から唐末越州窯の経筒が出土しているのを見ると、すでに北条氏の入部以前に開発されていたことがわかる。それは北里氏の祖先によるものであろう。北条氏の意図もまた、九州中部に鎮することによって、九州の諸勢力の自由な交渉を断ち、同時に蒙古襲来に対処するという、二つの目的をもっていたであろう。しかも小国では北条氏が滅亡すると、阿蘇氏の家臣下城氏が入国した。それは法成寺の梵鐘銘に享禄４年（1531）に下城上総介母公妙栄が寄進したとあるので、それ以前であろう。下城氏は、その後、阿蘇氏のほか豊後の大友氏とも結ぶことによってその勢力を維持しようとしたのであろう。下城文書は残っていないけれども、北里・室原文書における多くの大友氏関係の文書、ことに天正13年に父北里政義が阿蘇氏にそむいたにもかかわらず、当主北里重義の曽祖父以来「忠意の覚悟」を賞し、給地を阿蘇氏から安堵されていること（北里文書13）、同時に大友義統から北里政義・重義父子の忠貞を賞せられている点（北里文書６－14）など、阿蘇・大友両氏のあいだに揺れ動く小国の勢力の保身のようすを示している。それに比べると、室原氏は大友義鑑・義統の感状があるが、むしろ阿蘇氏寄りで、阿蘇惟将・甲斐宗運・親英らとの関係がふかいことが知られる。

下城氏の起源は明らかでない。北里・室原らの土豪とちがって、天正ごろは阿蘇氏の家臣と称していたらしい。『城主考阿蘇記録』によると、下城は裏ノ城（内ノ城）ともいい、阿蘇大宮司家人下城右近大夫惟隆・同上野介が相継いで在城した。天正15年秀吉公九州征伐の時、戸田

民部少輔重氏（或は氏繁）が当城を攻陥した。惟隆の子下城九郎と云う者は後加藤清正当国領地の時加藤に仕えた、という。

戸田氏は後述のように戸田勝隆・勝重の誤りである。秀吉の九州征伐のときというのも誤りで、天正15年末から翌年５月にかけての北里文書によると、下城氏はなお健在である。浅野長吉・黒兵庫・戸田勝隆・磯部家次の書状が北里文書のなかに残っていて、下城の消息を伝えるからである。『城主考』の説は、北里文書のよみちがいであろう。まず天正15年12月の島津家臣の連署奉書がある。

島津家々臣連署奉書（北里文書 22）

依弓箭成立、捨在所如当方退出、無比類候之間、肥後国従　公儀、於被宜仰出者、及其時北里ニ下之城之事、為新恩相加、可被宛行之、仍證文如件、

天正拾五
十二月廿八日

本田下野入道
三成（花押）

町田出羽入道
一言（花押）

（政義）
北里参河入道殿

伊集院右衛門入道
幸侃（花押）

島津軍が本国に退くにあたって、肥後国は公儀の仰せを待ち、新恩として北里・下城を宛行わるべし、と言っている。したがって島津にとっては北里と下城は同等である。

浅野長吉の天正16年４月10日、５月６日の北里三河入道（政義）への書状は、使僧による送物を謝し「御還住尤候」といい、また「かすへ殿（加藤清正）事、御まへよく候て」云々とあり、清正が好意を持っていることを述べる。

黒兵庫書状（北里文書 25）

貴所御在所小国不澄候間、佐渡ニ御座候而、可然候、恐々謹言、

（天正十六年カ）
正月一日

黒兵庫
（花押）

北里殿
まいる御宿所

ここでは小国が平静でないので、佐渡に御座あるべし、といっている。小国が静かならずというのは、島津の影響なのか、五十二人衆の反乱に関するのか分らない。下城氏は北里氏らと五十二人衆に加担したが、成政に内通し成政を勝利に導いているので、「不澄」という表現は、じっさい動いたとは思われない。しかし以下の書状によると、その一味という口実で誅伐されたことはたしかである。

浅野重次書状（北里文書 27）

御折紙拝見申候、仍御身上之儀、戸田殿近日（勝隆）此方へ御越候間、其刻爰元にて可申候間、可被御心安候、戸田殿此方へ御出候ハ、貴所様も御出可有候、相濟候様ニ可仕候、恐々謹言、

（天正十六年カ）　浅野久兵衛尉
重次（花押）

北里三河守殿
御報

戸田勝隆が来るので、身上のことは相談されたい、と云っている。身上のこととは、先の小国が平静でないとあること、次の戸田氏の判物にあるように下城に関係あるように思われる。

戸田勝隆判物（北里文書 28）

下城肝煎、如前々きもをいらるへきよし可被申付者也

五月廿五日　戸田民部少輔
勝隆（花押）

北里三河入道（政義）とのへ

磯部家次書状（北里文書 29）

態一書令啓上候、仍而其元北里之三河と申候仁、民様（戸田勝重）より被仰付候、然者下城同名者、一両日罷出候よし申候、貴所さま御存知にと候条、何と成共三河と御談合候て、可被仰付候、懇之儀者、被使僧可被申候、恐惶謹言、

五月廿八日　磯市兵
家次（花押）

戸田興左様
人々御中

小国が「不澄」であるのは下城氏のせいで、北里氏も疑念をもっており、浅野、戸田氏に訴えると、よく注意し世話せよといい、また下城は一両日中にやって来る、とある。従って『城主考』のように戸田氏が直接討伐したわけではない。しかも5月28日の書状についで、閏5月14日には清正から北里三河入道に、下城右近を打果した感状が送られている。広津にてとあるので、家次書状に「一両日罷出候よし申候」というのと関係があるのではなかろうか。清正は入国の時北里氏宛に次の「定書」を与えている。

加藤清正定書（北里文書 23）

一、国中一揆候といへ共、去年之儀者、手百性（ママ）之分被成　御免、御検地被仰付上ハ、如前々罷直、耕作等無如在可仕事、

一、手百姓一揆　御赦免候上ハ、たがひ之諸道具取散候共、いしゆいこん有間敷候、若此

旨相背者於在之者、至隈本ニ可申越事、

一、国中麦年貢之儀、御検地候上を以、三分二召置、三分一ハ百姓ニ可遣候旨、被仰出候、雖然諸百性迷惑候躰見及候条在之、其立毛之上ニ而、百性共堪忍續候様可申付事、

一、在々出置候上使之者、対百姓ニ非分之儀於申懸者、以目安可直訴事、付リ、麦年貢納取代官之外ニ、何々諸役申付者共、慥之墨付無之者、其在所之代官へ引合、其上を以、何々諸役可相調事、

一、從此方何々儀に申付候上使にて候共、非分候之儀申懸候ハヽ、其上使と申事有へからす候、少之儀ニ而候共、以目安可直訴候、遂糺明を堅可申付候事、

一、麦年貢定物成之所、我々直に相定、書付を在々肝煎に相渡候外に、少も不可有別儀候、付り、隈本へつめ夫之儀、拾石ニ一人ツヽ可出候、若不入候而歸候共、奉行に礼銭少も不可出事、

一、在々質人出置、替候時礼儀に立寄候者、上使ハ不及申ニ、百姓まて可為曲事、付り、ふしん道具薪等申付之時ハ、人夫数ハ百石ニ付而二人ツヽ、隈本へ持せ可越候、右条々相背者候者、堅可令成敗者也、仍下知如件、

天正拾六年後五月六日　加藤主計頭（花押）

北里三河入道殿

同左馬とのへ

これは肥後国中（清正の支配下）に下された布告であろうが、ことに長文で北里文書にのみのこっているのは、阿蘇に対する厳重な措置を思わせるものである。

しかも同年一か月余ののち、北里氏に対して、清正はつぎの書状を出している。

加藤清正書状（北里文書　30）

態申遣候、下城右近儀、於廣津ニ打果候由

其聞候、然者女子之儀何ニ隠居候共、相尋一類共々不残可相果事、可為忠切候、為其申遣、恐々謹言、

（天正十六年）　　加藤主計頭

閏五月十四日　　清正（花押）

北里三河入道殿

同左馬とのへ

すなわち清正は下城右近を北里氏をして打果させている。それでもなお不備で、女子共も一類をのこさず、探し求めて打果すべきことを命じている。この清正の書状には岩間吉述の添状がある。

岩間吉述添状（北里文書　31）

猶口上可申候、以上、

急度申遣候、下城はて候由、則主計頭殿（加藤清正）申上候、いつく候共、女子御はたし可有之由候て、

御書被遣候、則持せ候、御きも入候て、御打尤ニ候、猶此使者可申候、恐々謹言、

（天正十六年）壬五月十六日　　岩新兵衛吉述（花押）

北里三河殿

同左馬助殿まいる

（裏書）「岩間新兵衛」

次いで6月7日付の、下城右近の一族の下城伊賀以下四人を豊後日田で打果したことに対する清正の賞状があり、さらに慶長13年の清正の黒印状がある。

加藤清正書状（北里文書　32）

以上

今度下城伊賀事、豊後日田ニ隠居候を、貴殿才学を以打果、則伊賀首并下々四人以上首数五ツ見届、忠節成儀とも存候、猶岩間新兵衛可申候、恐々謹言、

（又々）

六月七日　　加藤主計頭清正（花押）

北里左馬助殿

加藤清正黒印状（北里文書　33）

宛行所領之事、益城郡赤見村之内を以、百五拾石遣之候、全令所務、可抽忠勤之状如件、

慶長十三年八月廿六日　　清正（黒印）「履道応乾」

北里左馬殿

前文書は天正16年のもので、下城一族5人を斬っており、中心の下城伊賀は「豊後日田に隠居候を」とあり、また「貴殿の才学（覚）を以て」といっているので、北里氏が自発的に下城氏を打果しているようにも受とられるが、清正の数回の感状、慶長13年における忠勤の故に赤見村150石の加増は、朝鮮役をはさんでいるけれども、下城討滅と無関係ではないように思われる。おそらく阿蘇氏の阿蘇・小国地方における最大の勢力を滅殺するために下城誅伐が行われたのであろう。一族の一人が清正に仕えたという『城主考』の説も信頼できない。

3　加藤氏と中世領主

中世領主の大部分は五十二人衆の一揆によって覆滅し、阿蘇・小国も上の過程を経て後顧の憂いをなくした。天草に残った五氏、すなわち志岐麟仙・天草種元・上津浦種直・大矢野種基・栖本親高らは、天正17年（1589）の小西行長の宇土築城のときの賦課にそむいて反抗したので、行長は清正の協力をえてこれを平定した。

金峰山周辺に在住した、いわゆる山ノ上三名字は佐々成政に加担し、清正にも忠誠をちかったが、７人扶持におとされた。また金峰山を中心に、その東北による真言修験の勢力は見過せないものがあった。それは那智、熊野を称する数多くの神社が今ものこり、真言宗西安寺の遺跡、康平寺があり、それらはもと一体となっていたと思われる。これはおそらく相良氏の一族である山北相良を中心に形成されたものであろう。清正が国道三号線にそう熊本市池田町の山伏塚で、熊本城の秘密を知りすぎた山伏を斬ったというのは誤りで、むしろ金峰山修験に対する政策であるように思われる。森本一瑞の『肥後国誌』には「真言山伏故アリテ此所ニテ刑セラレ、ソノ遺骸ヲ埋シ所」とあったが、明治の初めの水島貫之は城内の様子を知りすぎた山伏刑死の伝説を採用している。森本一瑞は、碑面には、「権大僧都法印龍蔵院慶長」とあり、むかし慶長十五年の年号がよめたと伝える。現在二つに折損し、上方は胎蔵界大日の種字**ア**の下に「大越」とあり、下方の石には「印龍蔵院　孝子敬白」とある。

『佐田家文書』には、三ノ岳聖徳寺は昔は三十六坊をもつ大寺で、境内は三里四方もあり、東は室園村きわまで、南北も同程度であった。加藤氏入国のとき、聖徳寺の住職山伏父子を呼びだし、城下に転居するか、他国に退去するかを迫った。山伏父子は清正のもとを辞し、出京町を出て、父子共に切腹した、という。しかし三岳山聖徳寺は天台宗で、菊池氏の帰依をうけ、清正もまた参詣し境内四方八町を寄進した、と伝える。これは『肥後国誌』に「真言山伏」とあるのに合わない。おそらく清正は金峰修験の勢力の覆滅をはかり、その結果が山伏の自刃となり、のち碑が立てられたのであろう。以後金峰山修験はほとんど見られなくなるのである。

このように旧勢力の除去を徹底的に行い、加藤領では川尻・隈府・筒岳・蟲岳・内牧・田浦・佐敷・津奈木・水俣に、小西領では隈庄・木山・矢部・古麓など主な旧城に城代をおいて守備をかためた。

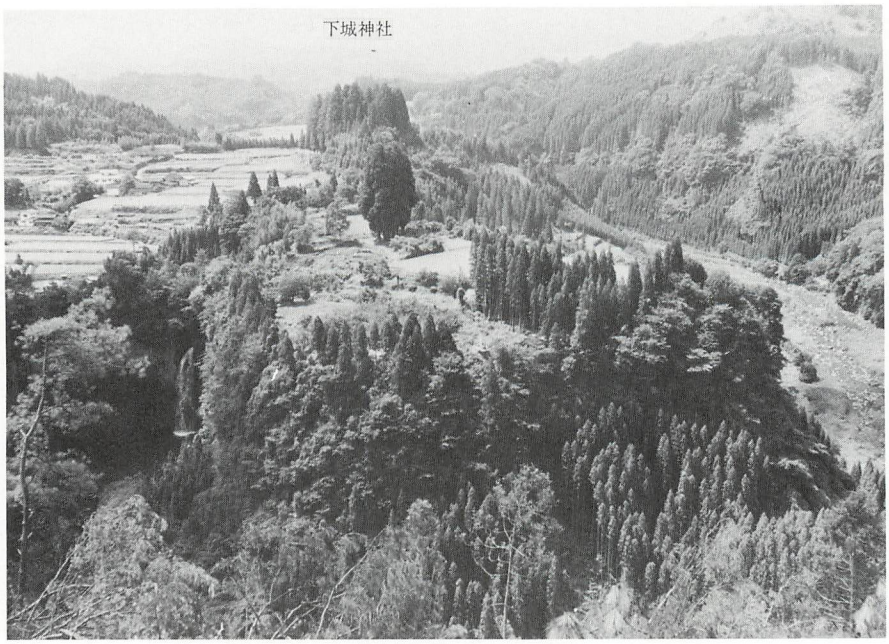
阿蘇氏・下城氏に対する清正の処置は、彼の峻厳な施政の態度をうかがわしめるものである。その他の中世豪族の処遇の詳細は注(2)の研究にゆずりたい。

注　(1)松本雅明「九州中部における天台と真言―修験道を中心に―」（天台学会編『伝教大師の研究・附篇』昭和54年。）

(2)森山恒雄「加藤・小西の領国体制」（『熊本県史』総説編、昭和40年）。

図　　版

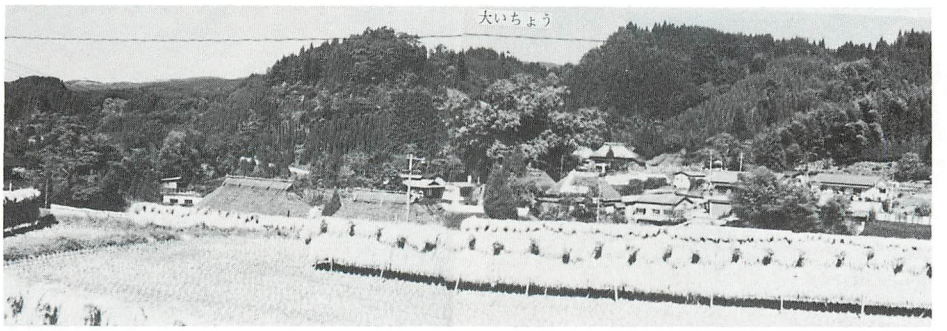
図版 1



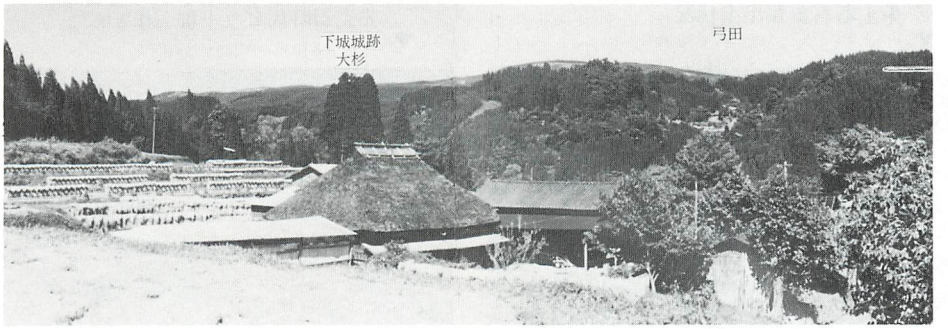
下城遺跡景観（東北より）

下城の集落景観（東北より）

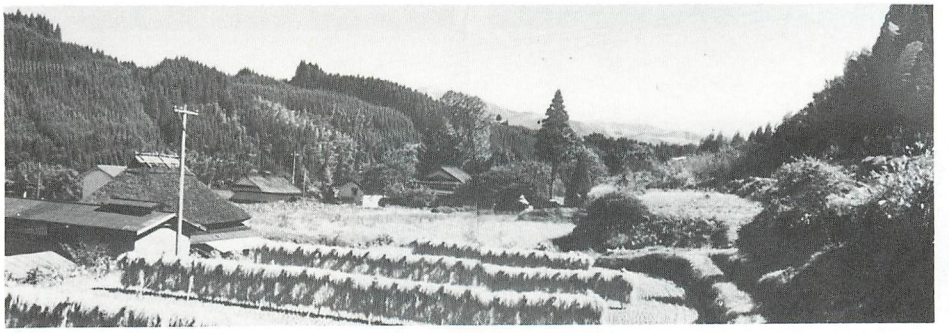
下城遺跡の景観と集落景観



下城本村・坂下方面を望む（西より）



下城城跡方面をみる（南より）

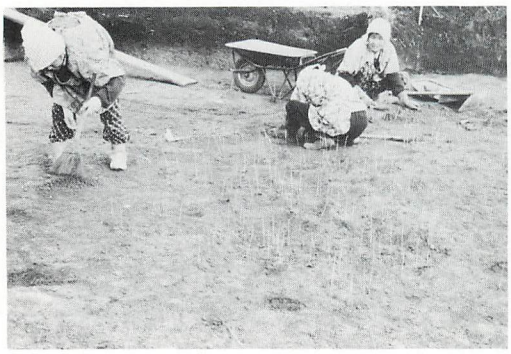


下城本村周辺（西上方より）

下城若宮神社（東より）

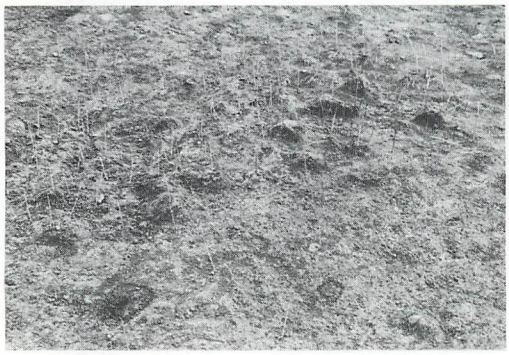
下城の集落景観と下城神社

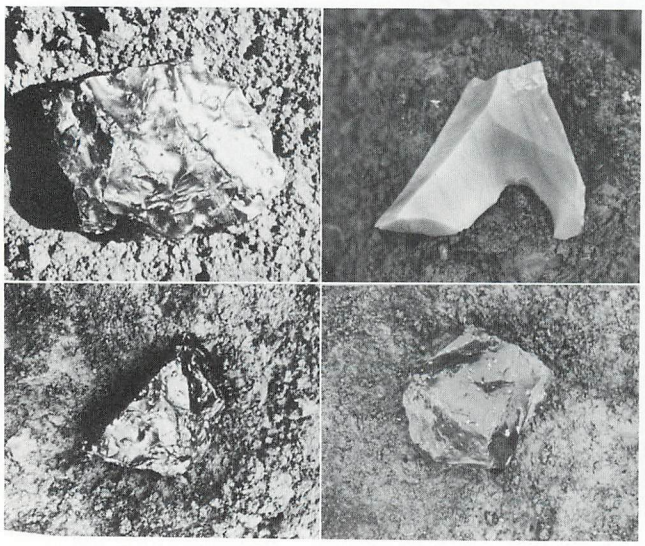
図版3



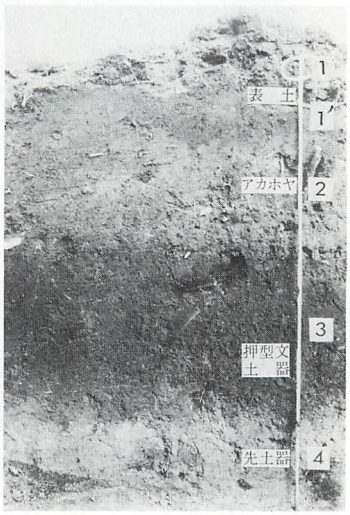
▲ 先土器石器類出土状況 ▼

▲ 先土器時代ピット群（住居址？） ▼



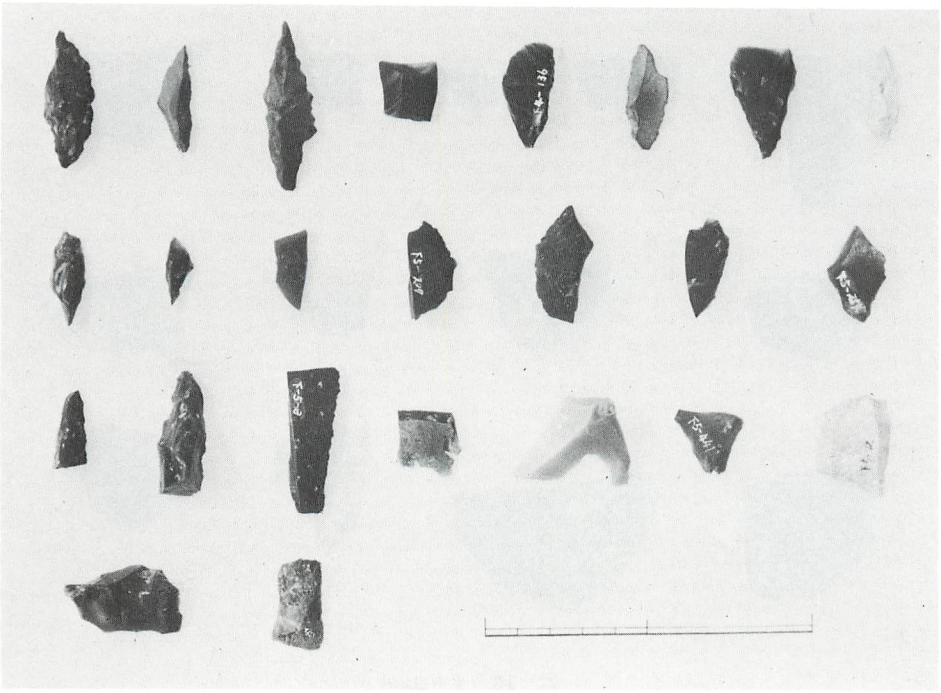


石器出土状態



土層層序

先土器時代の遺構と遺物出土状態

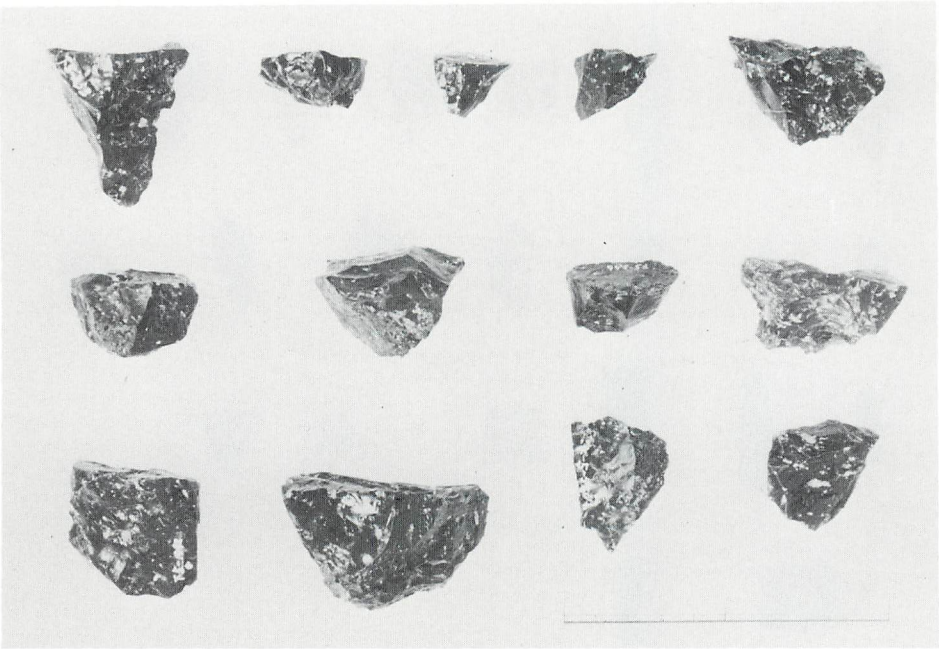


先土器時代石器

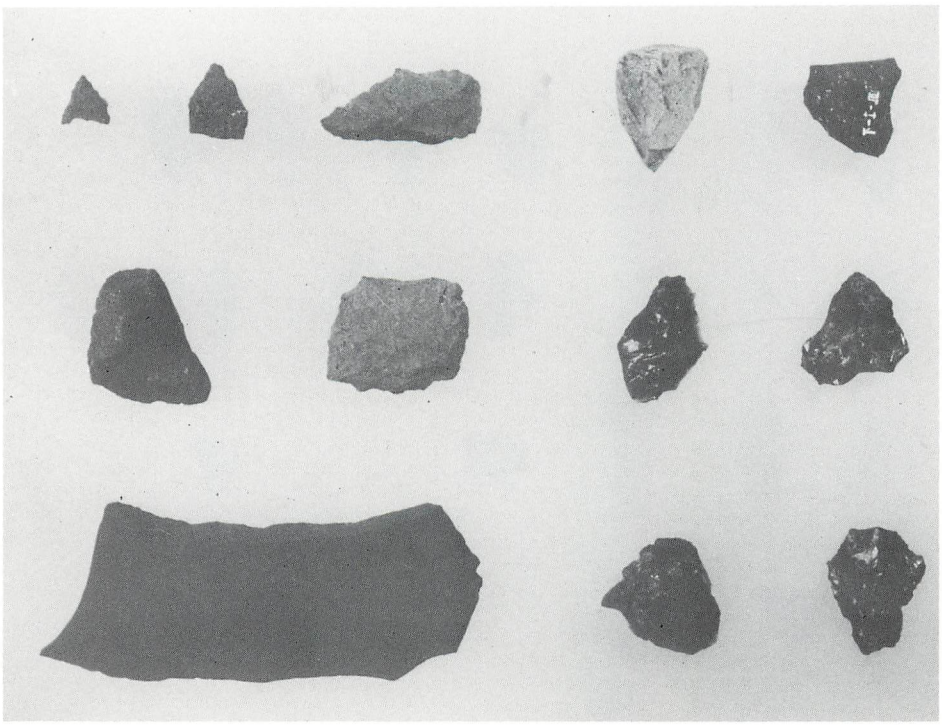
同　上　裏

先土器時代の石器

図版 5



石　核（先土器時代）



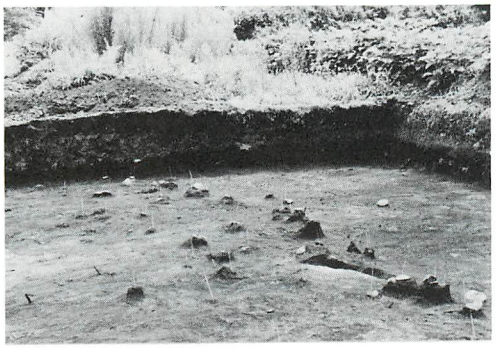
第Ⅲ層出土石器

下城遺跡出土石器

図版 6

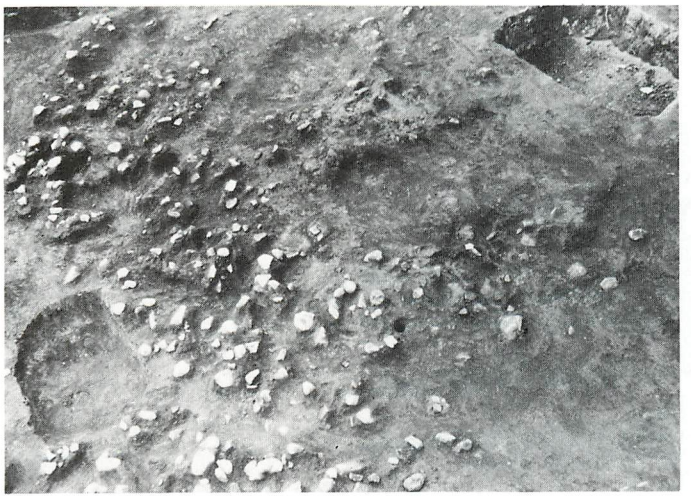
第Ⅱ調査区（北より）

第Ⅰ調査区（南より）



第 Ⅱ 調 査 区

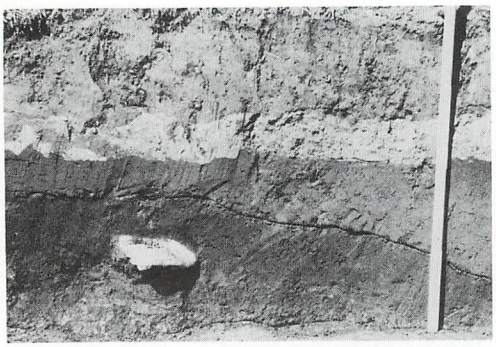
第Ⅰ調査区（北より）



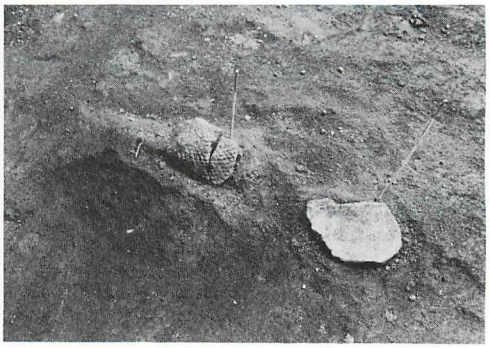
第Ⅱ調査区　北側拡大部分

礫 群 発 見 状 況（縄文）

図版 7



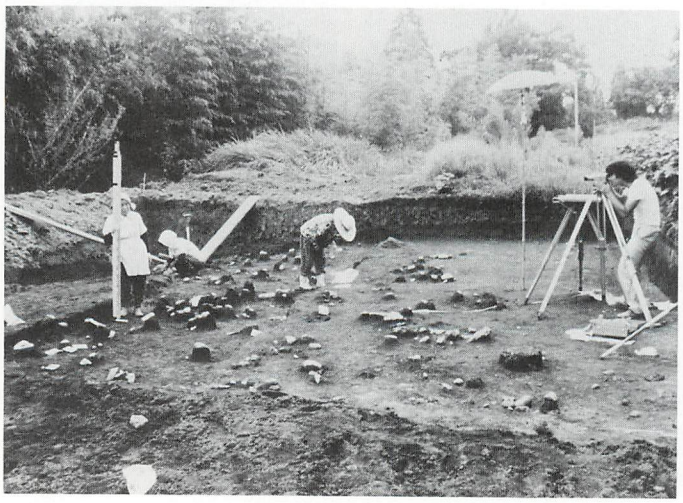
第Ⅱ調査区の土層



土器出土状況　第Ⅰ調査区

2号集石遺構

同　上

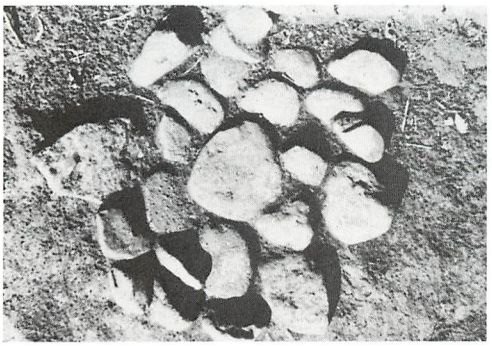


第二調査区　調査風景

遺物出土状態と調査風景

4号集石遺跡（発掘前）

3号集石遺構（発掘前）



同　　上（発掘後）

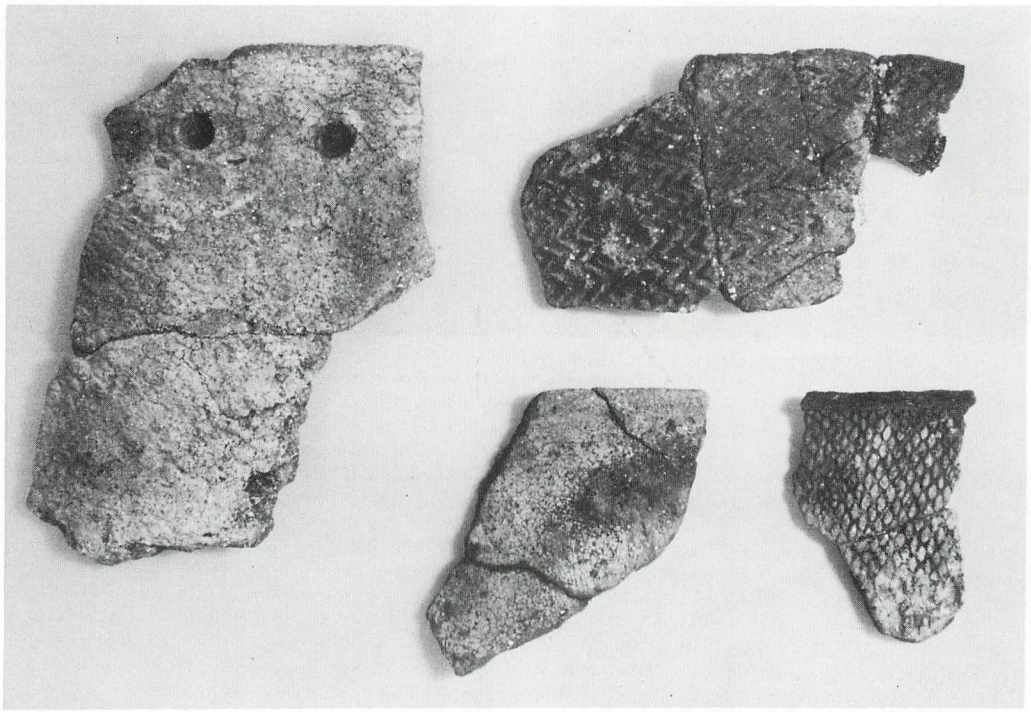
同　　上（発掘後）

同　上（同上斜から）

同　上（同上斜から）

集　石　遺　構（縄文）

図版 9

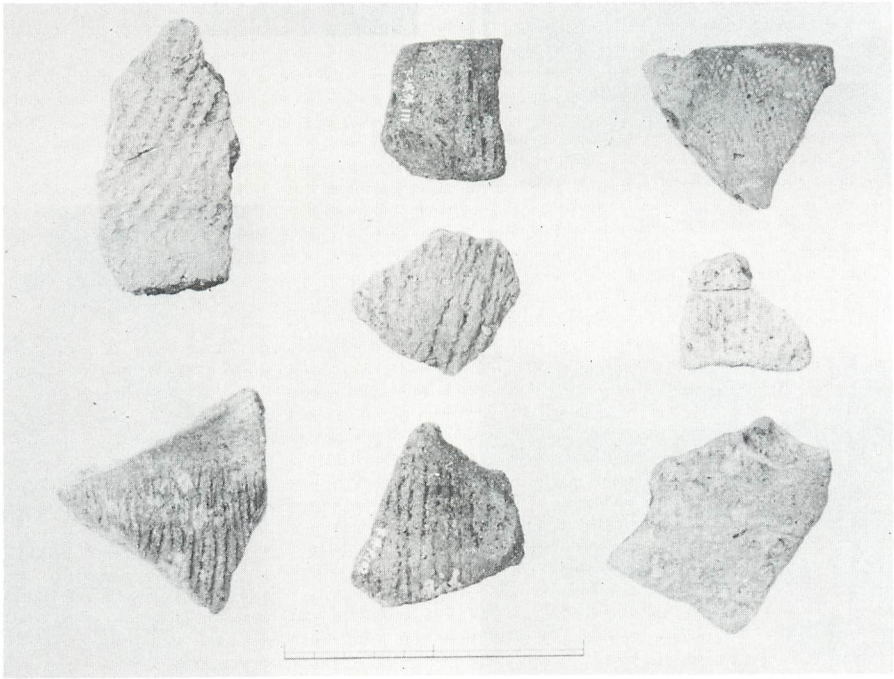


押型文土器

押型文土器

出土遺物縄文土器 1

撚 糸 文 土 器



斜行縄文・撚糸文土器

出土遺物縄文土器 2

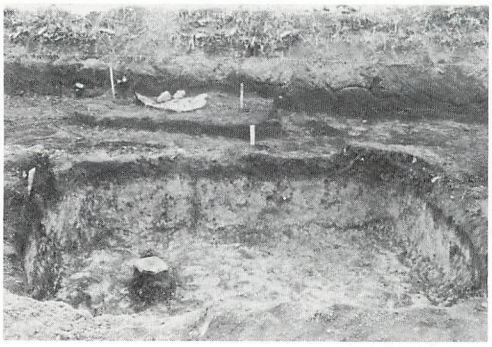
図版11

土　墨（北より）

堀　　切

土　墨　断　面

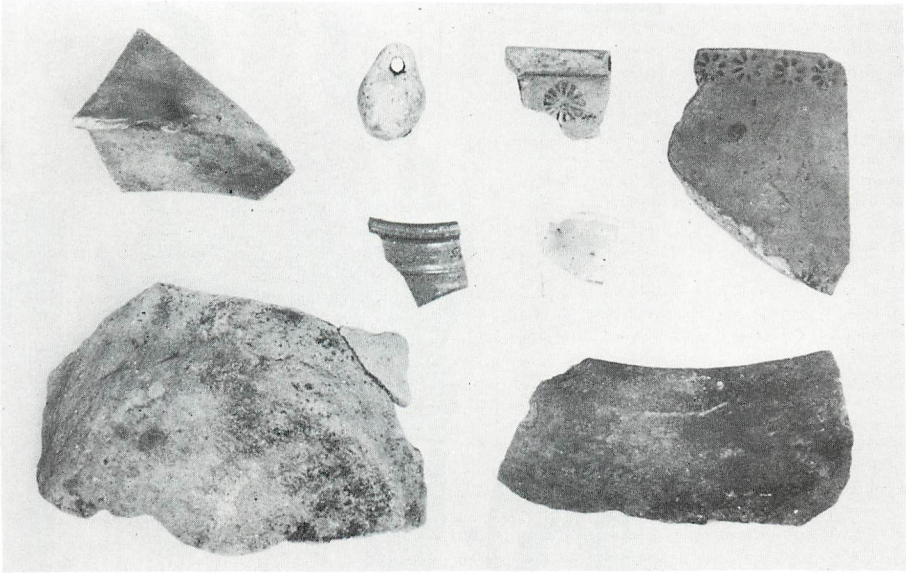
堀　　切



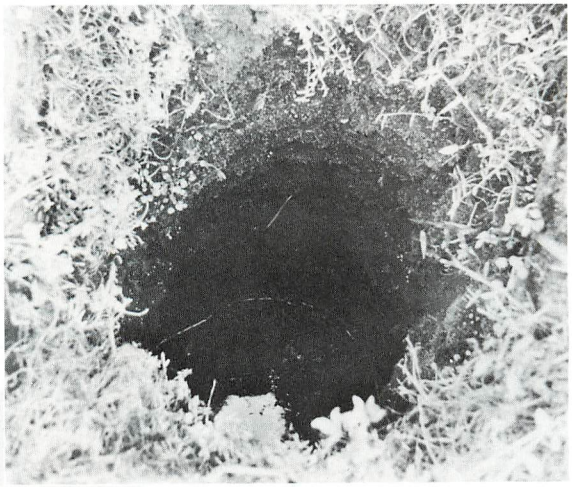
1　号　土　坑

溝　様　遺　構

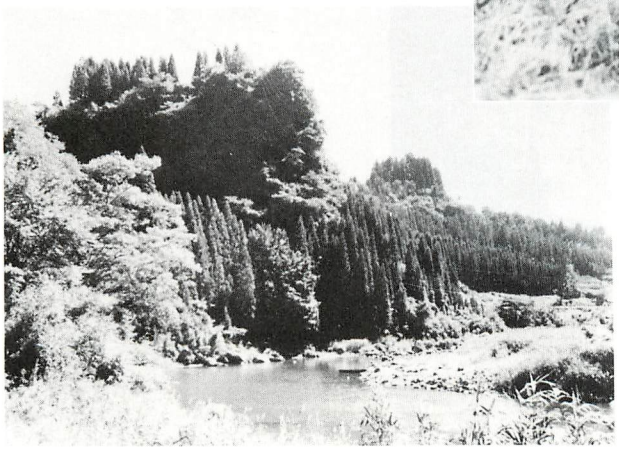
下城の中世遺構



下城遺跡出土磁器・瓦質土器他



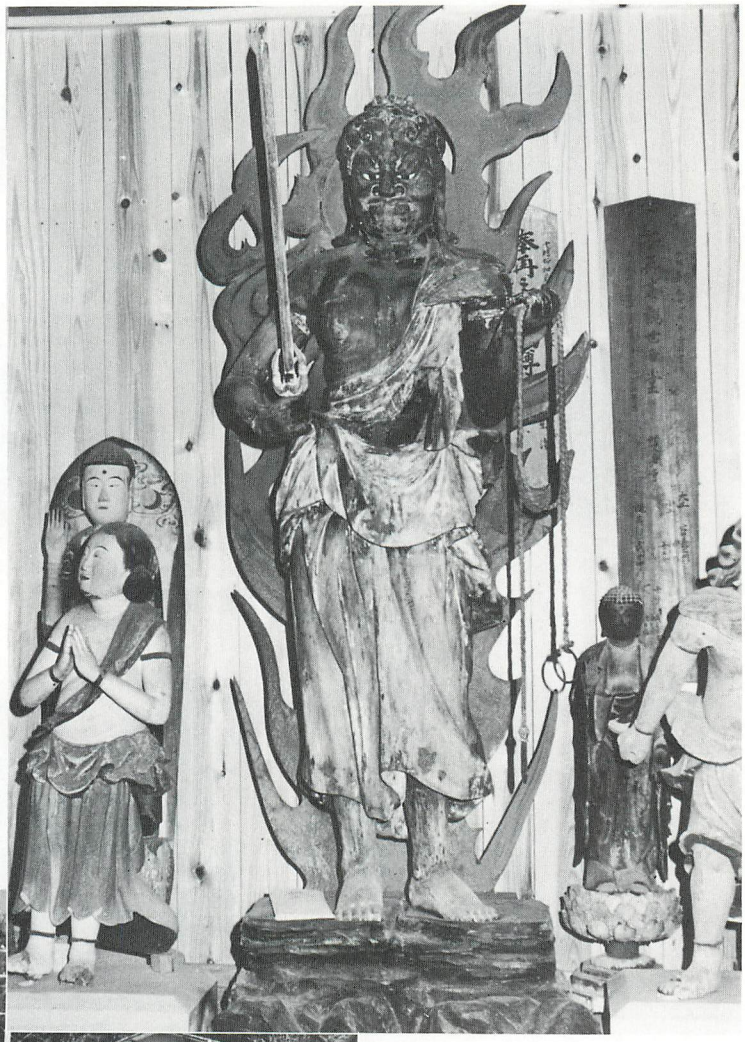
高屋敷ノ古井戸



下城城跡北より
（川ノ会合点付近）

下城遺跡出土中世遺物他

図版13



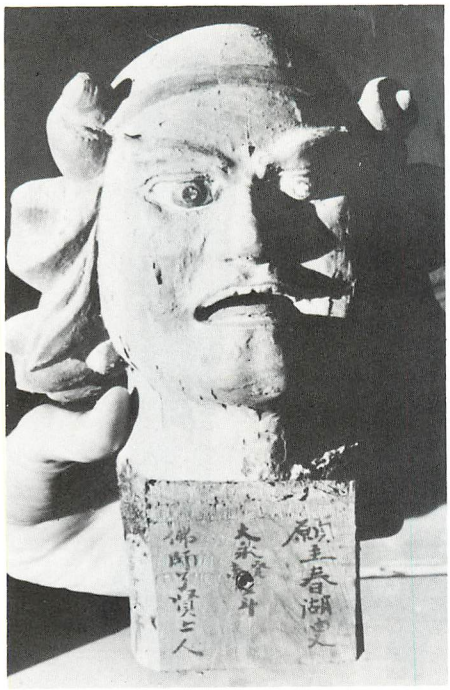
本　尊

堂　宇

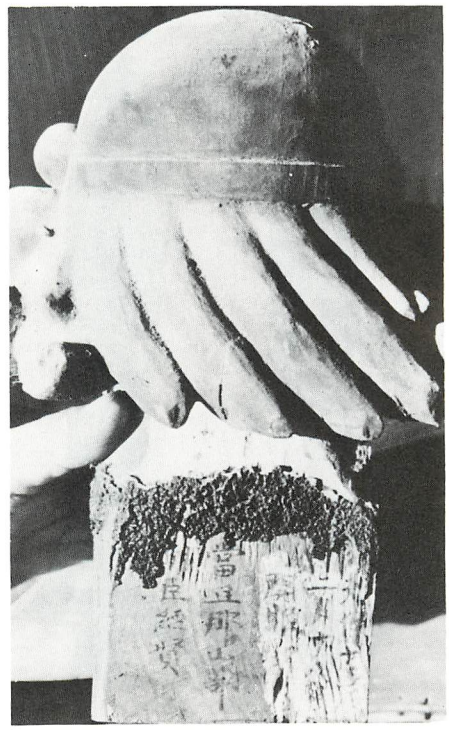
下城不動尊 I（本尊）

側　面

脇　侍



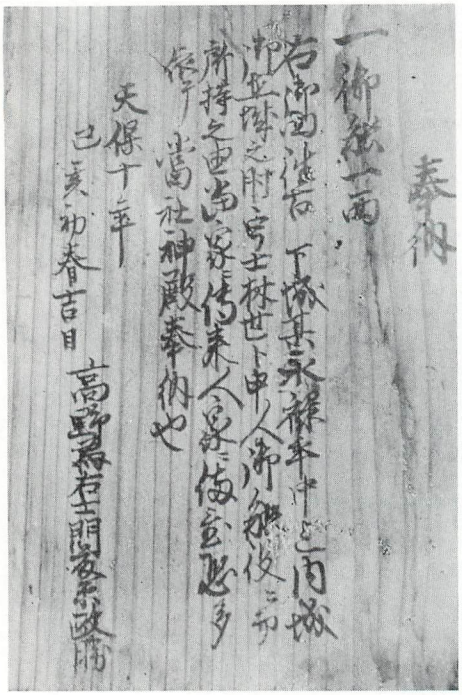
正　面



背　面

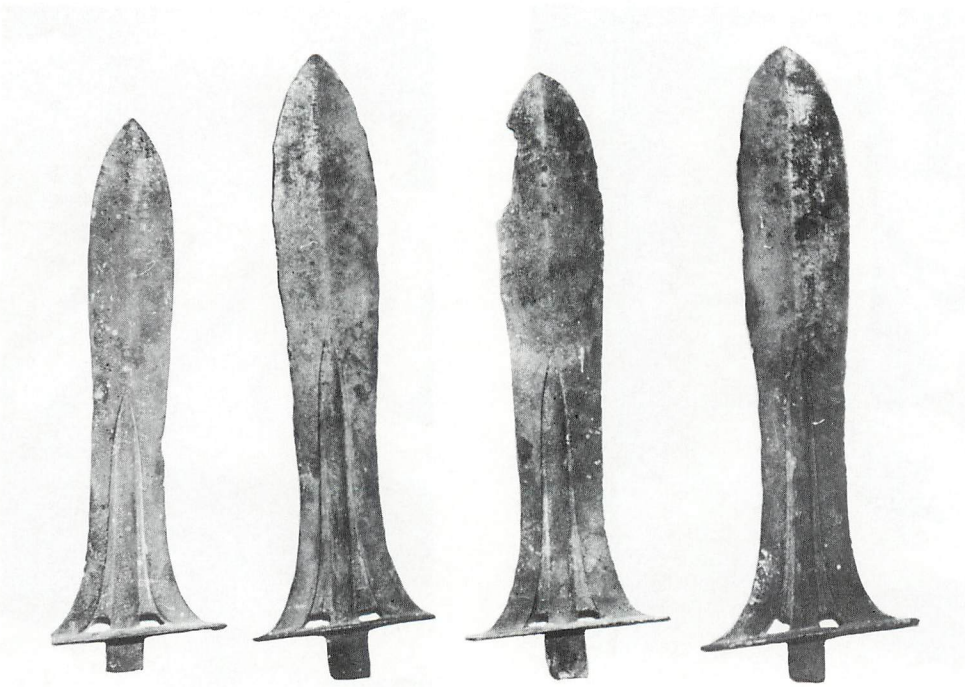
下城不動尊２（脇侍と銘文）

図版15



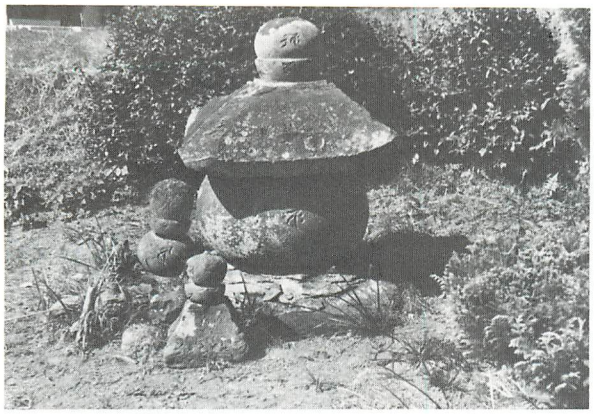
面　箱　書

奉　納　面
（南北朝のものとみられている）



銅　　戈

下城神社奉納銅戈と面



五輪塔　天正８年（伝下城上総介経賢墓）

笠　塔　婆

五輪塔　（伝妙栄墓と笠塔婆）

五輪塔（天文23年）

仏山の経塔（元亀３年）

下城周辺の塔碑　1

図版17

笠塔婆　下城・坂下（明応５年）

花山六地蔵幢　下城（明応５年）

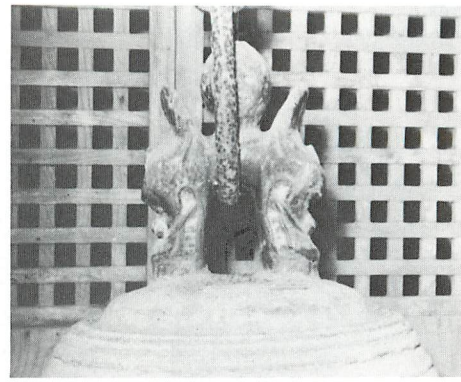
土田の六地蔵

市井野の宝篋印塔残欠

下城周辺の塔碑　2

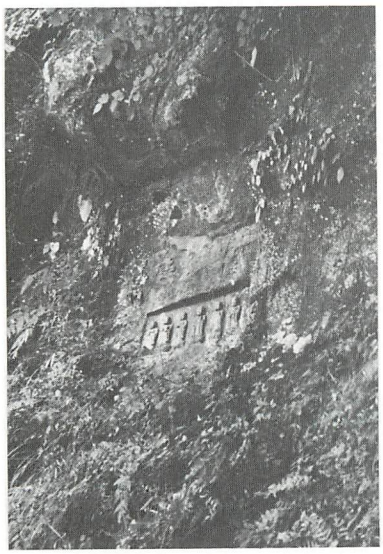
図版18

法成寺の梵鐘（矢津田）



同左　梵鐘の龍頭

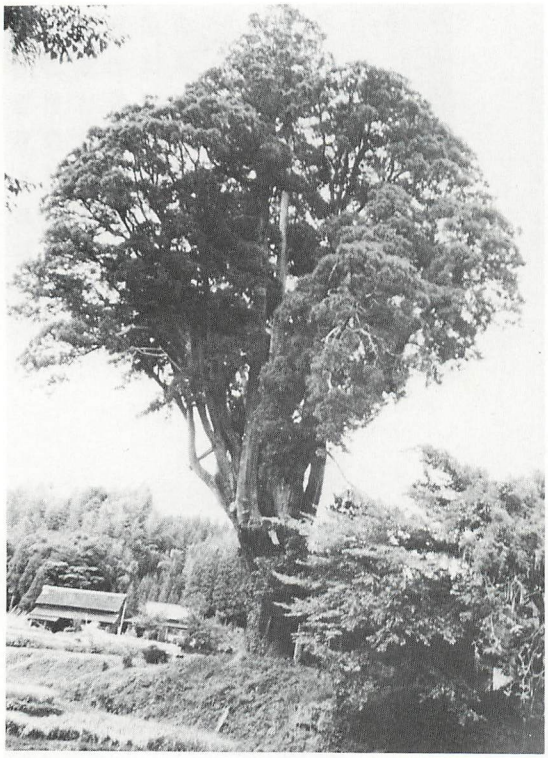
▲六地蔵
◀ 五輪塔
（上田・阿弥陀堂）



磨崖六地蔵（矢津田）

梵鐘と塔碑

図版19



城村　観音堂の大杉
（根元に右上の石塔がある）

奉読誦経塔（永禄２年）
五輪塔、宝篋印塔

千　光　寺

越州窯経筒（千光寺出土）

天養元年板碑（千光寺）

下城周辺の塔碑他

五輪塔（上田・大鶴）

墓地の中の五輪塔（上田・大鶴）

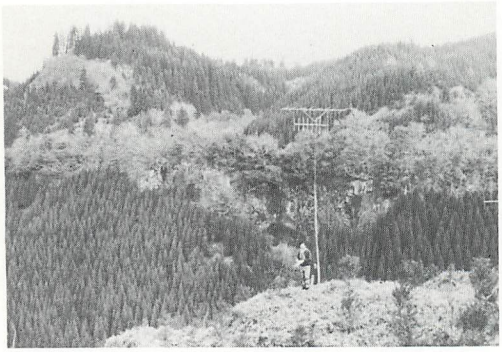
五輪残欠（中原・湯田）

六地蔵（満願寺）

六地蔵（中原・湯田）

宝篋印塔（中原・湯田）

図版21



鳶ノ尾城（西南の木戸城より）

小鶴城（東北の木戸城より）

木戸城比定地
（北東側段落ち部分）

波居原（はいばる）の宝篋印塔
後の山は亀ケ城

動馬（どうめき）木城と志賀瀬六地蔵（満願寺）

天然記念物阿弥陀杉（黒渕）

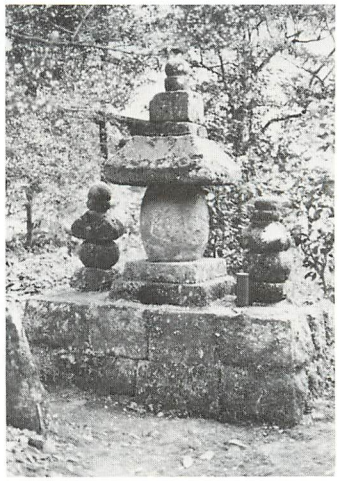
下城周辺の中世城跡他

北條随時の墓

北条時定の墓

北条定宗の墓

北條氏家老　児玉源八郎墓



宝　塔（文中4年銘）

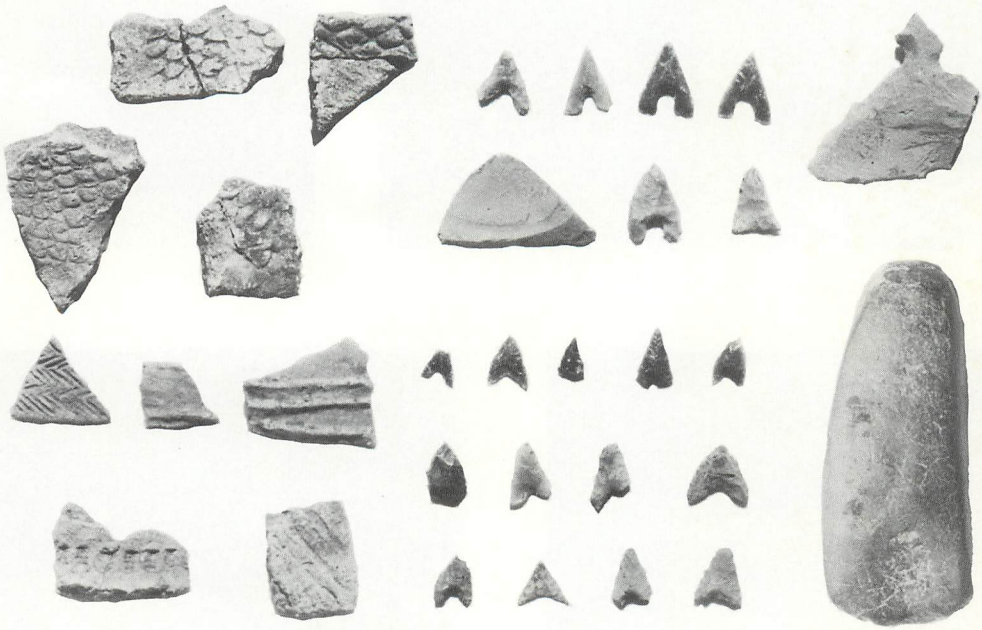
千人塚（五輪塔群）

歴代住持ノ墓（中央は経杲和尚）

満願寺の石塔群

図版23

下城遺跡見学会（下城小学校）



下城・田ノ尻採集の縄文土器と石器

下城遺跡見学会と下城周辺出土遺物

下 城 遺 跡 I

熊本県文化財調査報告　第37集

昭和54年3月25日　印刷
昭和54年3月31日　発行

発　行　熊本県教育委員会
熊本市水前寺町18番1号

印　刷　中央印刷紙工株式会社
熊本市田崎2丁目5－38
電　話（0963）54－4191

下城遺跡Ⅰ正誤表

頁　　行	正	誤
例　言　2行	○伴う	×併う
目次本文　12行	(1)　遺構○	(1)　遺跡×
〃付篇付一　3行	……地質概要	……地質の概要×
〃　〃　〃　6行	(2)　洪積世火山灰○	(2)洪積火山灰
〃　〃　〃　9行	4　火山灰層序の熊本周辺遺跡との対比○	4　熊本周辺遺跡の火山灰層序との対比×
〃　〃　〃　10行	5　まとめにかえて○	5　まとめ
〃　〃　付二	笠塔婆……92○	笠塔婆……91×
挿図目次　2行	第2図　下城遺跡の位置と環境○	第2図　下城遺跡位置と環境
図版目次　23行	図版23……出土遺物○	図版23……出土遺跡×
21頁　挿，図	第6図　……出土状況図○	第6図……出土状況
41頁	第16図　第Ⅱ調査区Ⅲ層……○	第16図　第Ⅱ区Ⅲ層……
54頁　表	表6　縄文土器種類別出土数○	表6　縄文土器種別毎出土数
57頁　挿　図	第25図　中世土拡と……○	第25　中世土拡と……
76頁　挿　図	a；沖積層　未固結粘土砂礫○	a；沖積層　未固結粘土礫礫×
81頁　4行	降下火山灰層○	降下火山層
〃　6行	見るべきものがない。○	見るものがない。
〃　7行	火山灰層が連続して○	火山灰層が連結して×
〃　25行	黒色細粒シルト○	黒色屑粒シルト×
82頁　4行	第38図にまとめた。○	第39図にまとめた。×
83頁　表	アカホヤ火山灰の放射性炭素年代(町田・新井1978より)○	アカホヤ火山灰の放射性炭素年代
〃　〃	アカホヤ火山灰と縄文土器との層位関係（町田・新井1978より）○	アカホヤ火山灰と縄文土器との層位関係
86頁　14行	低所の下刻をつづけ○	低所を下刻をつづけ×
〃　17・20行	姶良Tn火山灰○	姶良Th火山灰×
87頁	花山の五輪塔群他○	花山の五輪塔群地×
92頁	于時天文十九白戌庚	于時天文十九日白戌庚×
95頁　11行	経塔が立っていた(今では倒伏)。	経塔が立っていた。(今では倒伏)。×

この電子書籍は、熊本県文化財調査報告第 37 集を底本として作成しました。閲覧を目的としていますので、精確な図版などが必要な場合には底本から引用してください。

底本は、熊本県内の市町村教育委員会と図書館、都道府県の教育委員会と図書館、考古学を教える大学、国立国会図書館などにあります。所蔵状況や利用方法は、直接、各施設にお問い合わせください。

書名：下城遺跡 1
発行：熊本県教育委員会
〒862-8609　熊本市中央区水前寺 6 丁目 18 番 1 号
電話：　096-383-1111
URL：http://www.pref.kumamoto.jp/
電子書籍制作日：2016 年 3 月 31 日